離縁します！～小話集～

おこた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
離縁します！～小話集～

【Ｎコード】
Ｎ９７６５Ｙ

【作者名】
おこた

【あらすじ】
この小話集は、「離縁します！」に感想を送っていただいた皆様へのお礼小話として作っていたものを、まとめてＵＰさせていただいております。タイミングを逃した小話や、お倉入りになっていた小話などもＵＰして行きますので、時系列、掲載順等は一切無視して頂けると嬉しいです。

目指すは●●使い？

目指すは●●使い？

妻「旦那さま、猛獣ですって」

夫「・・・」

妻「でも、旦那さまの場合は猛獣というよりも、ぬいぐるみですよね。髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし」

夫「・・・・・・」

妻「肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

夫「・・・・・・・・・」

妻「あ、ということは、私ぬいぐるみ使いを目指せばいいんですね！」

よっしゃ、がんばるぞーっ！

と、勢いをつけてこぶしを振り上げた妻の後ろで、夫が自分のひげに手を当てて何やら考え込んでいたとか、いなかったとか。

目指すは●●使い？（後書き）

こうして、おこたの妄想劇場が始まった、と（笑）

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（前書き）

初の夫視点です！

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）

朝。
腕をとられる感触に反射的に相手を締め上げた。
いくら寝入っていたとはいえ、接触を許すなんて、以前なら決してしなかった油断。
自分の失態を自覚するよりも先に、接触した不審者を行動不能にするべく体が勝手に動いていた。
不審者は気づかぬうちに接触してきたとは思えないほど軽く取り押さえられ、柔らかな首に腕を押し当てただけで、抵抗どころか、身動きひとつしない。

・・・軽く？　柔らかい？

寝起きではっきりしなかった意識が一気に覚醒する。
腕を押し当てた相手は、数日前に妻になったばかりの、女性だった。

すぐに気絶してぐったりとしている体を引っ張り起こして活を入れ、意識を戻させた途端にひどく咳き込む小さな妻。

その儚げな様子に、ひどく狼狽えて、小さな背をさする。
なんてことを。
危うく自分の妻を絞め殺すところだった。
触れられるまで接近に気づかないもなにも、同じ寝台で休んでいるのだから、当たり前だ。

謝罪をしようと口を開きかけると、辛そうに呼吸を繰り返す妻が、

咳で潤んだ大きな目で見上げてきた。
言葉以上に雄弁に心情を語る妻の瞳に、疑問、驚愕、思案と次々に感情と思考の片鱗がよぎり、最終的に何かを決意したのが見て取れた。

「・・・今夜から、物置部屋で寝ます」

それから責めるでも怒るでもなく、淡々と物置部屋を片付けはじめ、昼に戻って来た時にはどこから見つけて来たのか、予備の寝具まで用意されていた。

妻は本気だ。

外に出て空を見上げると、この時期独特の暗雲が立ち込め始めている。間違いなく、夜が来る前に強い雨が降るだろう。風向きは西方。
それを確認して、家の外からちょっとした細工を施した。

その夜。

物置部屋の雨漏りと隙間風がひどいから、と妻はいつも通り同じ寝台で休むことを受け入れた。

・・・妻が俺に慣れるまで、細工を戻すつもりはない。

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（後書き）

夫視点、需要があるかどうかも分からず、とにかく書きたかったから書いちゃった小話でした・・・。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（前書き）

童話の中でキャラ達に自由に動いてもらおうと思ったのですが、ちょっと予想外のことが起きました・・・

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・

？『赤ずきんちゃん』

配役
妻：赤ずきんちゃん
夫：オオカミ

妻「この配役、断固、拒否します！　どう考えても物語通りに赤ずきんが生き残れるとは思えません！」
夫「・・・」
妻「というか、旦那さま、赤ずきんちゃんのお話を知っているんですか？」
夫「（頷く）」
妻「え、じゃあ、最後にオオカミがどうなるかも？」
夫「（頷く）」
妻「・・・なんだか、もの凄く嫌な予感がするんですが。念のために、オオカミの結末がどうなるか言ってみてくれませんか？」
夫「満腹になる」
妻「なんで満腹で終わるんですか！？　いえ、ある意味、石で満腹になっているから合ってるのかも知れないですけど」
夫「（チラリと妻を見る）・・・」
妻「（ぞくっ）き、急に悪寒が・・・。だ、駄目です、オオカミが満腹満足で昼寝しているところしか思い浮かびませんっ！　すみませーんっ、物語チェンジで！！」
夫「・・・（妻に聞こえないように舌うち）」

？『シンデレラ』

配役
妻：シンデレラ
夫：王子様

妻「・・・旦那さまが、王子さま？」
夫「・・・」
妻「いえ、あの、私のイメージだと王子さまって爽やかでほっそりしてて、子供っぽいイメージがあるので。旦那さまの場合は、軍人さんとか狩人さんとかそういう力強くて厳しそうなイメージじゃないですか」
夫「・・・」
妻「衣装もなんだか旦那さまには小さそうですし。それに思ったんですけど、シンデレラが王子様を振り切ってうちに帰る場面、出来ませんよね？」

妻、まだ少し距離がある夫に背を向けて走り出そうとして、捕獲される。夫、ほぼ反射。

妻「ほら、やっぱり。離れててこれなのに、ダンス中の密着状態からなんて不可能もいいところです」
夫「・・・？」
妻「二人が出会うのは舞踏会ですから、ダンス中に鐘が鳴ってうち帰るんですよ、って、え、なんで衣装着始めているんですか、ちょっ、ああっ！？　やっぱり王子様の衣装は旦那様には小さいですねってダメ、ダメです、そんなに無理にひっぱったら衣装が破けちゃいますよっ！？」

夫、妻に止められて王子様役、断念。

？『ロミオとジュリエット』
※名場面のみ

配役
妻：ジュリエット
夫：ロミオ

妻「・・・う、うーん、これだったら場面が限定されていますし、大丈夫かな？」
夫「・・・」
妻「じゃあ、私はテラスに上がって、と。よし。旦那さまー、始めますよー、って、あれ？　旦那さま？」

さっきまで、こちらを見上げてスタンバイしていたはずの夫がいない。

妻「え、もしや私放置されちゃいまし・・・っ！？　・・・えーと、旦那さま？　壁を登ってきちゃったら、感動のシーンが、ただの逢引シーンになっちゃうんですが・・・」

息ひとつ乱さずにテラスの柵まで壁を登ってきた夫。

・・・結局、どの物語も始められませんでした。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（後書き）

物語の枠の中で好き勝手動いてもらおうと思ったのに、まさか物語自体が始まらないとは・・・。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（前書き）

「妻（極秘部隊所属？）から無茶振りされたら夫はどうするか？」がテーマ（？）です！

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！

夫には内緒で所属した私の部隊から、極秘任務状が届きました。
初めての任務です！
わくわくどきどきしながらその内容を読んだ私は、思わず、任務状を床に叩きつけてしまいました。

「夫に無茶振り」って、どんだけ無茶振りですか！？

それ、私がやるんですよね？
念のため、床に叩きつけた任務状の表書きを確認しますが、間違いなく私宛になっています。私にやれといっています。
ターゲットが夫という時点で、限りなく失敗に終わる気がしないでもないのですが。
とはいえ、これは任務です。部隊に所属している以上、任務は絶対に遂行しなければなりません。
夫にとっての無茶振りって、どんなことでしょう？

さまざまな可能性を想定し、吟味し、私はいくつかの無茶振り作戦を用意しました。
作戦決行は、夫が帰宅した、その時です！

・・・夫が帰ってきません。

すでに普段の夕食時間を過ぎてしまっているのですが、夫が帰ってくる気配が全くありません。
なんなんでしょう、この物悲しさ。
すごく楽しみにしていたお出かけの日に大雨が降ってしまったよ

うな、このやるせなさは一体どうしたらいいのでしょうか。

せっかく、無茶振りをたくさん用意して待っていたのに。

覚書に書き付けた作戦計画書には、こう書かれています。

『夫への無茶振り計画！

？夫に晩御飯を作らせる！（※胃薬用意）

？夫にギャグを言わせる！（ふとんがふっとんだー、的な？）

？夫に一発芸をさせる！（宴会のネタ練習として）

？夫に歌わせる！（※候補曲：『聖歌第２４章』、『語れぬ物語』、わらべ歌『隣の隣はだーれ？』）

？夫を爆笑させる！（わきの下が狙い目？）

・

・

・

？夫に恋愛本の一節を朗読させる！（※候補：『愛の萌芽』Ｐ３６７、５行目）』

文字を追って小さくため息をつきました。

・・・夫が帰ってこなくて良かったっ！！

なんですか、この計画。一体誰が考えたんですか、いえ私が考えたんですけども。

いくら初任務で浮かれていたとはいえ、改めて考えると、これは無いです。

？の晩御飯を作らせるのも、いろんな意味で私の命にかかわってきますし、それ以外のどれもこれも、ある意味一番ダメージを受けるのは、私に違いありません。

この作戦を考えているときは、完璧な作戦群だ！　と自画自賛し

ていたはずなのですが。というか、？にいたっては、夫が見て赤面してしまうような極めつけの台詞を捜して、一冊丸々読み込んじゃっていましたし。
ノリって怖いです。

初任務を失敗どころか実行せずに終わってしまうのは非常に後ろめたいのですが、私の人生がかかっています。うん、任務状は見なかったことにしてしまいましょう！

私は任務状をしまって、夕食を作って食べ、先に休ませてもらうことにしました。
・・・ソファの上に、覚書を出しっぱなしにしていることを、忘れたまま。

翌朝。
朝に弱いはずの夫に、とても手の込んだ朝食を用意され、『愛の萌芽』Ｐ３６７、５行目からの文章を一字一句正確に暗誦された私は。

・・・絶叫を上げて逃亡し、捕獲されました。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（後書き）

クマさんは、意外とハイスペックだということが判明した一日。

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（前書き）

7話の夫視点です。
妻もいろいろ頭の中でしゃべっていますが、夫も結構いろいろたくらんでます（笑）

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）

最近、妻の様子がおかしい。

急に話しかけてきたり、わがままを言いだしてみたり。何か欲しいものでもあるのかと思えば、そうでもないらしい。

何か心配事でもあるのか、時々見られていないと思ったときに考えこんでいる様子なのが気になるが、その原因は口にしようとしない。

そんな様子のおかしい妻が、俺の風呂あがりにハサミと櫛と剃刀を手に待っていた。

にこにことめったに見せないような可愛らしい満面の笑みで出迎える妻。その小さな手にはハサミと剃刀。

・・・なんだか、いろいろと残念だ。

妻が笑顔のままにじり寄ってくるところを見ると、どうやら、それらの道具一式は俺のために用意したものらしいことに気づいた。

とはいえ、剃刀はまずい。

小さな妻がハサミを持とうが包丁を持とうが全く気にならないが、剃刀はだめだ。

もし何かの拍子に俺が動いてしまったら、妻も無傷ではいられない。

ハサミや包丁なら、怪我をさせることなく取り上げることもできるが、刃を直接もつ剃刀は、どうしても怪我をさせてしまう可能性

がある。

さて、どうやって妻の意識をそらせるか。

ぐるりと室内を見回し、目についた椅子を妻の前に引っ張ってきて、当たり前のように座らせた。そのままの流れで妻から道具一式を取り上げても、妻は大きな目を不思議そうに瞬かせて、おとなしく座っている。

最近のやり取りの中で気付いたが、妻は、小動物の子供によく似ている。好奇心が強くて、臆病で。そのくせ、こちらが落ち着いて当たり前のようにふるまえば、それが当たり前なのか、と思い込む。多少の疑問は感じているようだが、拒否しない時点でこちらのもの。

無邪気な妻だ。

いつもまとめ上げている髪をほどいていくと、たっぷりとしたつややかな黒髪がうねりながら落ちてくる。

しっとりとした手触りの髪に、妻から回収した櫛を丁寧に通していけば、たったそれだけで、長い髪が滑らかに流れていく。

その感触を心地よく思いながら、ついでとばかりに妻に指圧を施してみた。

置いた俺の手が余るほど、薄い肩。

片手で指が回ってしまう、細い首。

指先だけで潰せてしまいそうな、小さな頭。

指圧が心地よいのか、うっとりと目を閉じていた妻の首から力が完全に抜ける。もう寝てしまったのか。

本当に、無防備な妻だ。

小さな体を抱き上げてやりながら、胸の内に、おかしさと慈しみともに、ほんの少しの苛立たしさが沸き起こる。こんなに何の警戒も無く寝てしまうなんて、よほど俺は信用されているのか。それとも、ただ、意識されていないだけなのか。

・・・それなら、いっそのこと・・・。

不穏な思考が湧き上がりかけたとき、腕の中で眠る妻が、頭を摺り寄せてきた。

無意識に甘えるような、その素振り。
起きている時には絶対にしない、その動き。

それと同時に、苛立ちと不穏な思考が、凶暴な何かとともに自分の中の奥深くへと戻っていく。
知らず詰めていた息を吐き出すと、丁寧に妻を寝台の奥側へ運んで、寝具をかけて、小さな頭をなでてから、寝室を出た。

居間に戻り、妻から取り上げた道具一式を片付けようとして、ふと、前に妻が言っていたことを思い出す。猛獣使いがどうの、という話をしていたときのことだ。

「髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし、肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

猛獣というか、ぬいぐるみっぽい。
人間以外のものに例えられることはよくあるが、生き物ですら無いものに似ていると言われたのは初めてだった。・・・しかも、ぬいぐるみ。
髪とヒゲがそう思わせるらしく、じゃあヒゲを剃ったら妻はどういう感想を持つのだろう、と思った記憶が蘇る。

別に髪もヒゲも気がついたら伸びていただけで、思い入れもない。そろそろうっとおしくなってきたし、これからどんどん暖かくなっていくから防寒の意味でも必要がない。

少し考えてから、ハサミと剃刀を手にとった。

目を覚ました妻がどう反応するだろう？
驚くか、笑うか。

・・・朝が楽しみだ。

妻が目を覚ました気配で目が覚める。いつもなら起きてすぐに腕に触れて起こしにかかるというのに、今日はなかなか起き出そうとしない。

どうしたのだろう？　とぼやける頭で考えたところで、いつも以上に、そっと、慎重に触れてくる小さな手。
感触を確かめるように何度か撫でられるのがくすぐったくて目を開けてみると、何かを真剣に考え込んでいる妻がいた。

その様子を眺めていると、やがて何かを決意したような顔になり、

ようやく目があった。

思考から戻ってきた妻と目が合うと、一気に顔が真っ赤になっていく。

離れていく手の温かさが惜しくて反射的に捕まえた。

細い腕。

こんなに小さくて細くて壊れやすそうなものが、当たり前のように動いている。ほんの少し力加減を間違えれば、たやすく折れてしまいそうな腕。

そんな繊細なものが、どうして俺のように無骨な男のそばにあるのかが不思議で夢を見ているような気もしたが、手のひらから伝わる少し低めの熱は確かに自分以外の温度。

もっとその温度を確かめたくて、捕まえた手のひらに顔を潜り込ませて息をつく。

温かい。

ヒゲを剃った分、直接温度を感じられるような気がして気分がいい。手のひらが次第に温かさを増していく。甘くて優しい、美味そうな香り。

「だ、旦那さまっ！？」

妻のあげた声に視線を向けると、真っ赤になった妻が困ったように眉尻を下げていた。

ああ、そうか。

「おはよう」

挨拶がまだだったな、と思い声をかければ、

「お、おはようございました！」

と、どこかやけくそ気味な返事が帰ってきた。

なんだか妙な挨拶だった気がするが、涙目になっている妻をみて、どうでも良くなった。挨拶が遅くなったから、怒っているのだろうか。腕を引っ張るような動きに、ああ、と思う。温かな手のひらから顔をあげると、妻がほっとしたように息をついた。

ちゅ。

ヒゲに邪魔されずに触れた妻の頬は滑らかで、唇にその柔らかさが直接伝わってくる。

ちゅ。

もう一度その感触を味わいたくて、すぐ反対の頬にキスを送る。真っ赤になっている妻の頬はいつも以上に熱く、つい、それよりも赤く染まる小さな唇に目が行ってしまう。

そこは、こちらよりも熱く甘いのだろうか。身を屈めようとして、妻が頬を抑えて寝具に埋もれてしまった。

少し、遅かったか。

さきほどみた鮮やかな赤を諦め切れず、そういえばまだ妻からのお返しを受けていないことに気づいた。掴んだままの細い手首を引っ張ると、寝具の隙間から、チラリ、と妻が濡れた目を向けて来る。

ぞくり、と背中に駆け上がるものを必死になだめながら当たり前のことのように、自分の頬を指で叩いて催促する。

妻の大きな瞳が驚いたように見開かれるが、ここで引いてはいけない。

あくまで、これは当然の習慣なのだという態度で頬を寄せて待てば、真っ赤になって小刻みに震えながらも、そっと妻の唇が最後の距離を埋める。

いつもと違う、直接肌に触れる、妻の唇。反対側の頬にも送られたその感触を噛み締めながら、心に誓った。

・・・これから毎晩、ヒゲを剃ろう。

7　夫を躾直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（後書き）

妻、狙われてる、狙われてる（笑）

これ、夫視点の連載を始めたら、そのまま転載しちゃうかも・・・。

妻、にによによするの巻（前書き）

にによによをテーマにしたら、こんな話が出来ました。

妻、によによするの巻

体の大きな夫用にと大きめのクッションを作ってみました。

元々夫の家にあったクッションも私にはかなり大きいのですが、夫にはちょっと小さいようでしたから。完成した新品クッションを両手で挟んでふかふかな感を堪能していると、ちょうど夫が入って来ました。

あ。いいことを思いつきました。

「旦那さま、旦那さま、ちょっとこれ持ってください！」

「・・・」

「あ、そうじゃなくて、両腕で押さえるような感じで、そう！　そうです！」

ソファに腰掛けた夫に完成したばかりのクッションの両端を腕で抱えるように、持たせてみました。

夫からちょっと離れて確認します。

・・・クマさんです。実家にいたクマさんのぬいぐるみそっくりなリアルクマさん（夫）がいますっ！！

元々よく似ているのですが、実家のクマさんは丸くてふかふかのお腹で、一方、夫は見るからに固そうな、柔らかさとは無縁の体つきです。

でも、こげ茶色のふかふかクッションを抱えた今の夫は、まさにクマさんっ！

うああっ、抱きつきたいです、そのふかふかなお腹の上でお昼寝

したいですっ。
熱心に眺めて内心で身悶えしている私が不思議だったのか、夫がこてっと首を傾げました。

ぐはっ！？

最近よく見かける仕草なのに、なんですか、この破壊力っ！　一瞬鼻血が出てくるかと思いました。
恐るべし、クッションマジック。そしてグッジョブ、私！

自分で自分を讃えていると、何を思ったのか夫がクッションを横に置いてしまいました。
ああっ！？　私のクマさんがっ！
思いっきりがっかりしていると、夫はちょっと考えるそぶりを見せ、またクッションを抱え直しました。
クマさんです。クマさんが帰ってきました！

もしかしたらまたすぐにクッションを置かれてしまうかもしれません。その前によく見ておかなければ、という使命感に燃えてにじりよると、その動きが夫を刺激したのか、素早くクッションから腕を伸ばした夫にあっさり捕獲されました。

何するんですか、これじゃクマさんが見れないじゃないですか！
と憤りつつ体を起こそうとして、ふと、手のひらにふかふかな感触が。こげ茶色の、ふかふかクッションです。

・・・気持ちいい。

ちらり、と夫を見上げると、近くに置いていた本を手に取って読み始めるところでした。

あのー？　クッションも私も抱えられたままなのですが。
ああ、腕が長いから特に気にならないんですね。こんな大きなもの二つを全く気にしないなんて、さすが無い無い尽くしの夫です。
でも、まぁ、夫が気にしないなら、もうちょっと堪能しましょうか。

クッションと夫の腕に挟まれた状態で少し身動きしてちょうどいい位置に収まると、私は大きく息をついて目を閉じました。

あったかくてふかふかで、心地よい昼寝の時間です。

結局。
大きなクッションは私の愛用品になりました。

・・・ときどき、リアルクマさんのおまけがついたり、つかなかったり。

妻、にによによするの巻（後書き）

妻のにによによポイントは、やはりクマさんのようです（笑）

極秘任務２：夫を笑わせろ！（前書き）

さぁ、また極秘部隊から任務状が届きました。どうする、妻！？

極秘任務２：夫を笑わせろ！

秘密部隊からまた極秘任務が届きました。

表書きは確かに私なのですが、見なかったことにしちゃおうかな、という誘惑にかられます。前回の夫無茶振り計画は、本当に無茶振りでした。あれは夫よりも私にダメージが・・・と、耳元で囁かれた夫の低い声を思い出しそうになって慌てて首を振ってその音を散らしました。

だ、ダメです！　あれは絶対に思い出しちゃダメです！！

熱があつまってくる顔を指令書であおぎながら、取り合えず、中身を見るだけみてみることにしました。意を決して封筒の中身を開けると、たった一行。

「夫を笑わせろ！」

・・・いまさらですけど、この指令書を発行しているのは、いったい誰なんでしょうか？

どうしてこう毎回夫絡みの無茶振りしてくるんですか！？
夫の笑顔なんて、結婚してから一度しか見たことないんですよ！？
しかも、なぜ笑っていたのかわかりませんし。

・・・そういえば、夫はあの時どうして笑っていたのでしょうか？
会話を思い出しても、特に笑えるような内容でもなかったですし。
うーん、ダメです。夫の笑いのツボがわかりません。

でも、でもですよ。もしこれが発見出来れば、いつでも夫の笑顔が見れるようになるってことですよね？　それって、未来の奥さまと円満な関係を築くのにとっても重要なポイントです。無い無い尽くし解消にも役立つこと間違いなしですよ！

俄然、やる気が出てきました。夫の笑いのポイント発見計画、発動です！！

食後のまったりタイムに夫はいつも通り晩酌を楽しんでいます。ある意味、一番寛いで油断している時間帯。しかもお酒を飲んでいますから、笑いの沸点も低いはず。お皿を片付けるふりをして、夫の背後に回ってスタンバイ完了。

いざ、作戦決行です！！

「旦那さま！覚悟！」

手っ取り早く笑わせるとなれば、くすぐるのが一番！　夫の脇に手を入れてくすぐろうとしたら、いつの間にか目の前に夫の無表情がありました。

・・・あれ？

なんで夫の顔が目の前に？

というか、どうして私は夫の膝の上に抱えられているのでしょうか？

頭に「？」をたくさん浮かべて固まっていると、夫が首を少し傾けました。

ああっ、これが髪とヒゲを整える前なら、首かしげクマさんだったのにっ。

思わず悔し涙を流しそうになったのですが、夫が少し目を細めて私を見ているのに気づいて、固まりました。

・・・三割増しで野生化したクマさんが首をかしげると、どうしてか、こう、身の危険を感じるというか、狙われているような気がしてしまうのですが。

き、気のせいでしょうか、気のせいですよね、気のせいだと思いたいです。

慌てて夫の膝から降りようとして、それよりも早く靴を取られてしまいました。なんで靴を脱がせるんですか。嫌がらせですか。

こうなったら、再攻撃あるのみです！

うりゃっ、と夫の脇に手を伸ばしてコショコショコショコショっとくすぐりました。

どうだ！？と夫の様子を伺うと、目を瞬かせて不思議そうにしています。

あれ？

効かないんですか、私の必殺くすぐりの刑。

兄弟たちにこの刑を執行したときは、いつも大笑いしながら土下座の勢いで謝ってきたものなのですが。

なんだかちょっと負けたような気分になりつつも、諦めきれずに膝小僧をコショコショっとくすぐりますが、やっぱり無表情のままです。

何てことでしょう。夫は稀に存在するくすぐりが聞かない人物だ

ったんですね。

計画、失敗です。

というか、よく考えたら、笑いのツボってくすぐったい場所って意味じゃないですよね、そういえば。

ちぇー。といじけて夫の膝から降りようとして、がっしりと足首を掴まれました。

え。なんで足を掴むんですか、相変わらず全く動かせないんですがどうやって掴んでるんでしょうか、というか離して欲しいのですがっ！

嫌な予感に背筋に流れる汗を感じつつ、夫の表情をうかがって、私はビクッと震えて固まりました。

獲物を前にした獰猛な狩猟動物のような目をした夫。その口元には小さな笑みが。

だ、旦那さまが笑いましたっ！

二度目の快挙ですっ！

嬉しさのあまり飛び上がりたくなったのですが、同時にひどく落ち着かない気分になりました。

夫がじっと私を見ているその視線に、むずがゆいような、逃げ出したくなるような、目を逸らしたいような、けどもっと見ていたいような、とても複雑な感覚に襲われます。

身動き出来ないのに、心臓だけがどんどん早く動いて、熱がでそうで、焦りました。

も、もしかして、これが世に聞く色気というものですか！？

前は大好きなクマさんみたいだった笑みが、どうして今回は色気たっぷりの微笑みになっちゃったんでしょうか。やっぱりボサボサな髪とぼうぼうのヒゲという名の緩衝材がなくなってしまったからでしょうか。実に惜しいです。

そんなことをつらつらと考えていたら、夫が掴んだ足の裏をくすぐり始めました。

っ！！

反射的に起きる笑いを堪えながら悲鳴を上げて身を捩って逃げようとしたのですが、相変わらず全く脱出出来そうにない安定感です。この人間安全ベルトめっ。全然安全じゃないくせに、詐欺です！

さんざんくすぐられ息も絶え絶えになった私は、半泣きになりながら土下座の勢いで降参する羽目になりました。

ある意味、夫を笑わせるという任務は成功しましたが。

・・・秘密部隊の指令は、もうこりごりです。

極秘任務２：夫を笑わせろ！（後書き）

任務に成功しても、結局夫に負けてしまう妻なのでした。
そして、夫はめっちゃ楽しんでます（笑）

夫による妻観察日記（前書き）

お出かけしましょう？の夫視点のワンシーンです。

夫による妻観察日記

花待ち／火兎／2日

妻は最近よく裁縫をしている。

掃除や料理をしている時以外は、たいてい針を手に持って、なかなかの速さでひと針ひと針丁寧に縫っていく。

一昨日までは薄い青、その前は紺色。

見るたびに違う色合いのものを縫っていたから何を作っているのか、気になってはいた。

お似合いですよ！　と誇らしげな笑顔を向けてくる妻に、今自分が着ているものが、妻が縫っていたものだと知った。

俺のために、妻が手作りした服。

薄手の服なのに、いつもよりも暖かな気がする。まるで少し体温の高い妻に包まれているような・・・。

そう思った途端、妻のように顔に熱が集まるのを感じて慌てて背を向けた。

出発を促しながら、そっと生地に触れる。

賢妻の勉強会は嫌いだが。

・・・たまには、二人で出かけるものいいかもしれない。

夫による妻観察日記（後書き）

夫は攻めるのは強くても、予想外の攻めに弱いタイプかも（笑）

初めてのお使い、初めての・・・（前書き）

※書類上夫との結婚が成立した数日後のお話です。

初めてのお使い、初めての・・・

夫の家にはじめてきたときに、なんて何にも無い台所なんだろう、と呆然とした記憶があります。

調理道具はもちろん、食材もなし。

かろうじて台所にあるのは、コップとお皿が数枚。

この人、いままで一体どうやって生きてきたんでしょうか。

一緒に来ていた保護者の奥様が、すぐに調理器具や食材など必要最低限のものを用意してくださったので、それで今まで凌いできましたが、そろそ小麦が足りなくなってきました。

お野菜などは庭である程度採れるのですが、新鮮な卵や、ミルクもほしいところ。

それに、私、この家に来てから、まだ一度も街に戻っていないんですよね。そろそろ、女性ならではのこまごましたものも買い足しておきたいところです。

そこで私は夫になった方にお買い物に行きたい、と切り出してみました。

「小麦が切れそうなので、お買い物に行きたいのですが」

夫が頷きました。行ってきていいんですね。良かった！

お金は、保護者の奥様から非常用と、当面用の二種類に分けていただいたものがあります。結婚祝いとしていただいたものなので、ありがたく、二人分の食費として使わせていただきましょう。

街についてからどういう風に回るか、なにを買おうか考えていると、夫に紙とペンを渡されました。

見ると、上のほうに「小麦」と書かれています。

あ、忘備録ですね！

卵に、ミルク、お塩、お砂糖、果物、お庭では採れない野菜など、街で売っているかどうかわからないものも、とりあえず希望として書き込んでいきました。

食料に関してはこんなところでしょうか。

ある程度書き出したリストを眺めて忘れているものが無いか確認していると、さっ、とそのリストが夫に取られてしまいました。

夫はざっとその内容を確かめると、それを自分の内ポケットの中へ。

「・・・え？　あの、旦那さま。それ、私のお買い物用に書き出したものなんですが」

「・・・これを買ってくればいいのだろう？」

まだ他に何かあるのか？　といわんばかりに聞き返してくる夫に、思わず絶句してしまいました。

あ、当時の夫も無口でしたが、必要最低限のこれくらいの文章は話してくれていたんですよ？　今なら3分の1以下の「買ってくる」で会話終了です。

今ならそんなにしゃべったことに感動ものですが、当時の私は夫の無口さに慣れるのが手一杯で、その短い会話文の中から必要な情報を取り出すのがやっと。

なので、言われた意味を理解した私は、思いました。

・・・女性ならではの必要品を書き出す前でよかった！！

「あの、私が自分で買いに行きたいんですが」
「・・・じきに茶会が開催される」

なんとなく、無駄だろーなー、と思いつつ、一応主張してみると、よくわからない回答が帰ってきました。

お茶会については、奥様から、結婚後も必ず出席するように言われていますし、確かにそろそろ結婚後初の開催時期ですけれども。

つまり、それまで我慢しろ、と？

お、横暴です！　買い物ぐらいいいじゃないですか！　私だって、新鮮な食材を自分の目で選んだり、いろいろ街の中を見て歩きたいです！

と、とっさに脳内で激しく夫に抗議したのですが、口に出しては言いませんでした。

だって、ちょうど夫がソファにゆったりと腰掛けたかと思うと、こてっ、と首を傾けたところだったんです。

ク、クマさん降臨っ！！
その体勢はずるいです、反則ですっ！
焦げ茶色のフカフカ感といい、首の傾け具合といい、本当に実家のクマさんにそっくりすぎですよっ。

思いっきり机に突っ伏してバンバン叩きたい誘惑に駆られますが、ここはぐっと我慢です。
もちろんクマさんに怒鳴ったり、抗議したり出来ませんし、そ

れよりも抱きつこうとする体と、勝手に動きそうになる手をとめるだけで精一杯です。

それに、良く考えると、小麦やミルクって結構重いんですよね。そのほかの食材に、さらに割れやすい卵となると、私一人で持ち帰るのは困難を極めるに違いありません。となると、夫の申し出に甘えて、買ってきてもらったほうが安全です。

自分用の雑貨については、それこそお茶会のときでも十分間に合いますし、どうせなら一人で買い物するよりも、友人と一緒に見て回ったほうが楽しそうな気がします。

うん、そうですね。

「じゃ、お願いしますね、く・・・旦那さま」

というわけで、買い物はクマさん（夫）にお願いすることにしました。

その夜。

約一年分の小麦に絶対に飲み切れない量のミルク、一体何羽の鶏に産ませたんだという卵など、その他、馬車にぎっしり詰まれた食材の数々が届けられた私は。

・・・初めてクマさん（夫）に、こんこんと説教をしました。

初めてのお使い、初めての・・・（後書き）

夫　→　「大は小を兼ねる」タイプ。
この時はまだ、二人分の食材の適正量が分かっていなかったようです（苦笑）

壁側で寝かせるそのわけは（前書き）

※「早寝をさせましょう」後のとある夜を、夫視点でお送りします。

壁側で寝かせるそのわけは

妻が眠そうだ。

そろそろ限界に近づいているのか、縫い物の針を何度も刺しそうになりながら、ちらちらと視線をよこしてくる。

・・・潮時だな。

手入れをしていた商売道具を片付けると、妻も嬉しそうに裁縫道具を片付け始める。その様子を横目で見ながら寝室に入り、寝具の中に入って目を閉じれば、それほど間をおかず妻が布団の中に入ってきた。

妻の視線を感じつつ、目をつむったまま一定の呼吸を続けていると、やがてかすかに聞こえてくる妻の呼吸も同じように浅く規則正しいものに変わっていく。

さらにしばらくそのままでいると、妻が動き出した。

やはり、今夜もか。

横向きになって目を開ければ、さっきまで腕に触れていた妻の体が狭い寝台の中を外側へ向かって転がっていくところだった。ぬくもりが離れていく。

すぐに端まで行き着いた妻は、絶妙なバランスで寝台から落ちはしないものの、そこで落ちそうで落ちない、ぎりぎりの綱渡りのようなバランス芸が披露されている。

初めてこれを見たときは、まさかそんな状態で本当に寝ているとは思わず、そんなに俺と寝るのが嫌なのか、と呆れるとともに少し攻撃的な気分になったりもしたが。

ただ寝相が悪いだけだとわかったときには、それはそれで微妙な気分だった。

いつものように、妻を起こさないように起き上がり、絶妙なバランスでふらふらしている肩を軽く引っ張って寝台の奥側へ転がす。

大人しく転がって行った妻は、壁まで行き着くと、しばらく壁に張り付いていたが、また転がってくる。

待ち構えていた腕の中にまで転がってきた妻をそっと抱き寄せると、しばらくもぞもぞ動いていたが、やがて大きく息を吐いて、大人しくなった。一度場所が落ち着けば、再び転がりだすことはない。

この一連の動きを完全な睡眠状態で行うのが、妻だ。

最近は、壁側で寝るのが好きだという、妙な誤解のせいで外側で寝たがるようになったから、ほぼ、毎晩この動きが行われている。

ただ、起きた時に自分が壁側になっていても気にしていないようなので、妻が寝入った後で遠慮なく転がすことにした。

誤解が解ければ、妻が寝入るのを待たなくてもいいのだろうが、その誤解を解くわけにもいかないし、ちょっと押せば寝台から落ちてしまいそうな妻をそのままにしておくわけにもいかない。

結局、妻転がしは毎晩続いている。

・・・朝、寝台にいない妻の温もりの名残を求めて奥側で寝ていることは、秘密だ。

壁側で寝かせるそのわけは（後書き）

こうして、妻は毎晩ころころ転がっていると。
毎朝起きると、奥側で寝ているのはこういう訳でした（笑）

妻と夫のカード勝負（妻視点）（前書き）

もしも、妻が夫にカードゲームで勝負を挑んだら、どうなってしまうのか！？

妻と夫のカード勝負（妻視点）

「旦那さま！　私と勝負してください！」

いつもの夕食後のひととき。未だに何に使うのかよく分からない道具の手入をしていた夫に、いきなり勝負を申し込みました。

夫はチラリ、とわたしの方を見たのですが、またすぐに手元に視線を戻してしまいます。いつものことながら、きかなかったことにする気ですね!?

「だーんーなーさまっ！　私と勝負してくださいっ！」

さっきよりも大きな声で、はっきりきっぱりお願いすると、夫が小さく息をついてこちらに視線を戻しました。おっ、聞く気になってくれたようです。

「勝負は、これです！」

用意しておいたカードを突きつけると、夫が少し不思議そうに瞬きをしました。どうしてそんなものが家にあるんだ、と思っていますね？　このためにわざわざ友人宅まで行って借りてきたんですよ。

友人はカードゲームやボードゲームの類が大好きですからね、たくさん持ってました。その中で一番絵柄がきれいだったものを借りてきたんですが、そういえば、友人が本当にそれでいいのか、と何度も聞いてきたのですが、どうしてだったんでしょう？

まぁ、とにかく私は『リービス』と呼ばれるカードゲームを夫

に突きつけています。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

こくり、と頷く夫に、私はしてやったり！　とほくそ笑みました。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださいね」

宣言すると、夫がまたちょっと首を傾げました。

それからおもむろに自分を指差します。自分が勝ったときはどうするんだ、ですね？　そんなの、決まってます。

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝って当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝ってもご褒美はなしです！」

ズルイって言わないでくださいね。

私は今、友人に詰め込んでもらったルールを思い出すだけで精一杯の状況なんですから。しかも友人いわく、たぶん夫は強いだろう、と。そんな人を相手にご褒美制なんか取り入れたりしませんよ！

夫はしばらく何かを考えていたようですが、やがて、手のひらを私に向け、伸ばした5本の指をゆらゆらと動かして見せました。反対の手は頬に当てています。

む、むむ。

これは5回勝負という意味でしょうか。

「いいでしょう！　受けてたちます！」

自分から勝負を申し込んだことも忘れて、意気揚々と受けてたちました。

その結果。

あっという間に、４連敗。

絵柄を揃えるだけのゲームなのですが、夫の手元には次々と良いカードが集まり、私のほうはちっとも揃いません。

どうしてですか、そんなに運が無いんですか、私。

ちょっと落ち込みそうになりましたが、負けませんよ！

まだ最後の大勝負が残ってます！

・・・惨敗しました。

もうっ！　なんなんですか、このカード！

私との相性悪すぎです！

ぶーぶー文句を言っていると、夫が手招きで呼んでいます。もしかして、もう一勝負してくれるのでしょうか？

わくわくしながら近づくと、素早い動きで夫が立ち上がり。

かぷ。

・・・か、かまれたぁぁぁっ！！！？

歯は立てていないので、いわゆる甘がみってやつですね、っていうか、いきなり何してくれちゃってるんですか、この人はっ！？

私のほっぺた、まだちゃんとありますよねっ！？

かまれた頬を押さえて、思いっきり動揺していると、満足気な夫が椅子に座りなおし、またカードを切り始めました。

真っ赤になって立ち尽くす私に、夫がまた5本指を動かし、反対の手はあごをゆっくりと撫でています。

も、もしかして。

次は、あご？

声に出して聞いたわけでもなかったのに、夫は私に大きく頷いて見せました。

それを見た私は、自分の心臓のために潔く敵前逃亡を図ろうと脱兎のごとく逃げ出したのですが。

あっさりと捕獲され。

・・・夫のカードゲームの強さを、いやというほど、思い知らされました。

妻と夫のカード勝負（妻視点）（後書き）

こうなってしまいました（笑）

夫と妻のカード勝負（夫視点）（前書き）

飛んで火にいる・・・？

夫と妻のカード勝負（夫視点）

「旦那さま！　私と勝負してください！」

いつもの事ながら、突然妻が言い出した。最近はどうも夕食後の時間が狙われることが多いな、と思いながら、聞かなかったことにしようと手にしていた商売道具に視線を戻した

「だーんーなーさまっ！　私と勝負してくださいっ！」

一段と気合が入った声からして、これは相手をするまで引かない気だな。仕方が無い、とりあえず話を聞いて、おかしなことだったら、別のことに意識を向けさせればいいだろう。まだ手入れが終わっていない商売道具をひとまず脇に寄せて、妻に視線を向けると、ひどく意気込んだ表情でカードを突きつけられた。

「勝負は、これです！」

妻の小さな手のひらに丁度納まる大きさのそのカードには見覚えがあった。

賭け事に良く使われる、『リービス』だ。

どうしてそんなものが家にあるんだろうか。俺の持ち物でないことだけは確かだ。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

もちろんあるので頷きながらも、妻がやけにいい笑顔になったのが少し気になった。それにしても、『リービス』なんてどこで覚えてきたのか。鍛錬所の連中から何かよからぬ噂でも吹き込まれたの

か、とも思ったが。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださいね」

・・・そうでもないらしい。

妻は意気揚々と勝負を申し込んできて、かつ願い事があるという。だが、その願い事をかなえるためには、勝たなくてはならない。つまり、勝つ気でいるということだ。

自分が勝ったときのことを考えているということは、俺が勝ったら？

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝って当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝ってもご褒美はなしです！」

・・・やっぱり、鍛錬所の連中が何かいったのだろうか？

しかし、それにしては妻が勝つ気でいるようだし。

すこし考えてから、妻の反応を見るため、わざと何も言わずに頬を触りながら、反対側の指を動かしてみせた。

「いいでしょう！　受けてたちます！」

妻は少し考えたあとで、意気揚々と受けてたってみせた。

ということは、やはり鍛錬所の連中からはなにも聞いていないらしい。

もし聞いていれば、俺に『リーバス』で勝負を挑んできたりしないだろう。

このゲームは、いわば、いかさまの腕を競うゲーム。

おそらく妻は気づいていないが、賭けの対象についても、妻はすでに了承している。

表面的なルールしか知らないらしい妻が勝つはずもなく。

４連敗までは、残念がったり悔しがったりしていたが、５連敗目には、カードを床に叩き付けそうな勢いで、憤慨していた。

いろいろ文句を言っているが、そのどれもが俺ではなく、カード自体への苦情だというのが面白い。

どちらにしても、負けは負け。

カードを置いて手招きをし、何の警戒心も無く近寄ってきた妻を腕に囲い、頬に顔を寄せて。

かぷ。

本当は少し歯を立ててやろうと思っていたのに、あまりにも柔らかく、皮膚の薄そうな感触に、なぜか慌てて甘噛みに変えた。

柔らかくて、温かい。

すこし舌に触れたすべらかな肌の感触と味に、満足感を覚える。

もう一度、味わいたい。

熱でも出したように真っ赤になって立ち尽くす妻に、もうひと勝負申し込む。

驚きで大きく目を見開いている妻が、今度はちゃんと賭けの対象が何かも気づいたのがわかった。

次は、その小さなあごを。

大きく頷いて見せると、反射的に逃げ出す妻。それをこちらもほぼ反射的に捕まえて、ゲームの続きを楽しんだ。

・・・妻は、甘い。

夫と妻のカード勝負（夫視点）（後書き）

何勝負させられたのかは、夫次第　（にやり）

妻が早朝に目覚めたら（前書き）

夫視点にするか妻視点にするか悩んで、結局妻視点にしてみました。
夫がなにを考えているか、皆さんにはばれてしまいそうな気がします（笑）

妻が早朝に目覚めたら

その朝は、たまたま早くに目が覚めました。
隣では夫が眠っています。

困りました。
ひどく喉が乾いているので、水を飲みに行きたいのですが、いつもよりも早い時間ですし、夫は非常に気持ち良さそうに寝ていて、なんだか起こすのが申し訳ないような気がします。
かといって下手に起こしたら、私の命に関わることは、体験済み。
でもとっても喉が乾いています。

ということは、夫を起こさないように寝台から降りる方法をみつけなければいいということですね！

私は取り敢えず起き上がってじっくり考えてみました。

計画？
夫をまたいで降りる。
・・・・・残念ながら、足の長さが足りません。夫は寝台の端ぎりぎりまで身体が来ているので、夫をまたいで床に足をつける前に夫を潰してしまいますね、却下です。

計画？
足元の方から降りる。
棚がなければ降りれるのですが、棚の上を伝って行くわけにもいきませんし。そういえば、この棚を移動させれば、こんな風に夜に起きたい時に便利ですよね。今度夫に相談してみましょう。

計画？

比較的高さがない足側から飛び降りる。

これも足元の床が悪くなっていなければ可能なのですが、そこの部分の床は私が足を掛けただけでギシギシ音を立てるので、飛び降りたら床が抜けるかもしれません。危険です。

その後、？？？と計画を立ててみたのですが、どれも不可能で、結局寝ている夫をいつもの通り、起こすしかありませんでした。

その朝の朝食の時に夫に棚を動かすか、床の修理をお願いしたのですが、夫は利便性と普通に歩く分には問題ないということで、却下しました。

・・・私が起床するには、夫を起こす以外に道はないようです。

妻が早朝に目覚めたら（後書き）

もちろん夫妻の家は、全て夫による計画的設計&配置&仕掛けです（笑）

妻と夫のとある休日（前書き）

妻と夫の、とある雨の日の日常です。

妻と夫のとある休日

いいお天気です。
今日はとっても、いいお天気なんです。

窓の外は真っ黒な雲で覆われていて、なにか細かなものを叩きつけるような小さな音がずっと続いていたとしても、今日はいいお天気なんです！
外の地面が水浸しになっていようが、なんだかゴロゴロいっていようが、いいお天気だったらいいお天気なんですっ！

・・・今日のお出かけ、中止になっちゃうでしょうか。

まだ街以外の場所に行ったことがないので、どこかに連れて行って欲しいとねだったら、少し離れた場所にある湖まで連れて行ってもらえる予定だったんですが。

お弁当も、おやつも、飲み物もちゃんと用意したのに。お出掛け、なくなっちゃうんでしょうか。

いえっ、まだ分かりません！　もしかしたら雨がやむかもしれませんしっ！

晴れろ～、晴れろ～、と窓の外の空に念を送っていると、頭の上にぽん、と衝撃が走りました。お、重いっ。一体なにが、と振り向くと夫が立っていました。私の頭の衝撃は夫の手のひらが発生源だったようです。

「旦那さま・・・」

はっ、まずい、外はまだ私の念が届いていません！

「そ、外はまだ支度中なので、覗いちゃ駄目です！」

私は慌てて窓を背に隠しました。いえ、窓のほうがずっと大きいので、全然隠れていないんですけども、こういうのは気持ちですよね、気持ち。

というか、自分で言っておいてなんなんですが、外が支度中っていったいどんな状況でしょうか。なにを支度しているんでしょうか。とっさにいい誤魔化しが思いつかなかったからって、なに言ってるんですか、私っ！？

思わず夫の反応を伺うと、夫は相変わらずの無表情で見下ろしています。相変わらずの無反応っぷりで、むしろほっとしました。

夫は私がおかしな言動をしてしまっても、気にしないでくれるので、その辺は気分的にかなり助かります。

気が緩んで小さく息をついた途端、夫が私越しにカーテンを引いて、自然な動きでひょい、っと私を抱き上げました。

急な動きについて行けなくてバランスを崩し掛けたのですが、すぐに夫の腕が背中に回ってしっかりと固定します。

うん、ものすごい安定感。

でも、急に抱き上げたら危ないですよ！

と抗議しようとしてしたら、ポスッ、という衝撃が走りました。

夫が私ごとソファに腰掛け、もぞもぞ動いているなァ、と思っ

たら、夫私の間に、焦げ茶色のクッション。

これ、私のお気に入りの、ふかふかクッションです。

さらに何処からともなく取り出した可愛いネコのクッキーを口の中に放り込まれました。

あ、これは、店主さまの奥さまのクッキーです！

むむむ、しかも私がまだ試した事がない味です。新作でしょうか？

もぐもぐむぐむぐ味わっていると、今度は、最近お気に入りの作家の本が手渡されました。

うあっ！　これ、まだ読んでないやつですっ！

今度友人に借りに行こうと思ってたやつですよ！

きゃーきゃー言いながら、早速読もうと本を開き掛けて、はたっ、と気づきました。

夫の方を振り向くと、じっと私のようすを見ています。

「旦那さま、ありがとうございます！」

どこかほっとしたような優しい目で小さく頷くと、夫も手元に本を引き寄せました。

お気に入りのクッションに、お気に入りのお菓子、お気に入りの本。そして側には、暖かな夫。

・・・雨の日のお休みも、お気に入りになりました。

妻と夫のとある休日（後書き）

こうして少しずつ、お気に入りが増えていく、夫婦の日常でした。

妻と夫の夜のお散歩（前書き）

夜のお散歩も、おつなもんです。

妻と夫の夜のお散歩

「旦那さま、お散歩に行きませんか？」

リーフェリア祭が近づくこの季節、空から月が消え、真っ暗になってしまう分、星がとてもきれいに見える時期でもあるそうです。

夕食前にチラッと見てみたのですが、木々にさえぎられてしまって、あまり良く見えません。でも隙間から見える空は、確かにきらきらと星が瞬いました。

もっと開けた場所でゆっくり眺めたいな、と思ったので、夕食後の時間に夫を誘ってみました。

夫は晩酌していた手を止めて、不思議そうに私の方を見ています。これは、質問の意味が良くわからなかったときの雰囲気ですね。

相変わらず無表情のままですが、最近、夫の雰囲気と視線から感情と思考を読み取る能力が格段に上がってきたように思います。

対夫限定の能力ではありますが。

「今夜はとても空がきれいですよ。一緒にゆっくりお散歩して、夜空を見にいきませんか？」

もう一度誘うと、夫は杯に残っていたお酒を飲み干して立ち上がりました。

やった！　これは夫が乗り気になった動きです！

夫は手早く鞄に何かを詰めると、私が靴を履き替えるのを待って、外へ出ました。

リーフェリア祭が近づいているとはいえ、やっぱりまだ夜は肌寒

いですね。

それに、星はきれいに輝いているのですが、月が無いので、真っ暗です。自分の足元どころか、少し先を歩く夫の背中さえ見失ってしまいそうな暗さに、思わずしり込みしてしまったのが失敗でした。

「あれ？　旦那さま・・・？」

夫の背中、見失いました。

まずいです、これは非常にまずいです！

自宅前で遭難って、どんな遭難の仕方ですか！？

友人に知られたら、何年も言われるに違いありません。それだけは阻止しないと。

いやいや、まだ遭難したと決まったわけではありません！

大きな声で呼べば、夫が気づいて戻ってきてくれるかもしれません。

「旦那さ・・・っ！！」

呼びかけた途中で、暗闇からぬっ、と夫が戻ってきました。び、びっくりした、意外と近くに居たんですね。

夫は少し不思議そうに首をかしげて、ああ、と小さくつぶやきました。

「見えないのか？」

「え、見えているんですか？」

夫の貴重な自主的な質問に思わず質問で返してしまいました。

ああっ、なんてもったいないことを！　ここはちゃんと質問に答えてから聞き返したほうが会話が続いたのに！
チャンスをふいにしてしまって嘆いていると、夫がこくん、と頷きました。

えーと、これは私の質問への返事ということですから、見えている、という肯定の意味ですよね。
ああ、だから明かりの類を全然持ってこなかったんですね。

「見えないのか？」

夫が、また質問してきた！！
どんな奇跡が起きたのか、唖然としてしまいそうになりましたが、そんな場合じゃありません、同じ失敗は二度繰り返しませんよ！

「これくらい離れると、旦那さまの顔が見えません」

どの程度見えないかを表現しようと少し後ろに下がったのですが、気づけば、夫に捕獲されました。
・・・えーと。いや、今のは逃げようとか、びびったとかの動きじゃないんですが、それも駄目なんですか？

ちょっと驚いて夫を見ていると、夫は暗闇の中、明らかに視線を逸らして、私を抱えたまま、歩き出しました。

これ、私のお散歩にならないですよ！

「着いたら、下ろす」

抗議しようとした気配を感じたのか、何かを言う前に夫に決定さ

れてしまいました。
でも確かに、明かりも無く夜道を歩くのは私には無理そうですよね。足元、全然見えていないですし。それに風がまだ少し冷たいので、こうしていると夫の体温でとても温かくて心地良いんですよね。

私はちょっと悩んでから、力を抜いて夫に寄りかかりました。
楽をさせてもらいましょう！

夫の動きが一瞬ぎこちなくなったような気がするのですが、すぐにもとの通りゆるぎない足取りで進んでいきます。
人一人抱えているとは思えない動きで、家から少し離れた広場のようになっている場所まで運んでもらうと、夫が地面に立たせてくれました。

「うわぁっ・・・！」

夫に支えられて見上げた空では、無数の星々がその輝きを競い合っていました。
こんなにたくさんの星を一度に見たのは、初めてです！
大きいものもあれば、今にも消えてしまいそうなほど小さな瞬きもあります。空には、こんなにたくさんの星があったんですね。

「旦那さま！　すごいですね、すごくきれいです！」

この感動を分かち合おうと夫を見上げると、夫は、まっすぐに私を見ていました。その視線があまりにも強くて、心臓が一音、飛びました。

「ああ、そうだな」

私が見えていないと思ったのか、いつもの首肯ではなく、声に出して返事をしてくれた夫の視線は、いまだ、私に注がれています。

それからもって来た鞄から敷物と、飲み物、私用のひざ掛けなどを次々と取り出して快適な夜空見学の会場を作ってくれたり。

星座や星の名前についての知識が皆無な私の子供のような質問に、簡潔に答えてくれたり。

とても快適で楽しい夜空見学は、空が白み始めるまで続き、夫と交わした会話の新記録を樹立しました。

・・・たまには、こうして夫とお出かけするのもいいものですね。

妻と夫の夜のお散歩（後書き）

昼のお散歩と夜のお散歩、皆さんはどちらが好きですか？

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）（前書き）

ヴォルフ夫妻に頂いた感想を読んで、妄想が暴走した結果です（いい笑顔）

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）

？　オーダー入ります

店員　「オーダー入ります！　『嫁さんと旦那様のイチャラブ（！？）を店の柱の影あたりから覗き見』です！」
ヴォルフ「おお、おお、勝手に見てけ。クマに蹴られてもしらねーぞ」
店員　「いいんすか、ヴォルフの兄貴。姉御、喜び勇んで走って行っちまいましたけど」
ヴォルフ「まて！　ミリィっ！！（慌てて妻を追いかける）」
店員　「・・・あーあ、また追いかけていっちまったよ。姉御の思うツボだってわかってるんだろうに。それとも、さすがは姉御というべきなのか・・・」

？　勝手にしました（ヴォルフ夫妻）

ヴォルフ「お前が行ってどうする！？」
ミリィ　「覗き見するに決まってるじゃない！　あ、ヴォルフも見る？」
ヴォルフ「見るわけあるかっ！」
ミリィ　「怒鳴んなくても聞こえてるわよっ！　あ、もしかして、耳遠くなっちゃった？」
ヴォルフ「お前な・・・。もう、勝手にしろ。俺は知らん」
ミリィ　「はーい、じゃ、勝手にさせていただきまーす」

ミリィ、ヴォルフの背中によじ登る。
頭まで登頂するとそのまま、強制的に肩車をさせて、見た目の割

りに柔らかい金髪に顔を埋める。

ヴォルフ　「・・・で、なにやってんだ、お前は？」
ミリィ　　「勝手にやってるの。気にしないでいいよー」

ミリィ、ヴォルフの頭でお昼寝開始。
ヴォルフ、ミリィの寝息を聞きながら、下ごしらえ開始。

？　その頃、もう一組の夫妻はというと

妻　「だ、旦那さま、旦那さま！　店主さまが、頭に何か乗せてますっ」
夫　「・・・ヴォルフの妻だ」
妻　「えっ、あの方が、あの焼き菓子の作者さまですか!?　・・・・・えーと、あの、旦那さま？　どうして店主さまは、奥さまを頭に乗せているんでしょうか？」
夫　「・・・・・・（不思議そうに店主夫妻を見る）」
妻　「店主さまは獅子っぽいって思ったんですけど、奥さまは、子猫みたいな方ですねぇ」
夫　「・・・・・・・・・・（微妙な沈黙）」
妻　「いいなぁ、気持ちよさそう・・・って、旦那さま!?　違います、違いますよっ!?　やってほしいってことじゃないです、旦那さまってば、今日私スカートだから絶対に出来ませんからねっ！？」

妻と夫のショートショート（ヴォルフ夫妻×2＋夫妻1）（後書き）

ミリィ＝ミリディアは、ちまっこいけど、逃げまわるヴォルフさんをとっ捕まえて旦那にした、ある意味最強の狩人です。

・・・でもちまっこい（笑）

妻と夫の晩酌（妻視点）（前書き）

妻の思い付きから、おかしな方向へ進んでいったら、こうなりました。

妻と夫の晩酌（妻視点）

いつものように夕飯の支度をしている時のことです。

はたと気付いたのですが、私、これまで夫の無い無い尽くし改善のためにあれをして欲しい、これをして欲しいと要求する事はあっても、何かをして上げるという事をしていませんでした。

これはいけません。一方的に何かを要求するようでは、夫婦生活はうまくいかないと言いますものね。

私も夫の為に何かをしてあげましょう！

と、決意したのはいいのですが、夫のためになることってなんでしょう？

しばらく夫を観察してみたのですが、何がして欲しいか、よく分かりません。

分からないなら、聞いてみるしか無いですよね。

これで夫とのやりとりも増えますし、一石二鳥の作戦です。

というわけで、例によって例の如く、夕食後のリラックスタイムを狙います！

・・・最近、本当にワンパターンですよね、私。次は朝の二度寝タイムに仕掛けてみましょうか。

次の急襲予定を立てつつ、晩酌を始めていた夫に直球で聞いてみました。

「旦那さま、何かして欲しい事って無いですか？」

食卓に身を乗り出すようにして聞くと、夫はちょっと考えているようです。

お、この感じは、無視しようとしていませんね。ということは、何かして欲しい事が有るのでしょうか？

ワクワクしながら回答を待っていると、そのまま、コテッと首を傾げてしまいました。

あれ。何も思いつかなかったんですか？

ダメですよ、これじゃやりとりが成立しないじゃないですか！

「な、何かないですか？　あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

私も夫に早寝させたり、時々ぬいぐるみのクマさんになって欲しくて焦げ茶色のクッションを押し付けたりしてますしね。

ここは夫婦らしくお互い様な関係でいきましょう！

そう思って更に身を乗り出して言ったのですが、何故か夫は飲もうとしていたお酒の入った杯を置いて額に手をあてて、がっくりうなだれてしまいました。

何だかひどく疲れているようにも見えるのですが、どうしたんでしょうか？

そんなに私にして欲しいこととか、させたいことを考えるのは負担だったとか？

いえ、夫は常に即決の人ですから、優柔不断で選べなくて困るということは無いはずです。

分からないなぁ、と夫を眺めていると、一瞬背筋に寒気が走りま

した。

夫が額に当てていた手を離して顔を上げる直前、いきなり席を立って離れたくなる程の何かを感じた気がするのですが、顔を上げた夫はいつも通りの無表情です。

な、何だったんでしょうか、今の。

これまで感じたことがない類の悪寒というか・・・いえ、多分風邪のひきはじめだったのかも。うん、きっとそうですね！

自分にそう言い聞かせていると、夫が置いていたお酒を飲みほして小さく息をつきました。

あんなに一気に飲んで大丈夫なのでしょうか？

そういえば。

夫がいつも飲んでいるお酒って、どんな味なのでしょう？　ほぼ毎晩同じお酒を飲んでいますから、ここに夫の好みの秘密が隠されているのかもしれません！

お酒の入った瓶の口に鼻を近づけて匂いを嗅いでみようとすると、夫が持っていた入れ物を渡しました。

あ、確かにこっちの方がよく匂いが分かりますね。

うーん、何となく、アルコールの匂いがするような？　色は綺麗な飴色。ちょっと揺らすと、アルコールと一緒に独特の香りがたちのぼります。

味はどんなでしょう？

いつも夫が水のようにこくこく飲んでいるので、完全に油断して

ました。
口をつけてみると、夫がちょっと慌てていた様な気がします。
・・・出来れば、もうちょっと早く止めて欲しかったです。
一口ごっくんと飲み込んだ瞬間、思いっきり噎せました。
何ですか、これ！
アルコールですよ、まんまアルコールですっ！！
香りとか味わいとかを楽しむ余地はありません。口から喉から焼けついたように熱いです。
それでも根性で食卓の上に杯を置いて咳き込んでいると、夫が水を汲んできてくれました。
命の水です！
洗い流す様に水を飲んで、ようやく咳が止まりました。
ううう、体の中からアルコールが立ち上ってくるようです。夫はなんでこんなものを毎晩欠かさず飲んでるんでしょうか。
「旦那さま、喉が痛いです」
水差しからお代わりの用意をしてくれている夫に、誰かが話しかけてます。
・・・あれ？
「喉が痛いし、お酒くさいし、全然美味しくないですよ！」

え、ちょっと待って下さい。話してるのは私ですか　？　私っ！？

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです！」

なにいってるんですかぁーっ！？

内心めちゃくちゃ焦っているのに、私はお水のコップを夫に突きつけながら、どさくさに紛れてわがままを言っています。

いえ、違うんです、これは私であって私でないというか、第二の私というか、えっ、私もしかして二重人格ですか！？

外と中が一致しなくて大混乱を起こしていると、夫はしばらく顎を触って何かを考えているようでした。

あ、この癖はまだフワフワのヒゲがあったときの名残ですね。

今はつるっとしていますが、野生化する前のクマさんはよくヒゲに触っていましたものね。やっぱりフカフカ感が気持ちいいのでしょうか。もっと触っておけばよかったなァ、と内なる私が現実逃避している間に外側の私は夫にぎゃーぎゃー何か主張しています。

いや、もう勘弁して下さい、私・・・（泣）

夫は台所に入って行って、何かを持って戻ってきました。何だか、綺麗な色をした飲み物みたいです。

ぶーぶー文句を言っている外側の私に飲み物を渡すと、どうやら外側の私も色が気に入ったらしく、歓声を上げながら一口。

あ。これおいしいで

「おいしーっ！　えらい、旦那さまえーらーいっ！　これなら飲んでよし！　許可しましょう！」

だから、なんでそんなに偉そうなんですか、私！！

そして何となく面白がってますよね、旦那さまっ！？

内心の叫びなど知らずに、夫も果物の爽やかな甘みと酸味がきいた綺麗な飲み物に変えて、２人の酒盛りが始まりました。

・・・まぁ、夫も楽しそうにしているので、良しとしましょうか。

内側の私もお酒が回ってきたのか、あとはただただ楽しいばかりでした。

翌朝、記憶が若干飛んで二日酔いで苦しむ私を、やけにご機嫌な夫に介抱してもらいながら、心に誓いました。

・・・お酒は、ほどほどに。

妻と夫の晩酌（妻視点）（後書き）

酔っ払い妻は、陽気な性格になるようです（笑）

夫と妻の晩酌（夫視点）（前書き）

夫視点のリクエストを頂いたので、のりのりで書いた小話です♪

夫と妻の晩酌（夫視点）

「旦那さま、何かして欲しい事って無いですか」

今朝から妻の様子がまたおかしいとは思っていたのだが、いつものように食後の酒を楽しんでいるときに、食卓を挟んで身を乗り出すようにして聞いてきた。

また何かたくらんでいるのだろうか。

妻のたくらみごとのほとんどが無害なものだから、別に質問に答えたところで問題無いのだが。

して欲しいこと、か。

しばらく考えてみたが、特に思いつかない。

「な、何かないですか？　あ、して欲しい事じゃなくて、させたいことでもいいですよ！」

して欲しいことが特に思いつかなかったことがわかったのか、さらに身を乗り出すようにして、させたいことを考えろ、とさらに言ってくる。

させたいこと。

酒を置いて、額に手を当ててうなだれた。

とりあえず、食卓に両肘をついて身を乗り出してくるのを、やめさせたい。

今日は妻はウーマの世話でもしていたのか、動きやすい黒のズボンと濃紺のシャツといういでたちなのだが、そのシャツは、俺のだ。

当然、襟ぐりも大きく、ボタンの間隔も広い。
一番上のボタンを外しているだけなのだが、それだけで、かなり大きく開いてしまっていて。
濃紺のシャツと、白い肌。
させたいこともしたいことも、山ほどあるのを、この小さな妻はまだ知らない。
知らせないようにしているのは自分なのだが。
この無邪気さを、時々、引き裂いてやりたくなることも、ある。
いっそのこと・・・。
と、どす黒い思考に覆われそうになったとき、ふいに二人の友人の声がよぎった。
その花を惜しむなら。
次のリーフェリア祭まで、耐えろ。
妻に気づかれないように、大きく息を吐いて、額に当てていた手を外し、顔を上げる。引きつったような顔をしている妻を見て、多少は感じ取ったか、と思いながら、置いていた酒を煽って、アルコールでどろどろした感情を体内に押し戻して小さく息をついた。
あと、一月ほど。それが、ひどくもどかしい。
気を紛らわせるために飲み干した酒を注ぎ足すと、妻の興味が酒にうつったのか、瓶の口の匂いを嗅いでいる。
どこか小さな生き物を思わせる動き。小さな鼻で小さな瓶の口から匂いが嗅げるのだろうか、と不思議に思いながら、手に持って

いた杯を渡すと、素直に受け取って匂いを嗅いでいる。

純粋に好奇心いっぱいで、動く妻は、見ていてほほえましい。そんなことを考えていたからか、妻が杯に口をつけたとき、止めるのが間に合わなかった。

妻が杯に口をつけ、コクリ、と嚥下したとたん、激しく噎せだした。

クコールは、酒の中でも高純度の酒気を持つ酒だ。

飲みなれない者には刺激が強すぎる。

汲んできた水を飲んでようやく咳が収まったようだが。

「旦那さま、喉が痛いです。喉が痛いし、お酒くさいし、全然美味しくないですよ！」

どこか妙な声で妻がしゃべりだした。

「美味しくないものを飲んだら駄目です、禁止です、美味しいものが飲みたいです！」

いくら酒気が強いとはいえ、たった一口でよったのだろうか？

いつもよりも呂律が回っていない声で、妻が主張している。

主張、しているのだが。咳き込んだせいか、少し涙が浮かんでいる大きな目には、困惑と、羞恥の両方が浮かんでいて。

でも、水の入った杯を突き出しながら、おいしいものをよこせと強請る妻。

面白い。

顎に手を当てながら、妻の様子を観察すると、その大きな黒目に次々とめまぐるしく感情と意図が入れ替わる。
いつもの事ながら、言葉以上に雄弁に感情を語る目だ。

「旦那さま、聞いてますか、聞いてくれていますか！？　美味しいものを飲むんですよ、こんな美味しくないものを飲んだらいけないのです、わかりましたか！？　わかったら、私に美味しいものをください！　美味しいものしか認めませんよ！」

目が、動揺で震えていたかと思うと、諦観が浮かんだのをみて、思わず噴出してしまいそうになった。

本当に、面白い。

このまましばらく見ていたい気もしたが、旨いものをよこせというもう一人の妻の主張もかなえてやりたい。

確か、台所に果実と蜂蜜があったはず。
以前、フィリウスに教わった女が好む甘く割った酒を持っていくと、どうやら、見た目から気に入ったらしく、妻が歓声を上げている。

「きれーですね、きれーなものも認めますよ！　それ、ほしいです！」

寄こせ、寄こせとせっついてくる妻にその果実割を渡すと、

「おいしーっ！　えらい、旦那さまえーらーいっ！　これなら飲んでよし！　許可しましょう！」

みごと、許可が下りた。
満足してもらえたようだが、目がまだ動揺し続けていて、俺が面白がっているのにもちゃんと気づいたのか、涙目のまま、なにやら非難の目向けてくる。

ああ、本当に、面白い。

そのままクコールの果実割を一緒に飲みながら、二人の妻が次第にともに酔っていくさまを楽しんだ。

やがて食卓に突っ伏して眠りこけた妻を寝台に運んでやりながら、普段は決して言わないような他愛も無い我侭の数々を、目覚めた妻が覚えているかどうかが、楽しみだ。

翌朝。
妻は二日酔いで、夕べの小さな我侭の数々を、覚えていないらしい。
ぐったりしながら、懸命に夕べのことを思い出そうとする妻を眺めながら、知らず、口の端が上がった。

・・・また、晩酌に付き合ってもらおう。

夫と妻の晩酌（夫視点）（後書き）

お酒に弱い妻と、酔った妻を面白がる夫との間で、静かな戦い（飲まない、飲ませたい）が巻き起こること、必至。

そして勝敗は、推して知るべし（笑）

ミリィ&ヴォルフの日常ショートショート（前書き）

やっぱり身長差とか大好きです！（いい笑顔）

ミリィ&ヴォルフの日常ショートショート

?するの？　しないの？　の結末（朝の出来事）

ヴォルフ　「おい、ミリィ起きろ。朝だぞ」
ミリィ　「うー」
ヴォルフ　「おい、ミリィ」
ミリィ　「・・・おはようのちゅーは？」
ヴォルフ　「するわけあるかっ！」
ミリィ　「えー。だって夫婦なら朝にするもんでしょ？」
ヴォルフ　「・・・だれだ、そんな歪んだ知識植えつけたやつぁ」
ミリィ　「するの？　しないの？」
ヴォルフ　「するわけあるかっ！！」
ミリィ　「仕方ないなぁ」

ミリィ、仰向けで寝ていたヴォルフのお腹の上からもぞもぞ移動して、唇のすぐ脇に。
　ちゅっ。

ヴォルフ　「なっ・・・お前ぁっ！？」
ミリィ　「してほしいなんて、我侭なヴォルフ。あ、物足りなかった？」
ヴォルフ　「誰が我侭だっ！？」

ヴォルフ、低血圧とは無縁の朝。

？やるか、やられるか　の駆け引き（昼の出来事）

ミリィ　「今日も大繁盛だったわね！」
ヴォルフ「お前の焼き菓子もなかなか好評だぞ」
ミリィ　「ヴォルフの料理を食べた後って、なんでか甘いものが食べたくなるからねー」

ミリィ、ヴォルフの背中をよじ登り、何かを思いついて、にやり、と笑う。

ミリィ　「ねーヴォルフ、ご褒美あげようか？　あ、それともくれる？」
ヴォルフ「どっちも断る」
ミリィ　「あら、不服？」
ヴォルフ「どうせろくでもないこと考えているんだろうが。断る」
ミリィ　「えー、ヴォルフどんなこと考えてるのー、エロいー、むっつりー」
ヴォルフ「誰がむっつりだ！？」
ミリィ　「・・・エロいは否定しないのね？　あ、オープンえろ？」
ヴォルフ「お前、いい加減黙れ」
ミリィ　「はーい」

ミリィ、黙ったまま、ヴォルフの耳を。
　はむっ。

ヴォルフ「っ！　ミリィ！！」
ミリィ　「ごちそーさまー♪」

ヴォルフの背中から飛び降りて、素早く逃げるミリィと追いかけるヴォルフ。

店員　「厨房でじゃれないでくださいっていつも言ってんのに・・・」

ため息をついた店員、一人で片付け再開。

?やっぱりここでもひと悶着（夜の出来事）

ミリィ　「ねー、ヴォルフ、そろそろ諦めない？」
ヴォルフ　「断る」
ミリィ　「いいじゃない、別に減るもんでもなし。あ、ツンデレ？」
ヴォルフ　「断る」
ミリィ　「もうっ、しょうがないなぁ。じゃぁ、いいわ。お休み、ヴォルフ」
ヴォルフ　「・・・・・・ああ」

ヴォルフ、一人で自分の寝室へ。
ミリィ、一人で自分の寝室へ。
そして、時間が経過し。

ヴォルフ　「・・・・・・いつもいつも、本当にどうやって入ってきやがるんだ」

いつの間にか自分のお腹の上で寝ているミリィに、ヴォルフは小

さなため息をついて目を閉じた。

・・・そして、冒頭に戻る。

ミリィ&ヴォルフの日常ショートショート（後書き）

ミリディアは、物語中一番ちっこいのに、一番強烈な性格をしていますので、副題は『猛獣とちっこい悪魔』でもいいかも、と一時期真剣に考えてました（笑）

友人と私（レイン視点、物語開始前）（前書き）

妻と友人の休日の過ごし方を、初の友人視点でお送りします！

友人と私（レイン視点、物語開始前）

私の友人はちょっと変わっていると思う。

多分本人は大真面目なのだろうけど、はたから見ていると、なにをしでかすかわからなくて、面白くて仕方ない。

小さな時から、なにかと目立つ兄弟たちに囲まれていても、何となく目が追ってしまうのは、いつもこの友人だった。

その友人の目下の悩みは、夫の「無い無い尽くし」。

割と直球勝負が好きな友人らしいネーミングセンスに、思わず笑ってしまったけれど、本人は真剣に悩んでいた。

何をしたわけでもないのに、ある日を境に挨拶をしても頷くだけ、話しかけても頷くだけになったとか。視線が合ってもすぐにそらされるとか。

そんな男は捨ててしまえ、というのが本音だけど、それは言わずに、ただ話を聞くだけに留めておいた。

最初の頃はひどく気にして落ち込んでいたけれど、次第にそれをどうやって攻略するか、作戦を練ることに夢中になっていく友人が面白かったのもある。

ひとつのことに集中すると周りが見えなくなるのも、友人の可愛らしさだ。

どういう結論に至って、どういう行動をするか。

それを楽しみにしていたというのに、数日前からまた様子が変った。

なにがどう変ったのか、はっきりはいえないけれど、やけに思いつめているようにみえる。

「レイン、笑茸とか自白剤って手に入らないですかね？」

・・・そうとう思いつめているらしい。

「レイン商会は違法行為には手を貸せません。わかってると思うけど、それ、犯罪だからね？　ついでに言うと、笑茸も自白剤も毒だから。下手したら死ぬよ？」

手に入れようと思えば、手に入らないこともないんだけど、そんなことを言ったら確実に暴走しそうな友人のために、ちょっと強めの口調で言っておいた。

友人は、ちょっと考えるそぶりを見せてから、冗談です、と笑って見せたけど。

今の間は、本気で考えてたな。

呆れた視線を向ければ、気まずげに視線を逸らしてしている。

というか。

そもそも、そんなものをもし友人の夫に飲ませるために仕掛けたら、その時点で自ぶんで掘った墓穴に片足を突っ込むようなものなのに。

しかも、そうなったら間違いなく私も道連れにされる。

薬物の出所としての報復と、自分の妻に余計なことを吹き込んだ報復と、どちらが比重が大きいかな？

うんうんうなりながら、ああでもない、こうでもないと悩んでいる友人の首筋に咲いている華を見ながら、苦笑した。

たぶん、友人は気づいてないんだろうなぁ。

友人が自分で鏡を見ても微妙に見えない、けれど今の私のように、斜め隣に座れば必ず見える位置につけられた、キスマーク。

どうやら、私は夫殿に警戒されているらしい。

そう思うと、つい、笑いが漏れる。

男装する前から何度もあっているし、既婚者であることも知っているはずなのに、わざわざこんなけん制をかけてくるということは。

・・・今度一度じっくり話をする必要がありそうだ。

友人と私（レイン視点、物語開始前）（後書き）

夫、レインに対してめっちゃ警戒しています（笑）
虫除けは、本人さえも気付かないようにするのが夫。（↑っておい）

ささやかな謀（夫視点）（前書き）

レインが家に遊びに来る前夜の夫視点を書いてみました！

ささやかな謀（夫視点）

明日は、妻の友人が家に遊びに来るらしい。
ここ最近なんとなくふさぎこみ、ぼんやりと何かを考え込んでいることが増えた妻が、今日はやけに張り切って菓子の用意をしたり、茶器を用意したり、部屋を片付けたりしている。

足音をたてながら、くるくると動き回る妻。
体が小さいこともあって、木々を駆け回るリスのようにも見える。

そんな妻の動きを眺めるのは、なかなか楽しいことだし、妻が気分転換できるのはいいのだが、その動きが全て妻の友人のためのものだと思うと。

少し、面白くない。

月に一度の集会で、いつも妻が真っ先にその姿を捜し、駆け寄っていく相手は、妻と同じ黒髪に、黒い瞳をもつ男装の女。
男装しているとはいえ、もともとの性別は女であり、一時期だけだがグレインの妻であったこともあるとわかっていてもなお、二人が並ぶと似合いの恋人同士のように見えて。

・・・かなり、面白くない。

せめて男装をやめれば、普通の友人同士に見えるだろうに。

「はい、旦那さま！　蜂蜜クッキーを焼いてみたんです。どうです

か？」

思考に沈んでいる間に妻が近づいてきて、焼きたての菓子をひと皿、渡してきた。

食べてみろと促す動きに、ひとつつまんで食べてみると、蜂蜜の甘い香りが口の中に広がる。

かなり甘いが、うまい。

じっ、と反応をうかがう妻に、小さくひとつ頷いて見せると、嬉しそうに笑った。

「大丈夫そうですね！　レインが好きな蜂蜜クッキー、かなり久しぶりに作ったのでちょっと心配だったんですよ」

・・・やはり、面白くない。

楽しげに明日の準備をする妻をこれ以上見ていたら、何かを仕出かしてしまいそうな気がして、早々に寝室に引き上げた。

いつもよりもかなり遅い時間になって、ようやく妻が寝室に入ってくる。

焼き菓子の甘い香りを漂わせながら、あっという間に眠りについた妻はいつも通り腕の中に転がってきた。

いつものように大きく息をついて、身動きを止めた妻をしばらく見下ろし。

そっと妻の首筋に唇を寄せる。

妻が鏡を見ても見えない、ただし、横に座れば必ず見える位置に、ひとつ。

念のため。

それから、少しだけ、服の襟元をくつろげて胸元にも。

・・・ひとつでは、とまれなかった。

ささやかな謀（夫視点）（後書き）

絶妙な位置の、ひとつだけじゃ無かったようです。

そして、妻は気付かない（笑）

妄想劇場　～夫：クマ、妻：シャケ～（前書き）

もしも、夫がクマで、妻がシャケだったら！？　という妄想から生まれた妄想劇場を、お送ります（笑）

完全に妄想ですので、本編とは一切関係ありませんので、別物語として、お楽しみいただけると嬉しいです。

では、はじまり、はじまり～♪

配役：クマ（夫）
　　シャケ（妻）

妄想劇場　～夫：クマ、妻：シャケ～

こんにちは、シャケです。
私、このたび目出たく生まれ育った川に戻ってきました。

目的のひとつは産卵ですが、それだけではありません！
まだ稚魚だった頃に出会った、あの方にもう一度お会いするために帰ってきたのです！

そう、あれはまだ生まれて間もない頃のことでした。
増水していた川で遊んでいた私は、いつの間にか水位が低くなってしまい、くぼ地に取り残されてしまったのです。日に日に水の量は少なくなっていきますし、ご飯だってほとんどありません。

太陽の明るさが大好きなのですが、今はそれが私の残りの魚生（人生）を刻一刻と奪っていきます。

雨が降る気配もなく、もう背中が水面に出てしまっている状態で、今生をあきらめかけていたそのとき、彼が現れたのです！

黒くて大きな体に、まん丸の目。
風でふわふわ揺れるふかふかの毛皮で覆われた彼は、私を見つけるとしばらく見つめていました。
そして彼は、その大きな手のひらで私を本流へとはじき飛ばして、助けてくれたのです！

それ以来、彼は時々川辺に来ては、私や他の仲間たちと戯れるようになりました。
けれど、その楽しい交流は長くは続きませんでした。

私たちが海へ向かう時期がやってきたのです。
私は最後に彼にお別れと、そして約束をしたのです。
必ず戻ってくると！

そして今日。
私はその約束を守って、この懐かしい川辺へ戻ってきました。
彼は、どこにいるのでしょうか？

そのとき。
大きな影が差したかと思うと、近くにいた一匹のオスシャケが水中からはじき飛ばされました。

この手の動きは！？

私が水面を見上げると、揺れる水面に大きな黒い影が動いていました。大きな、大きな影です。

彼です！
全体的にかなり大きくなっていますが、彼に違いありません！

私は彼に挨拶がしたくて、逃げ惑う仲間たちとは逆に、大きな影へと近づいていきました。

水面を一生懸命見上げながら、彼の側でくるくる回っていると、彼が急に水中に顔をつけました。

やっぱり彼です！
毛はふかふかそうですし、まん丸の目も間違いなく彼です。
もしかして、彼も私に気づいてくれたのでしょうか！？

嬉しくなって彼の顔の側に近づくと、彼はちょっと不思議そうな顔をしたあと。

がぶり。

私を咬んだまま、空中へと戻っていきました。
私、魚なので、水がないと死んじゃうんですけど!?
エラに空気が入るとめちゃくちゃ痛いんですよ!?

ほとんど反射でびちびち体をひねっていると、だんだん意識が遠のいてきました。

せめて、彼と一言お話させてもらいたかったなぁ。

今生をあきらめた瞬間、ばしゃん、と言う音ともに呼吸が出来るようになりました。
み、水!!
水ってこんなに美味しかったでしたっけ!?

私は水中をぐるぐる動きながら、彼のほうを見上げました。
彼はじっと私を見ています。
私も動きを止めて、彼を見つめます。
水と空気の隔たりはありますが、やっぱり彼です。

ちゃんと、会えました。

私はいつぞやのお礼をいって、約束どおり帰ってきたんですよ、といったのですが、彼には伝わっていないようです。やはり、彼には魚語はわからないのでしょうか?

でも、いいんです。
こうしてまた会えたから。

嬉しくてまたくるくる動いて気が付きました。
ここ、私の故郷の川じゃないです。

水流がものすごく緩やかで、ほとんどないといってもいいです。それにあまり広さはないのですが、その分すごく、深そうです。試しにもぐってみると、海のようでした。底までは行けなそうです。水面に戻ろうとすると、水中に彼の顔をみつけました。

また見に来てくれたのでしょうか？
私は嬉しさが抑えきれなくて、彼の前でくるりと回って見せてから、彼の鼻先に顔の先で触れてみたのですが、彼はいきなり空中に戻っていってしまいました。

呼吸が続かなかったのでしょうか？

それから。
私と彼の生活が始まりました。

・・・ここが私の楽園です。

妄想劇場　～夫：クマ、妻：シャケ～（後書き）

シャケになっても一途な妻と、クマになっても予想外の攻めに弱い夫なのでした

我が家に馬（？）がやって来た！（前書き）

ウーマさん、初登場！

我が家に馬（？）がやって来た！

結婚して数日がたったある日、夫が馬っぽい生き物を連れて帰って来ました。

「っぽい」というのは顔は馬なのですが、私が知る馬よりもかなり身体が大きく、足も太い。馬って足を骨折したら致命傷だと聞くのですが、かなり力強そうな足腰をしていて、これを折るのは無理な気がするほどの太さです。安定感抜群で、聞いたところによると見た目通りに力強いそうです。

でも顔は馬なので、目が大きくてクリクリしていて可愛いんですよね。

そーっ、と手を差し出して、手のひらの匂いを嗅がせて見ました。大人しくかいでます。

うん、これなら撫でられそうですね！

驚かさないように慎重に手を伸ばして耳の後ろを撫でてあげました。気持ち良さそうにしています。うん、可愛い。

「いい子ですね！　旦那さま、この子の名前はなんですか？」

夫の方を振り向くと、ちょっと驚いたような顔をしていました。最近、夫は無表情が基本だとわかって来たので、私までびっくりしてしまいました。

「あの、名前を聞いたら不味いんでしょうか？」

心配になって聞いてみると、夫は小さく首を振りました。じゃあなんでそんなにびっくりしていたんでしょうか？　不思議な人です。

「名前は、何がいい？」

夫が聞いてきたので、ちょっと考えてみました。

「私が暮らしていたところの馬っぽいので、馬とかどうですか？」

いや、正直私もそれはないかなぁ、と思っていたのですが、夫がとっても微妙な顔をしました。

馬（仮名）まで、その大きなつぶらな瞳を悲しげに揺らしています。

いや、ちょっと言ってみただけで本気じゃ無いですよ！？

流石の私も、犬に猫って名前をつけたりしませんって！

慌てている私をよそに、夫が馬（仮名）に向かって、

「ウマだ」

と断定的に言いました。

その時の馬（仮名）の顔と言ったら。

つぶらな瞳にいまにもこぼれ落ちそうな涙を浮かべて、この世の終わりのような悲しげな風情で震えています。

うあぁっごめんなさい、ほんっとごめんなさいっ！！

その後、私の必死な説得により、「ウーマ」というちょっとあんまり変わってないんじゃないか、という名前になりました。

全くなにも考えていない訳でもなく、なんでもこちらではウーマとは縁起のいい名前だとか。

・・・ウーマ（確定）も、私も、心底ホッとしました。

我が家に馬（？）がやって来た！（後書き）

教訓１：名前は一生ものですから、ちゃんと考えましょう。

教訓２：夫に冗談は通じません。

妻とウーマの出会い（夫視点）（前書き）

我が家に馬（？）がやってきた！の夫視点です。

本当は面通しをするだけのつもりだったはずが・・・？

妻とウーマの出会い（夫視点）

ある日、仕事の都合で、ボウドゥを一頭家につれて帰った。

ボウドゥは本来戦闘用なため、気性が荒い。実際気に入らない相手の腕を噛み切ることもあれば、格下の相手は決して乗せたりはしない。

戦闘になれば、自ら敵に体当たりをかけるほど勇猛でもある。

間違っても妻に危害を与えないよう、顔合わせをさせるつもりで妻を厩舎に連れてきたのだが。

いつも思いがけ無いような行動に出る妻が無防備にボウドゥに手を差し出した時には、肝が冷えた。

見知らぬ人間の手など、ボウドゥにとっては、攻撃対象にしかならない。

妻の腕が食いちぎられる、と反射的に妻を引き戻そうとしたのだが。

予想外のことが起きた。

気性の荒いはずのボウドゥは妻の手の匂いを嗅ぎながら、大人しくしていた。妻はさらに手を伸ばして撫でるのもそのまま受け入れている。

・・・あまりにも妻が無邪気で、毒気が抜かれたか。

妻に聞かれて、そういえば名前をまだつけていないことを思い出

した。

ボウドゥにはおかしな習性があり、名前をつけ、呼ぶことを許した相手には決して危害を加えないという。

その代わり、名付けを許すほど懐かれるには数年かかる場合もある。

試しに妻にどんな名前がいいか聞いてみると、「ウマ」と答えた。なにかの生き物の種族名だという。それを名前にするのはどうなんだ、とも思ったが、まぁ妻がそれがいいと言うなら。

「ウマだ」

名付けると、ボウドゥは奇妙な表情をしたかと思うと、目に涙を溜めて妻の方を必死に見ている。やはり、名付け親の一人として、妻を認めているらしい。

その後、なぜかウマと名付けたはずの妻から必死の訂正を受けて、結局音が似ているウーマという神話の中の名を提案すると、妻はボウドゥにそれでいいのか確認した。

ボウドゥも今度は特に不満はないのか、何度も頷いているようだ。

妻はホッとしたようにウーマの頭を何度も撫でてやっている。

こちらをしっかりと見てから、妻にも視線を向けたウーマは、二人共に名付け親として認めたようだ。

それからしばらくの間、ウーマが妻に懐くというよりも、妻がウーマに懐いているような状態が続き。

・・・ウーマを仕事に連れて行くことが、増えた。

妻とウーマの出会い（夫視点）（後書き）

妻、動物に懐かれるタイプだったようです。
そして結局、ウーマさんにまで嫉妬してしまう夫なのでした（苦笑）

妻と夫と馬の日々（前書き）

ウーマさんがやってきて数日後の出来事です。

妻と夫と馬の日々

今日は夫が迎えに来た馬車で出かけているので、馬の世話をすることになりました。

「よいしょっと。ウーマさん、ご飯ですよー」

馬と言っても、私の知る馬よりもかなり身体が大きく、足も太いのですが、顔が馬に似ているので私は馬と呼んでいるのですが、それがそのままウーマとして名付けられてしまったちょっと気の毒な馬です。

馬に似ているのですが、馬ではないので、食べるものも違いました。

草ではなく、意外なことに雑食らしいのです。

なかでもお気に入りは果物。その辺も馬に似ていますね。

主食（材料不明）をもそもそ食べ始めるのですが、あっという間に空になってしまいます。

物足りなそうにしている馬に、隠し持ってきた果物を上げながら、さりげなく腕をのばしてわしわし頭を撫でてあげました。

気持ち良さそうにしている馬を見て、ふと思いついて家のなかに戻り、クシと紐を持ってきて、不思議そうにしている馬の両側の鬣を三つ編みにしてみました。

か、かわいいっ！
紐の端をリボン結びにしているので、余計にとっても可愛いです！

調子に乗って、一生懸命三つ編みとリボンを増産していたら、いつの間にか帰ってきた夫が私と馬を眺めていました。

「あ、旦那さま、お帰りなさいませ！　見てください、かわいいでしょう！？」

この感動を分かち合おうと、夫に満面の笑みで言うと、夫はちょっと首をかしげて、しばらく馬を眺めていました。
なんだか、馬が居心地悪そうにしているのは、どうしてでしょうか？

それにしても、こうして夫と馬が並んでいると、クマさんとお馬の組み合わせで、なんとなく癒される気分です。片方は、リボンだらけですしね！

夫の反応をわくわくしながら待っていると、たった一言。

「オスだ」

・・・ウーマさん、ごめん。

妻と夫と馬の日々（後書き）

無意識で、結果的にウーマさんをいじめてしまう妻（笑）

一応、反省しています（たぶん）

妄想劇場　～もしもウーマさんの中に人が入っていたら?～（前書き）

妄想第二弾!?

もしも、ウーマさんが実は生き物ではなく、中に人が二人入っていたら、という妄想をしてみました（笑）

場面は、夜。
一仕事終えて、ウーマさんの着ぐるみ（!?）を脱いだ前足役と後ろ足役の二人の会話です。

仕事の後の一杯は、旨い。
それがたとえ、厩の藁の上で男二人が酌み交わすものであったとしても、だ。

「あーあ。今日も旦那、商店の娘っこにやきもち焼いてたぞ」
「わかるわかる。ハチミツちゃんを迎えに行ったときだろ？　俺、前見えないけど、あの独特の冷気は商店の娘っこにしか出てこないからなぁ」
「ハチミツちゃんもなぁ。もうちょっとこう、男心ってのかねぇ、そういうもんを察してくれりゃぁなぁ」
「ああ、そりゃだめだ。旦那の男心なんか察しちまったら、ハチミツちゃんが逃げちまう・・・っとやばっ！」

大慌てでウーマの皮をかぶる（？）二人。
ちょっとしてから妻が入ってくる。

「ウーマさん、ハチミツパン持って来ましたよー・・・って、あれ？　何でこんなところに、クコールが・・・？　わっ！？　ちょっと待って、今あげるから押さないで！」

ウーマｓ、ハチミツパンをねだってごまかすことに成功。

妄想劇場　～もしもウーマさんの中に人が入っていたら?～（後書き）

あ、あり得るっ！（↑おぃっ!?）

というか、違和感ないのは、なぜ?
やっぱりウーマのなかには人が入っているのか!?

妄想がとまらないっ!!

妻と夫の（甘め？）な日常（前書き）

本編で糖分が不足しているときに、らぶらぶな夫妻を目指して、甘め、甘め、と言い聞かせて作った小話です。

さて、その結果やいかに・・・？

妻と夫の（甘め？）な日常

夫が寝ています。

いえ、寝ているのは毎朝見ているのですが、今は昼食後の、いつもなら夫が再び出かけている時間。

昨日おとといとずいぶんと遅くまで仕事をしていたので、今日の午後はお休みにしたのだそうですが、昼食後、眠気を抑えられなかったのかソファで横になってしまいました。

夫の体格に合わせて作られたソファは、夫が横になっても充分余裕があります。私から見ると、とんでもなく巨大で、寝床といっていいほどなんですけどね。

疲れた夫を寝かせてあげたいとは思うのですが、実はとっても困った状態になっています。

・・・なんで、私まで抱きこまれているんでしょうか？

いや、なんでもなにも、食後に寝室に向かう途中で突然ふらふらしだした夫を、無謀にも支えようとした結果なのですが。

重量級のクマさんのような夫を支えられるわけが無いことくらいわかっていたのですが、人間とっさになるとつい手を出してしまうものですよね！

ほぼ反射的に夫を支えようとしたその結果。

現在、私はソファの背と夫の体に挟まれて、全く身動きません。

夫は気持ちよさそうに寝息を立てています。

・・・困りました。
なにが困ったって、この体勢です。
幸い、体重はかけられていないので、圧死の心配と呼吸困難の心配は無いのですが、いくらなんでもソファと夫に挟まれたこの狭い空間にずっと同じ体勢でいるのはつらいです。

さて、どうしようか、と考えていると、急に夫が動いて、体勢を変えました。それにつられ私の体勢も変えられたのですが。

・・・なんで、私は夫のお腹の上で、うつぶせになっているのでしょうか？

さっきより体勢的につらくは無いですが、密着度は高まっていますし、なんだかいろいろおかしいですよ！
しかも、夫の腕が背中に回っていて起き上がれません。

しばらくじたばた動いていたのですが、その動きが気に入らなかったのか、落とさないようにしてくれようとしたのか、だんだん夫の腕に力が入っていき、危うくつぶされてしまうところでした。

じ、じたばた禁止！

動きかずにじっとしていると、夫の腕の力も抜けてきます。

これ、どうしましょうか。
夫の胸元に耳を押し付けるような体勢でしばらく考えていたのですが。

なんだか、だんだん、めんどくさくなってきちゃいました。
もうこのまま寝ちゃいましょうか。

夫も別に苦しそうにしていないですし、なんだか可愛らしい寝顔で寝ていますし。寝た子を起こしたら可哀想ですものね。

うん、このままねちゃいましょう。

そういえば、こんなにくっついて寝るのは初めてだなぁ、思いながら、夫から伝わってくる規則正しい寝息に呼吸をあせて、私も一緒にお昼寝を楽しみました。

・・・夫布団は、寝心地最高です。

妻と夫の（甘め？）な日常（後書き）

・・・超微糖でした（挫折）

手と手を合わせて・・・？（前書き）

なかなか甘くならない夫妻に、甘い甘い、としつこく呪文のように繰り返しながら打ち込んでいたら、やっとこ甘めの小話が出来ました！　うん、甘いって言ったら、甘いんです！　そして相変わらず妻は限界にチャレンジ中（？）。

手と手を合わせて・・・？

私、ただいま、観察中です。

なにを観察中かと言うと、何に使うのかよく分からない道具の手入れをしている夫を手の動きを観察しています。

夫の手は、かなり大きくて、がっしりしています。でも肉厚というわけでもないので、意外と細かな作業も平気そうなんですよね。

それがすごく不思議です。

そんなに大きな手で、どうして細かい作業ができるんでしょうか。

大は小を兼ねるといいますが、私よりもずっと大きな手が、私にはできないような細やかな動きをしているのを目の当たりにすると、ついつい集中してみてしまうんですよね。

本当に不思議です。

「旦那さまの手、大きいですよね」

あまりにもじっと見ていたせいか、夫が手を止め、自分の手と私の手を見比べてから、手のひらをこちらに向けてきました。

うわ、やっぱりこうして改めて見るとやっぱり大きいです。手自体が大きいのであまり感じませんが、指も私よりもずっと太そうですよね。感心して眺めるとちょっと手のひらを近付けてきました。

あ、合わせみろってことですね。

手を広げて合わせてみると、私の手は、夫の第二関節までしか届きませんでした。

ちっちゃっ！

「・・・小さいな」

夫が感心したようにつぶやいていますが、違いますよ？　私の手はいたって普通のサイズです。中の中です。夫の手が大きすぎるんです！

夫は興味を沸いたのか、手首を掴んで手のひらや手の甲を眺めたあと、するり、と指を絡めてきました。

ぞくっ、と背筋に悪寒のようなものが走り、思わず手を引こうとしたのですがそれよりも早く夫の指に力が入って、全く抜け出せませんでした。

本当に、相変わらず絶妙な力加減ですね。

痛くないけど、動かせません。夫は何かそういう特殊訓練でも受けていたのでしょうか。卵を割らずにどこまで力を込められるか、とか。

現実逃避しているうちに夫が繋いだ手をじっと見て、おもむろに私の手の甲に顔を寄せてきて。

くん、と一度鼻を鳴らしたかかと思うと。

ぺろ。

っ！？

「・・・甘い？」

・・・しっ、知りませんよ、そんなことを私にきかれてもぉぉっ！！

っていうか、甘いんですか、匂いが甘かったから今、な、舐めたんですか！？

あ、そういえばさっきウーマさんにこっそりハチミツをつけたパンを持っていってあげたのですが、それでしょうか？

でもその後にちゃんと手を洗いましたし、夫が匂いをかいでいたの、手の甲ですから、流石にそこまで蜂蜜を飛ばしたりしないとおも・・・っ！？

再び手の甲に走ったぬるり、とした感触に、硬直してしまいました。

というか、また舐めっ！？

もう確かめなくていいで、うぁぁぁっ、さっきよりも範囲が広がっ！？

やーめーてーっ！

多分真っ赤になりながら息を止めて、ついでに手の甲に舌を這わせる夫を見ていれられなくて目を閉じると、余計に感覚が鋭くなるって、これどんな罰ゲームですか！？

もうダメです。限界です！

羞恥の限界を超えてなにかの行動を起こそうとした瞬間、夫の舌の感触が離れました。

ホッとして目を開けると、私の手に指を絡めたまま真っ直ぐにわ

たしを見ている夫がいました。そして、最期につ、と手の甲に鼻先を滑らせた夫がたった一言。

「甘い」

判定。

・・・私の手は、甘いらしいです。

手と手を合わせて・・・？（後書き）

夫の判定でました～！

妄想劇場　もしも妻がある日森でリアルクマさん（配役；夫）に出会ったら（前編）

急に思いついて、書いてみちゃいました。
軽く流してくれると嬉しいです（汗）←

突然ですが。

生き物の躾にはふた通りの方法があるのだそうです。

ひとつは罰方式、ひとつはご褒美方式。

ベテランの調教師になると、この二つを上手く使い分けてどんな獣でも思いのままに動かす事ができるのだとか。

非常にうらやましいです！

いますぐその才能を私に与えてほしいです。なんだったら一日だけのお試しでもかまいません！

そう、今すぐその才能が必要なんです。

今、私の目の前には、一匹のクマ。

ちょっと山菜を取りに来ただけなのに、まんまとクマと遭遇し、かつ、視線があってしまいました。

野生のクマです。

しかも、かなりの大物です。おっきいです。四足状態で、顔が私の顔ぐらいの位置

にあるので、立ち上がったら相当見上げることになりそうです。

いくらぬいぐるみのクマさんが大好きな私でも、野生のクマと相対して、きゃー、らっきーっ！　なんて一瞬しか思いませんでした。

ええ、すぐに我に返って気づきましたよ。

私、今、絶体絶命のピンチ？

目の前のクマから視線を外さないようにしながら、前にも後ろにも進めなくなってしまいました。

前に進めばクマと近づくことになって、下手をしたら威嚇していると思われてしまうかもしれません。

野生のクマを見るのは初めてですが、とにかく、毎日山野を駆け巡っている彼らと基本引きこもりの私では、勝負は目に見えています。

でも、かといって後ろに下がって逃げるのもなし。

逃げられたら追いたくなるの、ってことで追っかけられでもしたら、これまた勝負は火を見るよりも明らか。

あれ、私どっちにしても、終わりですか？

どっと冷や汗が流れてきました。

相対しているクマのほうは、動かずにただ、じっと私のほうを見つめているだけで、今のところ、動く気はないようです。当たり前といえば当たり前ですが、ずっと見詰め合ってても表情や瞳から感情とか全く読めません。

威嚇されていないだけましなのかもしれませんが、にっちもさっちも行かないこの状況。

いっそ思い切って動いてみようかとも思うのですが、この高まった緊張感が一気にはじけて、ついでに私の命もはじけてしまいそうで勇気が出ませんでした。

どのくらいそうやって固まっていたでしょう。

不意にクマが視線を逸らしました。

なんだか、ため息をついたようにも見えたのですが、気のせい

ですよね。

一気に緊張が抜けていった私は、ついでに足からも力が抜けて、へなへなとその場に座り込んでしまいました。

た、助かった。これ以上、見詰め合っていたら、目が乾燥して干物になってしまっていたかもしれません。・・・怖っ!!

自分の想像に若干青ざめていると、離れた場所に立っていたクマが、その場に座りました。それから大きくあくびをひとつ。

ついつられて私もあくびが出ました。

あ、ずっと開けていた目に涙がどんどん吸い込まれ行く気が。

何度も瞬きをして瞳全体に涙をいきわたらせていると、クマがちらり、とこちらを見たような気がしました。

つい私もクマのほうを見てしまって、また乾燥地獄!?　と思ったのですが、クマは私のこと事など全く気にせずに、座った体勢から、ころん、と転がってうつぶせになりました。

・・・なんですか、今のっ!?　大きなクマさんのくせに、動きが、か、かわいいじゃないですか！　しかもごつごつした地面を転がったのに、全く痛くなさそうな上に、なんだかむしろ気持ちよさそうですよっ!?

予想外の可愛らしい動きに、身もだえしながら萌え死にそうになっていると、大きなクマさんが、そのまま動かなくなりました。いえ、体は上下に動いているので、もしかして、寝てしまったのでしょうか？

逃げるなら、今がチャンスだということは良くわかっているんです。

もしかしたらクマさんもこちらが攻撃力ほぼ皆無なのを見てとって、わざわざ逃げる隙を作ってくれているのかもしれません。

わかってます、わかってはいるんですが。

・・・触りたい。

ちょっとだけ、ちょっとだけでいいので、触っちゃ駄目でしょうか。

クマさん、寝てますよね？
起こさないように、ちょこっと触るだけなら、いいですよね？
大丈夫ですよね？

うずうずする両手を動かしながら、足音を立てないように慎重に近づきました。本当に寝ているようで、一定のリズムで毛が膨らんだり、しぼんだりしています。

・・・もういっそ、ダイブしちゃってもいいですかね？

危険な思考に陥りそうになったのを、慌てて首を振って払いました。

駄目です、ここで欲張ったら、あのフカフカそうな毛にタッチすることさえ出来なくなってしまいますよ、ここは自制心総動員する場面です！

何とかダイブの欲求に打ち勝ち、あとちょっと手を伸ばせば触れる距離まで近づいたとき、ふと、クマさんが本当に寝ているのかど

うか、気になりました。
寝ています、よね？
ちょっと触ったくらいじゃ、起きないですよね？

・・・でも、相手は野生の動物ですし。
柔らかそうなふかふか感にばかり目が行ってしまっていますが、鋭い爪も何でも噛み砕けそうな牙も持っている、雑食の動物です。
蜂蜜も食べるけど、鮭も食べます。
もし起きちゃったら、私の手もかぶりと齧られてしまうかもしれません。

でも、寝ているなら、大丈夫ですよね、齧られたりしませんよね。

どきどきしながら、それでもクマさんに触りたいという欲求を抑えることが出来ず、そっと最後の距離を詰めて、手を伸ばしました。

思ったよりも、ごわごわしているんですね。
ふわふわというよりも、しっとりしていて、かなり獣臭いです。
でも、温かい。
なでるたびに、ぴくぴくと動くフェルトのような丸い耳がたまらなくかわいいです。

つい嬉しくなって熱心に撫で回していると、まん丸おめめが、すぐ目の前に。

あっ、と思ったときにはもう、尻餅をついてしまっていて、クマさんの前足が私のズボンの裾に爪を食い込ませて地面に文字通り縫い付けられていました。

思わず、それでも足を動かそうとしてしまったのですが、動かな

いことを確認しただけでした。
あれ？　これ、まずくないですか？
いや、まずいですよっ！
ちょっと触れるだけのつもりが、調子に乗って撫で回したりするから、クマさんを起こしてしまったようです。

私が状況確認をしている間に、クマさんも私の状況を確認していたのか、上半身に鼻を近づけて匂いをかいでいます。私、昨日の夜にお風呂に入ったきりで山菜取りにきていたので、たぶんきっと汗臭いですよ！

「ダメです！」

クマさんがお腹のあたりでくんくん匂いをかいでいたのを、びしっ、と短く言うと、クマさんの動きがぴたり、と止まりました。

よかった、気持ちが伝わったようです。

ほっとしたのもつかの間、クマさんは、私のお腹の上に頭を乗せたまま、また眠ってしまったようです。お、重いです、ちょっと重いです、やっぱり結構重いですっ！
でも、あったかくて、クマさんの呼吸の動きがなんだか、眠気を誘うような安心感があるような・・・。
今、確かに危機的状況なはずなのですが。
ちら、とお腹の上のクマさんの顔を見ると、気持ちよさそうに寝ています。

・・・今動くとクマさんを起こしてしまいますし。
なんだか、ちょっと眠くなってきちゃいました・・・うん、寝ちゃいましょうか。

クマさんが起きたら、しっかり目を覚ます前に、逃げればいいですよね。そうしましょう。

私はお腹の上に乗ったクマさんの大きな顔を撫でながら、眠りにつきました。

クマさんが片目を開けていることには、気づかずに。

・・・目が覚めたら、なぜかクマさんの冬眠場にいて、帰れなくなってました。

妄想劇場　もしも妻がある日森でリアルクマさん（配役；夫）に出会ったら（後

そして始まるクマさんとの蜂蜜生活・・・っておぃっ！？

最初の一日（夫視点）（前書き）

夫妻の初めてあった日、お見合いの場面です！
でもこの時はまだ、妻に落ちてません（きっぱり）。
ええ、この後からじわりじわりと落ちていくのですよ（にやり）

超微糖な感じで、しかも気づけば台詞が保護者しかないという・・・。

ま、まぁ、こんな感じのお見合いだったんだなぁ、と思っていただけると（滝汗）←

最初の一日（夫視点）

「今日という日は、常に昨日の延長でしかない。ただ生きていさえすれば、必ず明日は、今日の延長として現れる」

そんなことを言いながら、何にも執着せず、何にも心動かされず、空虚に目だけをぎらつかせていた男の姿を思い出す。

その面影を満面の笑みで妻に寄り添う目の前の男に重ねようとして、やめた。重なるわけがない。

妻となる女性を見初めた途端、人格も何もかも崩壊して新たな人間として生まれ変わったのだと豪語する男に昔の面影を求める方が間違っている。

厄介なのは、自分が伴侶となる女性と出会えた喜びを周りにも体感させようとするところだ。

そしてさらにたちが悪いのは、それを強行できるだけの立場にいる事実。

権力という意味でも、資産家という意味でもあり、俺達が逆らえない数少ない人物の一人という事もある。

そして、その男に見初められ、見ているこちらが気の毒になってくるような求婚の数々をかわしながら、最後には自ら男の懐に入ってきた妻は、それ以上に厄介な存在だった。

俺達が唯一、逆らってはならないと決めた、決めさせられた存在。

その厄介な二人によって半ば騙された形でこの場にいる現状は、

厄介なこととこの上なく、不快でたまらない。

目の前には、着飾った小さな娘が座っている。

少し緊張した様子の娘が俺を見てまず浮かべたのは、驚きと懐かしさ。そしてそれからすぐに嬉しそうに微笑みを浮かべていて。

初対面の人間に向ける感情としては、少し奇妙な感じだ。

その後は、何かと厄介な夫婦があれこれ話しかけてくるのに、娘が愛想よく答えるのを聞きながら、早くこの時間が終ってくれないかと、ただひたすら待っていた。娘の方はやがて緊張していた様子もなくなり、ぼんやりと此方を不快にさせない程度に観察してくる。

周囲に対する興味が少し。

挨拶を交わしたあとの奇妙なまでに感動したような、嬉しそうな様子は今はない。

他人に向けるには珍しい表情だったが、そういえば初対面の人間から必ずと言っていいほど向けられる警戒と怯えの入り混じった色をまだ見ていないことに気付いて、少し興味を持った。

まっすぐに視線があえばさすがに怯えるだろうか。そう思ってあえてじっと娘を観察してみると、娘の方はなぜか少し悲しそうにしながらも、特に怯える様子はない。

珍しい。

そう思った途端、視界の端にたちの悪い笑みを浮かべている友人が映った。

嫌な予感がしてその妻の方に視線を向ければ、友人に対して何

か合図を送っている。

企みをやめさせるべく友人を睨みつけるが、音もなく鼻で笑われた。

示し合わせたように同時に立ち上がる夫妻。

それに続いて立ち上がろうとした娘を、つい視線で追うと、快心の笑みを浮かべた夫妻がいた。

しまった、と思った時にはもう遅い。

娘の身のふり先が、勝手に決められていた。

俺は一度も了承していない。娘の方はどうなのかと見てみれば、大きな目を限界まで見開いて驚きを表している。

このまま娘の方から拒んでくれるだろうか。

そう思いながら、なぜかその予想は不快だった。

娘が何か言おうと口を開きかけ。

気づけばそれを遮るように立ち上がっていた。

先に歩き出せば、慌てて娘もついてくる。

にやにや笑いながらそれを眺めている友人は、後でその妻の分も含めて2発殴ってやる、と心に決めながら夫妻の思惑通り、娘を家に連れ帰り。

・・・その三日後、正式な手続きが終了し、俺に、妻ができた。

最初の一日（夫視点）（後書き）

出会いは、ちょっと気になる程度。
でも、それがきっかけ。

朝のたくらみ（前書き）

夫の好みを知ろう！計画発動です♪

朝のたくらみ

今日はちょっとした計画のため、いつもよりも少しだけ早起きをしました。

夫を刺激しないようにそっと起こして、台所に向かいます。

え？　朝の挨拶と一緒にやってくるあれですか？

夫の凄いところは、どんなに眠そうでも、挨拶セットを忘れないところですよ、この言葉で察してくださいっ！

・・・もうずいぶん日にちがたっていても、慣れないものは、全く慣れないものなんですね。

朝の挨拶セットのことはもう置いておくことにして。

夫が起きて二度寝に入ったことを確認して、以前から計画していた急襲を掛けます！

「旦那さま、旦那さま」

二度寝で寝ぼけて攻撃されたことはないので、手加減しませんよ！

腕を揺さぶりながら声を掛けると、夫がうっすらと目を開けました。

これはまだ半分夢の中状態です。

今がチャンス！

「旦那さま、旦那さまの好きな食べ物は何ですか？」

いきなり何を聞いているんだ、と思わないでくださいね。これは

本当に半覚醒状態かを確認するテストです。

辛抱強く待っていると、やがて夫がぼんやりとした目のまま、

「・・・クコール」

夫が答えました！　寝ぼけた声が可愛らしいのですが。

・・・クコールって、夫が毎晩飲んいるあの純度の高いアルコールそのもの見たいなお酒のことですよね。

それ、好きな食べ物でいの一番に出てきちゃうんですか、そうですか。

何とも言えない微妙な気分を味わいつつ、完全に覚醒してしまう前にと、次なる質問をぶつけてみることにしました。

「それじゃ、旦那さまはどんな女性が好きですか！？」

一体なにを聞いているんだって言わないでくださいね。だって、友人が言っていたんです。人は無防備な時にされた質問には、思わず本音で答えてしまうものだって。

私、夫の好みはほとんど全く知らないので、このままでは次なる奥様を探せません。

未来の奥さま探しをする時の参考にするつもりなんです。

夫はぼんやりとしながら、しばらく私を見ていましたが、やがて小さな吐息と一緒に

「・・・甘い」

と呟いて目を閉じてしまいました。

・・・あの、それ好きな女性じゃなくて、好きな味ですよね？
夫は甘いものが好きだったのでしょうか。そういえば、いつもパンにハチミツを塗っていますね。

「旦那さま、好きな味じゃなくて、どんな女性が好きですか、ですよ？」

二度寝をしたがっているところを起こすのはちょっと可哀想ですけど、ここで諦めては、夫の好みにあった未来の奥さま候補を探せません。出来れば何人か候補を見つけて、さり気なく出会えるような場所を絞りこんでおきたいので、諦めませんよ！

「だーんーなーさまっ、どういう女性が好きですか？」

ゆさゆさ揺さぶりながら聞くと、夫が再びうっすらと目を開けました。

お。いい感じでまた半覚醒状態かな、と見ていると、うっすら開けた目に、鋭く光る何かが一瞬浮かんだ気がして、脊髄反射で夫のまぶたに手のひらを当てて、その視線をさえぎりました。

あ、危なかった。

目隠しをされた夫からは微妙な雰囲気が伝わってくるのですが、この手は離しませんよ！

何か良くわからないのですが、今、飛びずさるか、後ずさるかしていたら、とんでもないことが起きていた気がします。気がするだけかもしれませんが、ここ最近の私の危機察知能力はずいぶん進化していますから、たぶん間違いありません。

しばらくそのままでいると、夫から規則正しい寝息が聞こえ始めました。どうやら、本格的に二度寝に突入してくれたようです。

まだ、目的は達成していませんが、今日のところは、ここまでにしておきましょう。うん、なんだかよくわからないのですが、ここが境界線の気がします。

なんの境界線なのかも全くわからないのですが、私は自分の勘を信じることにして、眠る夫を起こさないように、そっと寝室を出ました。

その日の朝食に、蜂蜜をたっぷり使ったパンを出したら、夫はなぜか複雑な表情をしていたのですが、好物じゃなかったんでしょうか？

・・・夫の好みは、よくわかりません。

朝のたくらみ（後書き）

いえいえ、分かりますよね？
「甘いもの」が好きなんですよ（いい笑顔）

妻と夫の静かな戦い（前書き）

※時間軸は挨拶をさせましょう、直後です。

妻と夫の静かな戦い

夫にまさかのおまけ付きの朝の挨拶を初めてされた日。
私たちの静かな戦いの火蓋は切って落とされました。

朝食後。
珍しく夫がゆっくりと朝食を食べていたので、私と同時に食べ終わりました。出かける支度を終えた夫を扉の前まで見送ろうと近づくと、焦げ茶色の目でじっ、と私を見ています。何か忘れ物でもしたのでしょうか？
しばらく待ってみたのですが、何も言わないので、とりあえず見送ることにしました。

「いってらっしゃいませ」

いつものように返事が無いだろうな、と思いつつ、朝の挨拶のダメージを引きずっていた私は、挨拶を返させるべく奮闘する気力は残っていませんでした。
夫は何も言わずに、外へ出ようともせずに私を見ています。

「旦那さま？」

声を掛けると、無表情のまま、ふかふかのヒゲで覆われた頬を指で叩いて見せました。・・・もしかして、またですかっ！？
先ほどのやりとりを鮮明に思い出して、一気に顔に熱が集まって行きました。
もう無理です、さっきのやりとり一回ですら限界突破してるんですよ！？
おもいっきり頭を横に振り続けていると、夫はしばらく私の様

子を見ていましたが、やがて頭の上に手を置いて、首振りを止めてくれました。夫の大きな手は、大きさに見あった重量感があるので、そのまま少し首ががくり、となりましたが私の意思は伝わったのでしょうか？

夫の様子をチラリとうかがうと、頭の上の夫の手に僅かに力がこもった気がしました。

どうしたのでしょうか？

不思議に思って見ていると、夫の顔がだんだん近づいてきて。

こ、これは危険です！　なんとしても死守しなければっ！

「ダァっめです！」

こ、声が裏返ったぁーっ！？

これ以上ないくらいに真っ赤になって固まった私を、至近距離で焦げ茶色の目がどこか面白そうにみていました。

そして、やがて離れて行き。

「・・・行ってくる」

「は、はい、いってらっしゃい」

・・・挨拶って、大変ですね。

妻と夫の静かな戦い（後書き）

夫、真っ赤になって固まる妻を見れて、ちょっと満足げ。

番外編：ハロウィンの一コマ（フィリウス視点）（前書き）

ハロウィン番外編のワンシーンをひとつ。ご同僚（フィリウス）視点になります。
ほんとにお前らは！　って感じですが（苦笑）

番外編：ハロウィンの一コマ（フィリウス視点）

予想以上にこちらのドツボを付いてくる衣装を身に付けた女性陣を見た瞬間、ある種の緊張感が場を包んだ。

なるほど。

確かにこれだけ顧客のニーズと女性の魅力を引き出す能力があるなら、レイン商会が多くの顧客を得てこの一年弱で急成長していっているのも頷ける。

とはいえ。

危機管理能力はいまいちみたいだけどねぇ。

個々の魅力を最大限に活かす衣装を身につけた女性陣は、気付いていない。

自分たちを見つめる獣達の舌なめずりを。

どいつもこいつも今にも襲いかかりそうな目で見ているというのに、女性陣の誰一人としてその危機を感じていないらしいのが面白い。

素早く視線をかわし合うと、意見は見事に一致していた。

早く喰らいつきたい。

ぎらぎらしたその目に、あまり焦らさない方が結果的に彼女達の為になるだろう、とエーファにも秘密で用意していたルートのひと

つを使うことにした。

俺も、早くエーファに喰らいつきたい。

こんなに美味そうな格好をしておいて、何事もなく帰れるわけがないことを、この機会女性陣に教えこむのもいいだろう。

さぁ、無邪気な子羊達を俺たちの餌場に誘い込もう。

・・・楽しい食事の、始まりだ。

番外編：ハロウィンの一コマ（フィリウス視点）（後書き）

そういえば、エーファがまだほとんど出てきていない・・・（汗）

ちなみに、友人たちカップルの物語の仮タイトルは←

友人元夫妻（レインとグレイン）：「離縁してました！」
店主夫妻（ミリディアとヴォルフ）：「離縁しません！」
ご同僚夫妻（エーファとフィリウス）：「離縁させました！」

・・・離縁シリーズ？

番外編：ハロウィンの一コマ（ヴォルフ視点）（前書き）

ツンツンヴォルフをデレさせよう！と思って書いてみた小話です。
さてはて、どうなることやら？

番外編：ハロウィンの一コマ（ヴォルフ視点）

「ヴォルフ、脱がせて！あ、破かないでね」

ちっこいカボチャのミリィがヨタヨタと近づいて来て、さぁ、脱がせろ、と言わんばかりに両手を差し出してくる。

確かに一人で脱ぐのは難しそうな被り物だ・・・なんでカボチャの被り物だったんだ？

俺たちとおなじ、普通の外套で十分だろうに。

カボチャの被り物の製作者が、どこか慌てたようにこちらを見ているのも気にせずに一気に脱がせて、息を飲んだ。

仮装ったって、素人が作る衣装だ、たかが知れている。

そう思ってミリィをからかって居たんだが。

自分の衣装の完成度の高さと着心地のよさで気付くべきだった。

これは、素人なんかじゃねぇ。

今、目の前には、小さな妖精がいる。薄い羽のついたその姿は、ミリィが嫌がる小柄と幼さを強調するものだ。それなのに、得意気な顔で見上げてくる。

目が、そらせない。

首筋のライン、胸元の薄いレース、ぎりぎり素足が見えそうで見えないスカート丈とソックス。

大した仕掛けじゃないのに、思いっきり嵌っている自覚はある。

視界の隅で、二人の製作者が満足気に頷きあっているのが見えた。
ミリィの嫌がる可愛らしさと、匂い立つような色気を組み合わせるとは。

ちくしょうめ、いい仕事するじゃねーか。

今度ミリィの服を作る時は、この二人に依頼しようと心に決めながら、じっくりとミリィを眺める。

眺めれば眺めるほど、身体の奥に熱が生まれて、うねり始める。

・・・久しぶりに、本気で喰いたくなった。

とはいえ、このままかっさらえば、不機嫌になったミリィが暴れまくることは間違いない。
このパーティーを、ずいぶんと楽しみにしていたしなぁ。

さて、どうするか、と顔を上げたところで他の連中と視線が合った。

・・・おぉ？
どいつもこいつも、似たような目をしていやがる。
今すぐにでも獲物に食らいつきたくて仕方ない、ギラついた目。
きっと俺も同じような目をしているに違いない。

素早く視線を交わし、これからの動きを確認する。

全く危機に気付いていないミリィを何気なく抱き上げると、どうしたの？　と言わんばかりに不思議そうな顔で見下ろして来る。

「せっかくのパーティーだ。思う存分楽しめ」
「・・・うんっ！」
ぎゅっ、と首に抱きついてくるミリィを片手で支えながら、髭で隠れた口元に笑みをそっと浮かべた。
・・・俺も、楽しみだ。

番外編：ハロウィンの一コマ（ヴォルフ視点）（後書き）

あれっ！？
超微糖っ！？（↑敗北）

もしも妻が怪我をしたなら（前書き）

夫妻の日常の一コマ。

質問：

もしも妻が怪我をしたら、夫は、ウーマさんは、どうするのでしょうか？

「いたっ！」

夫が出かけている間にウーマさんのお世話をしていたのですが、柵の一部にトゲが出ていて刺してしまいました。

ぷっくりと盛り上がってくる血に思わずため息がでます。

今日はどうもついてないんですよね。

さっき玄関横の石に躓いて転んで膝を擦り剥きましたし、洗濯物を干すときに伸びた草で足を少し切ってしまいました。

ウーマさんの原材料がよく分からないご飯を取りに行けば、同じ場所にあった他のものも一緒に落ちてきてかばった腕と手の甲に内出血ができました。

そして、トゲを刺したと。

ちょっと注意力が散漫だったかもしれません。

こういうことは重なるときはいくつも重なるものですから、気を付けなきゃ、と思っていたのに夕飯の支度をして居るときに指を切りました。

もうっ、注意していたはずなのにっ！

切れ味が悪くなってきているから、よけいな力が入っちゃったんですよ、そりゃ指もきりますよっ！

自分の立て続けの失敗に一人で腹を立てていると、夫が帰ってきました。

手当をした指を目を細めて見ていたので、一人で怒っていた気恥ずかしさを誤魔化す為に今日の出来事を事細かに夫に話して聞か

せました。
　こんなことがあったから、私がちょっとおかしな言動をしていても仕方がないんですよ、だから是非とも無い無い尽くしを発揮して、気にしないで下さい、と頑張って言外に主張してみました。
　夫はそんな私を無表情で眺めつつ、最後に小さく頷いていたのですが。

　翌日。

　洗濯をしに外にでたら、玄関の周囲に石はなく、草は刈り込まれ、棚はわたしの目線まで低くなり、厩舎の柵は全部取り外されて、包丁はまな板まで切れてしまいそうなほど、鋭く光を放っていました。

・・・というか。
　昨日夫は私よりも先に寝ていたはずなのですが。

・・・いったい、いつの間に？

もしも妻が怪我をしたなら（後書き）

回答：

怪我の原因を排除します。

もしも帰宅時に妻が怪我をしていたら（前書き）

夫妻の日常の一コマ。

質問：

もしも帰宅時に妻が怪我をしていたら、夫とウーマはどのように原因を排除するのでしょうか？

もしも帰宅時に妻が怪我をしていたら

家に帰ると、その気配を察した厩舎のウーマが落ち着かない声で啼いて何かを知らせようとしている。

様子を見に行くと、棚に何度も頭突きをくりかえし、柵を壊す勢いで蹴飛ばしていた。

一体、なにをやっているんだ？

棚を見ると、いつもは整然と並んでいるものがいくつか床におちている。その中で少しだけ奇妙なものがあった。ウーマの体当たりで落ちたものは、すべて床に散らばっているのに、一部だけきれいに床に重ねられている。

たしか、これはウーマの餌と一緒においていたものじゃなかったか？

ウーマを見ると、必死な様子で棚を、いや、棚の一部を攻撃している。

一番低い段は、ウーマの餌を入れていた棚のはずだが。

ウーマは焦れたように俺の服の裾を咬むと、こっちに来い、とばかりに引っ張ってくる。

さっき蹴っていた柵の前まで来て、ふと、血の匂いがした。

目を凝らしてみると、柵の一部に血痕が付いている。

棘になっている部分で怪我をしたらしい。

ウーマの興奮状態は、それが原因か？
だが、たったこれだけの血で騒ぐような奴じゃないはずなのに、と思いかけて、嫌な予感がした。

ウーマでないなら、あとこの家にいるのは？

やっと気づいたか、というような呆れた視線を向けてくるウーマの首筋を軽く撫でてから、家に向かった。

玄関を開けると、台所で妻が喚いている。

また、血の匂いだ。
しかも、新しい。

目を細めて妻を観察すると、左手の指、右手の甲、右腕、それに両足に適正な手当てのあとがある。

「お帰りなさいませ、旦那さま！　今日はついていないんですよ！」

ちょっと頬を赤く染めながら、妻は一生懸命に今日あった出来事をひとつひとつ事細かに話した。

ようするに、玄関先の石で転んで、草で足を切り、棚から物を落として、棘を刺して、包丁で指を切ったと。

ある意味、器用だ。
石で転ぶのはまだわかるが、草で足を切るというのは、想像が出来ない。妻はどれほど薄い皮膚をしているのだろうか。

とにかく、ウーマが興奮していた理由がわかった。

名付け親が怪我をすれば、それは報復対象になるだろう。

妻は俺たちと違って、ひどくもろい存在だ。どんなものがいつ、致命傷になるかわからない。

なら、目に見える危険は排除しておくに限る。

俺はまだ真っ赤になりながら状況説明を繰り返す妻に、小さく頷いて見せた。

妻が寝入った深夜。

怒り覚めやらぬウーマに草取りと石拾いを任せて、棚を妻の身長に合わせて調整し、ウーマが破壊しつくした柵の残骸をまとめて捨て、包丁を研いでおいた。

ついでに物置部屋で妻が崩しそうなものを全て避け、ぶつかりそうなものには布を巻いて衝撃を和らげるようにし、妻が良く使う道具は全て妻の目線よりも下に来るように移動した。

翌日。

・・・少し赤くなりながら礼を言う妻は、なかなか可愛らしかった。

もしも帰宅時に妻が怪我をしていたら（後書き）

回答：

徹底的に排除します。

もしも夫が風邪を引いたなら（前書き）

夫も風邪をひくらしいです。

もしも夫が風邪を引いたなら

朝、いつも通り夫を起こそうとしたら、夫がやけに汗をかいていました。悪い夢でも見ているのでしょうか？

とにかく起こそうと、そっと触れた腕が酷く熱くて、よくよく見ると呼吸も早いことに気付きました。

あれ？　これ、もしかして熱が出てませんか！？

焦って夫の額に手を当てて確信しました。

ひどい熱です！

熱が出たときって、とにかく頭を冷やして水分を補給して、あったかくしてがんがん汗をかかせればいいんでしたっけ！？

自分がわりと頑丈なたちで親兄弟も健康そのものの人たちだったので、看病とかしたこともされたこともあまり無いので、ちょっと自信が無いです。

慌てて夫を起こし、膝を曲げてもらって寝台から脱出しました。台所で飲み水とタオル数枚とお湯と冷やした水を持って寝室にかけ戻りました。

寝台の上でぼんやりと上半身を起こして座っている夫をみて、あ、クマさんっぽい、と一瞬ときめいてきしまったのは秘密です。

「旦那さま、お水飲みますか？」

とりあえず他の物を置いて、夫に水を渡そうとしたのですが、ぼんやりしたまま手を動かそうとしません。よほど重体なのでしょう

か。コップを口元まで持っていくと、ようやくコップに気づいたようです。それでもコップを持とうとしないので、そのまま飲ませました。

ちょっとこぼれてしまいましたけど、これから着替えさせるので問題無しです！

持ってきたタオルの一枚にお湯をかけて固く絞り、夫の汗で濡れた額を拭きます。

気持ち良さそうに目を閉じている夫には悪いのですが、多分このあと冷えて寒く感じてしまうかもしれません。湯たんぽも作った方がいいかもしれませんね。

汗を吸ってすっかり重くなっている上着と夫の間に腕を入れて、汗を拭きます。寒いでしょうから、上半身裸にしたりしませんよ。というか、直視出来ないです！

「旦那さま、服を着替えて、汗を拭いてくださいね。終わったら、湯たんぽを持ってきますから、呼んでください」

夫が動いてくれるかどうか分からなかったのですが、一応声を掛けて湯たんぽを作りに出ます。

やっぱりというか、ちょうどいい入れ物を探し出して湯たんぽを作ってしばらく待ってみたのですが、夫からは全く声がかかりません。

扉越しに声を掛けても返事がありませんし、仕方なくそっと扉を開いて覗いて見ると、ちゃんと着替えた夫が寝台にうつ伏せで寝ていました。

濡れたタオルを回収して、布団を追加して夫掛け、湯たんぽをいれて完了です！

・・・でも、まだ呼吸が苦しそうですね。

ひとまず夫に仰向けになってもらって額に冷たい水に浸した布を固く絞って載せました。
消化に良さそうなものを作って、いつでも水分を補給できるように、水と果物を枕元の棚に置いておきます。

「旦那さま、おかゆ作ったんですが、食べられますか？」

少しうとうとしている夫に声をかけると、ちょっと頷いて起き上がろうとするので、クッションをいくつか持ってきて、よりかかれるようにしました。
夫は酷く億劫そうにしています。熱が全然下がっていないみたいですね。

「旦那さま、これを食べたら、お薬を飲んでくださいね」

そのまま眠ってしまいそうな　夫に声を掛け続けるのですが、ぼんやりとしたまま、おかゆに手をつけようとしません。
やっぱりあまり食欲がないのでしょうか？　それとも、あまり美味しくなさそうでしょうか？
ちゃんと食べれるものですよー、と伝える為に食べて見せようと思ってひとさじ掬ってさましていたら、夫の視線が掬ったおかゆをものすごく、見ています。

あれ？　食べれるのでしょうか？
試しに冷ましたお粥を口もとに持っていくと、「バクン」という音とともに大き目の匙が夫の口の中に消え、驚いてちょっと引っ張るとお粥だけが消えて戻って来ました。
「パックン」なんてかわいい音じゃないでしたよ、今。ちょっと低めの音で「バクン」です。
この匙、私だと全部口に入れられないんですが、夫はかなり余

裕のようです。体に比例して、口の中も大きいんですね！

面白くなってきてもう一度やってみると、今度は少し冷ましが足りなかったようで、バックンとしてからキュと眉が寄りました。

表面だけ冷ましても、中がまだ熱かったようです。

今度はちゃんと冷めているかどうか、匙の端っこを自分で食べて確認してみました。うん、これなら熱く無いですね。

夫に匙を近づけると、ちょっと驚いたような目をしていたのですが、すぐにバクン、しました。

どうかしたのでしょうか？

私がちょっと首を傾げていると、視線だけで続きを催促してきます。

食欲があるのはいいことですね！

せっせと食べさせた結果、全部残さず完食です！

お腹がいっぱいになったからか、どこか満足気な夫に薬を飲ませて、あとはゆっくり寝てもらうことにしました。

・・・私もなんだか、お腹がいっぱいです。

もしも夫が風邪を引いたなら（後書き）

夫の風邪は、あっという間に治ります。
夫の風邪は、ね。

もしも夫が風邪を引いたなら（夫視点）（前書き）

風邪を引くと、思考もおかしくなるものです。

もしも夫が風邪を引いたなら（夫視点）

・・・まずい。

目が覚めて、最初に思ったのはそれだった。

ひどく汗をかいているのに、寒気を感じ、体の節々が痛む。

明らかに風邪の熱症状だ。

ここ数年、風邪なんて引いたことがなかったんだが。

気が緩んだか。

じっと動かずに、浅く呼吸を繰り返し、体の回復を待っていると、腕にひんやりとした感触。

一瞬体に力が入り、それが小さな妻の手だと気付いて、弛緩していく。

すぐに小さな手が離れたと思うと、恐る恐る、そっと額に小さな手が戻ってくる。怯えたように離れていきそうになった手は、額全体を撫でるようにして戻ってきた。

発熱している肌に、小さな手が冷たくて気持ちいい。

「だ、旦那さま、熱です！　起きて、どいてください！」

火事でも発見したかのように慌てふためいた声に、そんなに慌てなくても、と思いつつ、いつも通り足をまげて妻を通してから気がついた。

しまった、朝の挨拶をし損ねた。

思わず離れていく妻の腕を掴んで引き止めようかと思ったが、俺でさえこれほどだるさを感じる風邪を、もし妻にうつしてしまったら可哀想だ、と思いとどまる。

パタパタと軽い足音が家の中を行ったり来たりしている音を聞きながら、ゆっくりと身体を起こすと、節々が痛んだ。

随分、熱が出ているらしい。

「旦那さま、お水飲みますか？」

小さな妻が、タオルに埋もれるようにして、水差しを三つとコップを持ってふらふらと部屋に入って来た。

・・・どうやって水差しを三つも持っているんだ？

差し出してくるコップが大きく見えてしまうほど、細い腕で小さな手なのに。

不思議に思っていると、妻が少し考えた後に、口元までコップを寄せてくる。

水は飲みたいが、動くのが億劫だ。

受け取る気がないと分かると、そのままゆっくりとコップを傾けて来て、何度かに分けて飲ませてくる。汗をかいた身体は自分が思う以上に水を欲していたらしく、やけにうまく感じた。

温かいタオルで顔を拭われて、汗でべたついた感じがなくなっていくのが気持ちがいい。

首筋を拭かれるのもそのままにしていたが、妻が背中側に回っ

て、服の裾から手を入れて来た時は、一瞬体が緊張した。

妻はただ汗を拭っているだけだというのは、分かっている。

・・・分かって、いるんだが。

タオル越しの小さな手が、慎重にゆっくりと背中を這う感触に、意識が集中してしまう。

ちらりと振り向いて盗み見ると、その表情は真剣だ。

一生懸命さが伝わって来るほど真剣に体を拭いているというのに、どこか色めいて見えて。

・・・だめだ。相当、熱で頭がやられてる。

妻が服を着替えるように言って部屋を出て行くと、大きなため息が出た。

動かしずらい身体でなんとか服を脱ぎ捨てて着替えたあとは、何もかもが億劫でうつ伏せになってうつらうつらし始めると、何か良い匂いが漂って来た。

「旦那さま、おかゆ作ったんですが、食べられますか?」

頷いて起き上がろうとすると、背中にクッションを入れて座りやすくした妻が、おかゆをひと匙すくって冷ましている。

・・・柔らかくて、旨そうだ。

その口元をじっと見ていると、妻が匙を差し出して来た。

それを口に含むと、汗をかいたせいか、少しの塩味がとても旨く感じた。

もう一口。
今度は、少し熱い。
我慢できないほどではないが、予想以上の熱さに思わず眉をしかめると、妻がいっそう甘くて旨そうな唇を尖らせて冷ました後に、匙の端がその小さな唇の中に消えていく。
少しの間の後に、納得したように小さく頷いて、そのまま匙を寄せてくる。
恐らく、冷めたかどうかを確認しているだけなのだろうが。
ひとつの食べ物を分け合う、その親密な行動の意味を、おそらく妻は理解していないのだろう。
不思議そうな妻がその事に気付いてしまう前に匙を口にした。
先ほど以上に、旨い。
妻に考える間を与えないために続きを促すと、せっせと冷ましては温度を確認してから食べさせてくる。
すっかり食べ終わると、今度は、程よく腹が満たされて、眠くなってきた。
空になった食器を満足げに片付けたり、タオルを替えたりしながら、パタパタ忙しく動き回っている妻を片手を伸ばして捕まえる。
「だ、旦那さまっ！？」
動揺して暴れて抜け出そうとするのを、しっかりと苦しくない程

度に拘束した。しばらく無駄な努力をしていたようだが、疲れたのか、諦めたのか、大きく息をついて力を抜いていく。

そのまま、わずかに自由に動かせる手を伸ばして、俺に布団を掛け直した妻は、一仕事終えて満足そうに眠り始めた。

腕の中で眠る妻を見下ろしていると、不思議な気持ちになる。

誰かに心配されたり、世話を焼かれたりしている自分なんか、想像もしていなかったというのに。実際にこうして妻があれこれ世話を焼いてくるのは、なんというか、ひどく穏やかな気分になっていく。

甘やかな妻の体温が心地よくて、ただ抱きしめているだけでは、物足りなくなってきた。

・・・そういえば、朝の挨拶がまだだったか。

都合よく思い出した言い訳を心の中でつぶやきながら、ゆっくりと妻の頬に唇を寄せるが、またすぐに物足りなくなってきて。

・・・熱で浮かされた本能が、頬だけで、止まれるわけがなかった。

もしも夫が風邪を引いたなら（夫視点）（後書き）

そうして、妻はがっつり風邪をうつされた、と（笑）

妻が風邪をひいたなら（前書き）

夫の風邪を見事にもらってしまった妻と、その看病（？）をする夫の一コマです。

妻が風邪をひいたなら

夫の風邪が、見事にうつりました。

失敗です。非常に失敗です。風邪なんて、小さな頃にかかったきりだったのですが。

頭が痛いし、咳がでて喉も痛いし、なんだか寒いです。

鼻をかみ過ぎて、音が変な風に聞こえてくるし。

目を開けていると世界がぐるぐる回っていて、気持ち悪いです。

・・・風邪って、こんなに辛いものでしたっけ。

寝台から起き上がれない私に、夫がこまごまと看病をしてくれているのですが、あまり意識がはっきりしていなくて、ところどころ、記憶が飛んでしまっています。

額に乗せられた布は冷たくて気持ちいいのですが、さっきから寒くて寒くて、震えが止まりません。しかも震えると頭も揺れてさらに気持ち悪くなってきました。

朦朧としながら、側で布を交換してくれている夫に、湯たんぽを作って来てもらおうと思ったのですが。

「だ・・・なざ、ま」

ひ、ひどい声ですっ！

何ですか、だんなざまって。しかも喋ろうとしたら喉が酷く痛くて、また咳が出て来ました。

げほげほ咳き込みつつ、夫が動く気配を感じてとっさに夫の服の裾を掴みました。

「さ、むい・・・」

ので、湯たんぽを作って来てもらえませんか？

と言おうと思ったんです。途中でまた咳が出て途中で止まってしまいましたが。

続きを言おうとした直前、夫がするりと布団の中に入って来て私を抱きかかえました。

・・・え？

いや、あの、寒いから温めて欲しいって意味じゃなくてですね？湯たんぽを作ってもらいたかっただけなのですが・・・あれ、もしかして今、私から抱っこをせがんだことになってます!?

具合が悪いのにさらにまた熱が上がりそうになり。

横になっているのに目眩に襲われて呻いたのを寒さの所為だと思ったのか、夫が一層密着して来ました。

うあ、うあーっ！

ち、近いです、夫の体温が、呼吸がっ！

いつも一緒に寝ているとは言え、こんなにくっついたことないんですよっ!?

わたわたしながら、そっと夫の様子をうかがうと、いつも通りの無表情で更に布団でくるんでくれます。・・・夫は全く気にしていないみたいです。一人で焦っている私の方が意識し過ぎなのでしょうか？

夫も一緒に布団にくるまっているのがもの凄く恥ずかしいのですが・・・でもだんだん暖かくなってきた気します。

・・・うん、やっぱり暖かいです。

後から思うと、熱で頭が相当おかしくなっていたのかもしれません。強張っていた体から力が抜けて、震えが止まり、ようやく呼吸も楽になった私は、夫に抱えられたまま、擦り寄るようにして、眠りにつきました。

夫の献身的な看病のおかげで、よく食べて、よく寝て、2日後には寝室から出られるほどに回復したのですが。

起きる度に、着ている寝間着が違うことに気付いた私は。

・・・記録的な高熱で、また寝込んでしまいました。

妻が風邪をひいたなら（後書き）

・・・そりゃ、寝込むわ。

妻が風邪をひいたなら（夫視点）（前書き）

夫は夫で、いろいろ煩悩を抑えて（？）いるようです。

妻が風邪をひいたなら（夫視点）

妻が、風邪をひいた。

俺の風邪がうつってしまったらしい。

元はといえば、俺を数年ぶりに高熱で寝込ませたほどの風邪だ。

小さな妻には熱だけでなく、風邪の諸症状全てが顕著に現れていた。

なかなか熱が下がらず、横になっていても辛そうだ。

意識が朦朧としているときもあり、うなされていることもある。

熱が少しでも下がるように、濡れた布で額を冷やし、咳がひどくてなかなか眠れず、食欲もない妻に、なるべく水分を取らせるようにして看病してるのだが。

想像以上に、きつい。

熱に浮かされ、潤んだ瞳。

普段からほんのり赤い妻の頬と唇はさらに赤く染まり。

荒い呼吸の合間に、時折もれる呻きが、違う状況を連想させて。

相手は病人だとわかっていながら、理性が刻一刻と削り取られ、衝動が表に出てこようとする。

・・・あまり、寝室には長居しない方が良さそうだな。

そう判断して、頻繁に寝室を出入りするようにしていると、妻の小さな声が聞こえた。

「だ・・・なざ、ま」

喉がひどく腫れているのだろう。かすれきった声で呼びかけてから、すぐに咳き込んでしまう。

喉の痛みに効く飲み物を作ってこようと立ち上がりかけると、服の裾が引かれた。

見ると、ようやく咳が収まった妻が、震える手で服の裾を掴んでいた。

今にもこぼれ落ちそうな涙を浮かべて、じっとこちらを見上げている。

「さ、むい・・・」

また咳き込んでしまったが、濡れた唇で囁かれたかすれた声は確かに耳に届いた。

だが、それ以上に、伸ばされた腕の白さと、寝乱れた襟元からあらわになった細い首と鎖骨に目が釘付けになって。

ぞくり、と。

背筋に走った衝動を、とっさに妻を抱きかかえることで押さえた。

震えが伝わってきて、腕に力がこもる。その途端に、妻からか弱げな声が上がり、つい、本気で抱き潰してしまいそうになった。

熱を持った妻の身体は熱く、柔らかい。

腕の中の妻の震えが次第に大きくなり、理性にヤスリがかけられていく。

このままでは、まずい。何かのきっかけで、とまれなくなって

しまいそうな気がする。
かといって、手放したくもない。
頼むから、おとなしくしていてくれ。
祈るような気持ちで妻を見ると、動揺しきった大きな目と行きあった。
・・・目が、泳いでいる。泳ぎに、泳いでいる。
疑問と混乱と動揺を余すことなく伝えてくるその大きな目に、つい、笑ってしまいそうになった。
いくらなんでも、動揺し過ぎだ。
狂暴な衝動が収まり、かすかに寝具から出てしまっていた妻の肩をしっかりと布団に包み直した。
密着していることにうろたえているのであろう妻に、これが当然なのだと思い込ませるため、あえて無表情を貫く。
案の定。
妻は恥らいながらも少し納得がいかないような目つきをしていたが、やがて何かに気を取られ、ふと、こわばりながら震えていた体から力が抜けていく。
安心したのか、くったりと寄りそってきて、大きな目がうつらうつらし始めた。
素直な妻だ。

ゆっくりと閉じて行くのを見届けて、柔らかな頬に唇を落とす。

今は、ここまで。

熱く、柔らかな妻の頬をもう一度味わう。

突き動かされるような衝動はなりを潜めたが、自分で決めたその限界に物足りなさを感じてしまう。

もう少し、だけ。

しっとりと汗をかいている腕の中の妻。

深い眠りについた妻の体は、俺にも伝わってくるほど汗をかいていて。

このままにしておけば、いずれ冷えて体温を奪っていくだけだ。

・・・言い訳がたったついでに。

ひとつ、妻に仕掛けてみるか。

その後。

汗をたくさんかいてよく寝た妻は、食事も食べれるようになり、快方に向かったのだが。

あるとき、自分の着ている寝間着を見て硬直していたかと思うと、俺の顔を見るなり、湯気が出そうなほど真っ赤になって、また寝込んでしまった。

・・・ようやく、気付いてくれたようだ。

妻が風邪をひいたなら（夫視点）（後書き）

夫、少しは反省せいっ！（叫）

限りある時間を有効に使いましょう。？　の翌日（レイン視点）（前書き）

レイン（友人）だけが、知っている。

限りある時間を有効に使いましょう。？　の翌日（レイン視点）

最近、友人の顔色がどんどん悪くなってきた。
もともと一途というか、思い込んだら一直線な性格をしている友人は、自分の限界を見極めるのがあまりにも下手だった。

限界を超えるまでは全力でひとつのことに集中してわき目も振らず突っ走るくせに、限界を超えた途端、迷子になった子供が途方にくれるように、ぴたり、と止まる。

なにがあったのか話してはくれないが、友人は今日、いきなり限界を迎えたようだ。

ここ数日、忙しく活動していたはずが、早々に神殿から帰ってきて、ひどく暗い顔で部屋に引きこもっている。

いったい、なにがあったのか。

彼女が神殿で何をしようとしているのかは知っている。
・・・もしそれが私にも可能なことなら、私自身が率先してやっていたはずのことだから。
私にはその資格がなくなってしまったから、こうして商売を始め、この地で地盤を固めてきたのだけれど。

友人がやろうとしていることは、私が知っていることだけではない気がした。

話して欲しいと思うが、それでも、こちらから聞くことはしない。
友人から話してくれるまで、ただ見守るつもりでいる。
私が一番つらいとき、彼女はそうしてくれたから。

翌朝。
くぐもった悲鳴が聞こえて、友人の部屋に駆けつけると、友人は顔を真っ赤にさせながら、しどろもどろに夢を見てそれを思い出していた、と説明してくれたのだけど。
どんな夢だったのかは、言われなくてもわかる。

・・・相変わらず、絶妙な位置につけるね。

友人が鏡を見ても決して見えない、ちょうど髪で隠れるのだけどよく見ると見える、絶妙な場所に咲いた、赤い華。

どうやら、ずいぶんと大きなクマ似のムシが夢に出てきたらしい。

そのおかげかどうか。
友人から思い詰めたような、追い込まれたような雰囲気が消え、いつもの前向きな表情に変わっている。

夢をみたと思って、よく眠れたのなら、それでいい。

それにしても。
脳裏に、友人に寄り添いながら、いつも私に威嚇と警戒の視線を向けてくる友人の夫を思い浮かべ、苦笑した。

・・・彼の忍耐力は、感服ものだ。

限りある時間を有効に使いましょう。？　の翌日（レイン視点）（後書き）

妻のことを良く理解して受け入れているレインは、夫にしてみたら確かに警戒対象になっちゃうかも知れない、と思ってしまう一コマでした・・・。

ある夜の出来事（前書き）

妻視点　→　夫視点　→　夫視点です。

ある夜の出来事

急に夜中に目が覚めて、ふと隣を見ると、夫がいませんでした。

あれ、と思って寝具の中で手を伸ばしてみると、いつも夫が寝ているあたりもひんやりしています。まだ寝ていないのかな、とも思ったのですが、寝室も居間の方も明かりが消えてしん、と静まり返っています。

もしかして、どこかで倒れているんじゃないかと心配になって、明かりを持って一部屋一部屋確認したのですが、やっぱり夫はいませんでした。

暗くてちょっと怖いのを我慢して外に出て、念のため厩を覗いてみると、馬もいません。

・・・外出したみたいですね。でも、こんな時間に？

どこに行ったんだろう、と心配しながら、寒さもあってとりあえず寝具の中に戻りました。

私ひとり分のぬくもりはすでに消えてしまっていて、ひんやりとした寝具の中で小さく震えつつ、何とか温めようと奮闘しているのですが、一向に暖かくなりません。

・・・夫は、いったいどこに行ってしまったのでしょうか？

春が近いとはいえ、夜はまだまだ寒いこの季節のこんな夜中に外

出するなんて。また風邪でも引いたら、どうするんですか。寝ているところを起こされたであろう、馬だってかわいそうですよ。外は寒いですし。

・・・うん、寒いです。

夫はかなり体温が高いので、そういえばこれまで寝ている時に寒い思いをしたことがなかったんですよね。こうして夫という暖房がなくなると、まだまだ春は遠い気がします。

それにしても、寒くて眠れません。

しばらく布団の中でごろごろしていたのですが、ふと、思いついて寝室から出て、暖炉に火を入れて部屋を暖めつつ、お湯を沸かして湯たんぽのようなものを作ってみました。

それを布で包んで夫がいつも寝るあたりに入れて、ついでに焦げ茶色のお気に入りのクッションを抱えて寝ることにしました。

でもやっぱり。

即席湯たんぽより、夫のほうが温かいです。

・・・旦那さま、早く帰ってこないかな。

―――

深夜。

いつも通り、妻を奥側に転がして安定させると、外から、ウーマの低いうなり声が聞こえてきた。警戒を促すものではなく、心底嫌そうなその音。

俺だって、嫌だ。

今夜はひどく冷える。

小さな妻は寒いのか、いつもよりもぎゅうぎゅうとくっついて

きて、顔の半分以上布団の中に潜ってしまっている。これでも呼吸がちゃんとできているのが不思議だ。この暖かさが名残惜しい気がしたが、今こうしている間にもウーマのうなり声は続いている。

あきらめの溜息をついて、妻を起こさないように注意しながら、手早く着替えて外へ出ると、グレインがボウドゥに乗って待っていた。

「また、一人。男だ」

人の顔を見るなり、グレインが小声で必要なことだけを伝えてくる。

今月に入って、これで3人目。今年で数えれば、すでに11人の死亡が確認されている。それも、妻と同じ、訪れし者ばかり。自警団も警領士も見回りと見張りを増やしているが、その隙間を縫うようにして、犯行が行われ、いまだ一人も捕まえられていない。

リーフェリア祭が近づくにつれて、その人数が急激に増え始めている。

「フィリウスが先に行っている」

それに頷きを返すと、ほぼ同時にウーマが道具を咥えて厩舎から出てきた。

「・・・君のボウドゥは、少々、賢すぎないか？」

ウーマはグレインが騎乗しているボウドゥの威嚇の声を鼻で笑ってみせている。

確かに、普通じゃないかも知れないが。

とはいえ、おそらくグレインの騎乗はウーマよりもかなり若い。

その威嚇を鼻で笑うというのは。

「大人気ない」

つぶやいた声を正確に拾ったウーマは大きな目をさらに大きく見開いて、目を潤ませている。

そのまましばらく震えていたが、急に威嚇をやめたグレインの騎乗が歩み寄ってきて、ウーマの肩口に鼻を二三度、押し付けた。

元気出せ。

確か、そんな意味を持つ動きだったか。

「・・・・・出発、しよう」

微妙な視線でそれを見ていたグレインに、ため息とともに促されて出発した。

――――

明け方近く。

体力的にも精神的にも疲れて帰ると、家から明かりが漏れてた。警戒しながら玄関を開けると、暖炉に火が付いている。室内の気配を探り耳をすませるが、感じ慣れた眠る妻の呼吸音と暖炉のまきが燃える音しかしない。

妻が暖めておいてくれたのか。

知らず力が入っていた身体から緊張が抜けた。

寒さから解放されて小さく息を吐き、寝室を覗くと、妻が壁際に身体の前面を押し付けるようにして寝ている。相変わらず、おかしな寝相だ。

なんだか、気持ちが柔らかくなる気がした。

手早く着替えて冷たさを覚悟して布団に入ると。

暖かい。

布団を探ればいつだったか妻にせがまれて作った保温用の入れ物が布に巻かれた状態で入っていた。

暖めておいてくれたのだろうか。

壁側にくっついている妻を転がそうとして、妻が抱えているものが目に入る。

妻のお気に入りの焦げ茶色のクッション。そっとそのクッションを取り上げると、嫌がるように身をひねって転がってきた。

しばらくもそもそと動いていたが予想通り、腕のなかで収まって落ち着いてくれる。

心地よい体温の妻を抱きこんだまま、目を閉じる。

・・・この暖かさは、もうきっと、手放せない。

ある夜の出来事（後書き）

温かさが染みる夜の一コマでした。

妻のやきもち、夫のやきもち（前書き）

※嫉妬、というキーワードでお礼の小話を作ってみました。時間軸的には、ちょっと未来です。

妻のやきもち、夫のやきもち

ある日のことです。

賢妻の勉強会の帰り、レインと一緒に街を歩いていた時、反対側から夫が女性と一緒に歩いてくるのが見えました。

すらりと背が高くて、短く切った髪が頬のあたりでさらさらと揺れていて、とても綺麗な人です。

時々夫の肩に手を置きながら、楽しげに話をしています。

こちらの女性にしては珍しく、袖のない上着を着ているのですが、それがまたほっそりとしながらしなやかに筋肉がついている腕を、とても魅力的に見せています。

「あれは・・・」

隣で友人が何かをつぶやいたようなのですが、よく聞こえませんでした。

なぜでしょうか。ちょっと気分が悪いです。

私が夫に気づくのとほぼ同時に夫も私たちに気づいたようで、少し遅れて一緒にいる女性も私たちに気づいたようです。

女性の視線が、やけに鋭いような気がするのは、気のせいでしょうか？

でも、夫よりも鋭さにかける視線を怖がるような私ではありません！

夫に本気でにらまれたら、さすがに逃げ出してしまうかもしれ

ませんが。でもその場合、逃げ出しても逃げられなそうな気がします・・・。

女性は、私のことを上から下までじっくりとみられた上で、クスリ、と笑いました。

・・・むか。

なんでしょう、今のものすごく挑戦的な笑みじゃなかったですか!?　いえ、でも気のせいかもしれません。好意的な笑みがちょっとタイミングの問題でそう見えただけとか。

女性はクスクス笑いながら、夫の肩にしなだれかかり、何事かを夫の耳元でささやいています。

やっぱり、気のせいなんかじゃないです!!
思いっきり、私に喧嘩を売っていますよね!?
いいでしょう、その喧嘩買ってやろうじゃありませんか!

ついでに、女性にしなだれかかられて、何も言わない、何もしない夫に対しても一言言わせてもらいますよ!　まぁ、ある意味ないない尽くしの夫らしいといえば夫らしいのですが・・・いえ、ダメです。夫らしくても、やっぱりダメです。私の気が収まりませんっ!

鼻息荒く二人のもとへ向かおうとしたら、後ろから手を引かれました。

今の私は売られた喧嘩は全部買わせてもらっちゃいますよっ、と勢いよく振り向いたところで、友人がにやり、と笑ったのを目にして、頭から水を浴びせられたように興奮が引いていきました。

「あ、あの、レインさん？」

思わず腰が引けてしまうのは、仕方ありません。

だって、私、知ってます。こういう笑顔を見せる時の友人は、何かあとあと厄介なことになることを考えている時だって。そしてその厄介ごとは、なぜか大体私に降りかかってくるんですっ！

もの凄く嫌な予感がして、逃げようとしたのですが、ちょっと遅かったようです。

華麗な男装の麗人の仮面を素早くかぶった友人は、私の肩を抱き寄せて、米神のあたりに顔を寄せてきました。

フッ、と友人の呼吸がこめかみを撫でて行きます。

って、何してるんですか、あなたはっ！？

それ周りの人が見たら、ちゅーしてるみたいに見えちゃいますよっ！？

いくら見た目が男性とはいえ、友人は女性です。ですから、本来なら動揺しなくてもいいところなんですけど、でも、はたから見たらカップルがいちゃついているように見えなくもないですよね・・・。そう思ったら、急にこうしているのが恥ずかしい気がして、顔に熱が集まってきました。

気を逸らせるものを探して視線をさまよわせると、夫たちが目に入ってきて。

一気に、青ざめました。

夫が、突き刺さるような鋭い視線で睨んでいます。

ものすごく、睨んでいます。
動けません、逃げるどころか、金縛りにあったように、体を動かしたくても動かせません！
夫が女性を押し退けて近づいて来ました。
まずいです。
何がまずいのか、よくわからないのですが、とにかくマズイです！　そんな気がします！
思わず友人の手をとって逃げようと動きかけ。
その手が空を切りました。
見ると私以上に青ざめながら気丈笑みを浮かべ続けている友人が、どこかからか現れた元夫によって引き離されて行きます。
え？
と思った瞬間、後ろから締め上げ・・・捕獲さ、抱き締められました。これは、間違いなく夫です。夫なんですが、ちょっといつもより力がこもってます、というかしまってます、絞まってますっ！
お肉が、内臓が飛び出しますっ！　とバシバシ夫の腕を叩くのですが、なかなか力を弱めてくれません。
い、息が出来なくなって来ました。
このまま夫に絞め殺されてしまうのかも、とお花畑が見え始めた頃、豪快な爆笑が聞こえて来て、夫の腕に一瞬もの凄く力がこもったかと思うと、ゆっくり力が抜けて行きました。
血、血の循環が再開されました！　危うく本当に死んじゃうかと思いましたが、どうやら九死に一生を得たようです。どうにか呼吸

を整えて、ようやく周りを見回す余裕が出て来ました。

まだ声を上げながらお腹を抱えて笑っているのは、先程の女性でした。

あれ？　でも、なんだか違和感が・・・。

その違和感の正体を見極めようと女性をじっと見ていたら、また夫の太い腕による締め付けが始まりました。夫の方を振り向きたいのですが、後ろから締め上げられているので、少しも振り向けません。

「旦那さま、苦しいですよ！」

思わず声をあげて抗議すると、夫の腕の力が弱まったのですが。

後ろから顎を固定されて。

ぺろり。

暖かくて濡れたものがこめかみをぉぉっ！？

反射的に思いっきり夫を振り払おうとしたのですが、全く、少しも、ちっとも動けませんっ！　片腕のくせに、一体どういう拘束の仕方をしているんですか！？

って、うそっまたっ・・・っ！！

抜け出そうとした間にも、それは何度もこめかみを往復し。

「おやおや」

面白がるような低めの声を聞きながら、羞恥のあまり、目を回してしまった私は。

・・・うちに連れ帰られてからも。夫に、離してもらえませんでした・・・・。

妻のやきもち、夫のやきもち（後書き）

焼きつ、焼かれつ（苦笑）

妻のやきもち、夫のやきもち（謎の女性視点）（前書き）

楽しいことが大好きな、謎の女性視点です。

面白いことになった。

少し離れた場所に立って、こちらをじっと見ている、二人の女性。

一人は、良く見知った男装の女性で、向こうもすぐにこちらに気付いたみたいだ。もう一人は、見知らぬ女性。

ただ、今一緒にいる男の表情がわずかに動いたのを見て、ああ、と思う。

あれが、噂の。

小さな体に、黒髪、黒い大きな瞳。

特別なところなど、どこにもなさそうなのに、なぜかこの獣の気を引き、あまつさえ、ボウドゥの名づけ親の一人になったという女性。

なるほど、確かにこうして殺気を含ませた視線にも、怯える様子はない。

体つきから見て、武術、剣術の類は全く出来ないとわかるだけに、どうして対抗する術がないのに、こんなに堂々と真っ向から視線を絡めてこれるのかが不思議で、面白い。

すごく、面白そうな、おもちゃ。

クスリと笑うと、なにを勘違いしたのか、大きな黒い瞳に、一瞬

好戦的な色を浮かべたけれど、すぐに、思い直すように何か思案しているのが見て取れる。

すごい。こんなに読みやすい相手は久しぶりかも。

それが面白くてくすくす笑いながら、唇を読まれないよう、一緒にいる男の耳元に口を寄せてささやいた。

「あの子があなたの奥方でしょう？　なにを勘違いしているんだか、嫉妬しちゃって。かわいいねぇ」

すると、男がちょっと考えるような気配を見せたあと、どことなく上機嫌になったのがわかった。その視線の先には、毛を逆立てた猫のように、無謀にもこちらを威嚇してくるかわいい女性。

なるほど。噂どおりに、べたぼれなわけだ。

本当に面白い。

男にも、女にも、決してのめりこむことがなく、常に淡々としていたこの男が、こんなにもあっさりと機嫌の良しあしを悟らせるなんて、よっぽどのこと。

その喧嘩、買ってやる！　とばかりにこちらに向かってこようとする女性は、実に遊びがいがありそうな獲物なのに、もし手出ししたら、間違いなく男に殺されるとわかっているだけに、残念だ。

さぁ、男を怒らせない程度に、どう迎えてやろうか。

そう思ってわくわくしていたら、知り合いの男装の女性のほうが、後ろから手を引いて、女性を止めてしまった。

なんだ、つまらないの。

と、邪魔をした女性を軽く睨もうとしたら、ものすごく、物騒な笑みを浮かべていた。あのひと、こんな笑い方も出来たんだ、と思っていたら、勢いよくこちらに向かってこようとした女性のほうが、逃げ腰になった。

それから、男装の女性のほうが、もう一人の肩を抱き寄せて、米神の辺りに口付けているようで。

ものすごく、顔が真っ赤になっていくのが見えた。

女二人で、なにやってんの？

と呆れながら見ていたら。

隣から、噴出してくる殺気に、思わず肩にかけていた手を外して、懐の武器に手をかけそうになってしまった。

男はまっすぐに、自分の妻である女性だけを身も凍るような視線で睨んでいて。

まさか、嫉妬？

おいおいおい、相手は男装しているとはいえ、女同士だよ？

押しのけるようにして、ゆっくりと自分の妻に近づく男のその動きは、完全に獲物を狙う捕食者のそれで。

うわ、マジだよ、この人。

呆れ半分、面白さ半分で見守っていると、自分の夫と視線が合った女性は、一気に青ざめて、自分を抱き寄せている男装の女性の手

を取って逃げようと動きかけたのが見えた。

あ、それはマズイでしょ！

唯でさえでも殺気立っている男をこれ以上刺激してどうするのさ！

慌てて懐に手を入れるのと、どこからともなく現れたもう一人の男が、男装の女性を掻き抱いて後ろに大きく下がるのとが同時だった。

女性の手が、空を切る。

そして、しっかりと自分の妻を捕獲した、男。

今、目の前には、それぞれの妻を抱きしめて捕獲する二匹の獣。

そのどちらもが必死に抱きしめているのが、小さな、黒髪、黒い瞳の小動物のような奥方で。

で、方や、やってやったぞ、的な引きつった笑みを浮かべ、かたやなにが起きているのかわかっていない様子でパニックを起こしている。

それぞれのその必死の様子があまりにも面白くて、つい、爆笑してしまった。

笑い声で我に返ったのか、女性が何か違和感を感じているようにこちらを見ていたけれど、男が腕に力を込めたのか、少し苦しそうな様子を見せて。

「旦那さま、苦しいですよ！」

と、はっきりと抗議した。

あの獣相手に。しかも今は頭に血が上っているといえる状態なのに。

命知らずな、と思った途端。

ぺろり。

と主に男装の女性に見せ付けるように先ほど唇を当てていた米神を舐めて見せた。

それから、真っ赤になってもがく獲物を無視して、何度も、何度も舌を這わせ。

「おやおや」

これはもうすぐ限界だな、と思うのと同時に、きゅう、というなんともいえない音を立てて、女性が目を回して気絶した。

気絶した自分の妻を嬉々として連れ帰る男を止めるほどの命知らずは、ここには居ない。

ああ、面白いったら、ありゃしない！

ところかまわず、腹を抱えて爆笑するなんて、いつ振りの経験だろう。

妻を抱きかかえて去っていく男の後姿を見送ったあと、涙をぬぐいながらまだこの場に残っていた男装の女性と銀髪の男へと視線を向ける。

こっちはこっちで面白そうだし。

・・・しばらく、この街に滞在しようっと。

妻のやきもち、夫のやきもち（謎の女性視点）（後書き）

この謎の女性（？）の正体は、次の小話で！

やきもちその後（友人視点）（前書き）

謎の女性（？）の正体は！？
あっさり分かります（苦笑）

やきもちその後（友人視点）

おそらく、羞恥のあまり限界を突破してしまったのであろう友人が、夫殿によって連れ去られていくのを見送ると、腹を抱えて爆笑していた同行者がようやく笑いを納め、涙をぬぐいながらこちらへ歩いてきた。

耳元で切りそろえられた銀髪が揺れている。

「やぁ、義姉さん。面白いものをみせてもらったよ」

「相変わらず、趣味が悪いな、君は」

女性にしては、低い声。

友人は、思いっきり勘違いしていたみたいだけど、これは列記とした男で、さらに元夫殿の弟だったり、する。

確かに中性的な服装をしているし、元夫殿と同じようにどちらかといえば女顔だとは思うけど。

むき出しの腕は女性ではありえない筋肉のつき方をしているし、首も女性と比べれば太い。身長だって、夫殿と並んで少し低い程度だから、よく見れば友人だって気付いただろうとは思う。

でも、その余裕もないくらい、やきもちを焼いてしまっていたようだ。

縄張り争いをする猫のように毛を逆立てて義弟に食って掛かろうとする友人に気付いた夫殿がちょっと嬉しそうな雰囲気を出していたので、こちらも仕返ししてやろう、と思ったのだけど。

「そういう義姉さんだって相当いい趣味しているよね。危うく殺されるところだよ?よかったね、兄貴が近くにいてさ」

本気で殺意を向けられるとは、流石に思わなかった。

友人が絡むとどうしようもなく大人気ない奴だとは思っていたけれど、まさかここまでだったとは。

息が出来なくなりそうな圧迫感の中で、それでも笑っていられたのは、友人を傷つけられたら、間違いなくあの友人は夫殿を許さないと知っていて、夫殿もそれを知っているとわかっているからだ。

でも流石に、あそこで手に手をとって逃げたりしたら、抹殺されていたかもしれない。

そういう意味では、絶妙なタイミングで体を引いてくれた元夫殿には感謝だ。

「そっちがからかったりしなければ、何もしなかったさ。でも、かわいいだろう？　私の友人殿は」

「確かに。あれは、かわいいね。思わずいじり倒したくなっちゃう」

友人自慢を始めると、義弟がにやり、とおもちゃを見て目を輝かせる犬のような目をしていた。

「・・・一応言っておくが、やめておけ」

「わかってるって。彼があんな勢いで掻っ攫っていくほどのお気に入りを取り上げたりしたら、僕なんか秒殺でしょ」

・・・元夫殿が止めてくれてよかった。

この二人は、型的な男の二人兄弟で、まじめで面白みに欠ける兄に、自由奔放すぎて我侭な弟という構造が出来上がっている。

義弟は面白いと思ったものには、徹底的に執着するし、面白ければ全てよし、とばかりに周囲をかき回すから、出来れば友人とはあまり絡ませたくないというのが本音だ。

「ところで、レイン」
「なに」

あっさりと義弟が引いてくれたので、ほっとしていると元夫殿が話しかけてきた。

リーフェリア祭以降、何かと元夫殿が私の側に居ることが増えている気がする。気がつくと、いく先々で遭遇しているから、偶然ではないだろう。

以前は話すものいやだとばかりに避けていたのだけど、最近は多少の会話を交わすようになっている。

「俺も少々、腹を立てている」
「は？　なにに？」

とはいっても、いきなりそんなことを言われても、意味がわからない。

「なぜ、彼女に口付けた？」
「ああ。なに、まさか焼いているの？」
「そうだ」

あっさり認められて、思わず、顔に血が上った。

いやな予感がして、元夫殿の腕の中から出ようとして。
がっしりと、固定され。
唇に唇を押し当てられて。
「・・・っはなせ、この大バカやろうっ！」
思いっきり振り払うと、元夫殿はあっさりと手を離した。
真っ赤になっているだろうと思うと、ものすごく悔しい。こんなことに動揺するなんて！
ギッ、と元夫殿をにらみつけると、その目に、何か、決意のようなものが浮かんでいるのを見て、思わず、一歩後ずさってしまった。
「レイン、逃げるな。もし逃げれば」
どこか、うっとりと。
「狩る」
・・・宣言された。
「ふ、ふざけるなっ！」
思わず、元夫殿をこぶしで殴りつけていたのは、不可抗力だ、うん。
「がんばって、義姉さん。一応忠告だけど、逃げるのはマジでやめたほうがいいよ」

にやにや笑っている義弟を見て、確信した。
・・・こいつ、見物して楽しむ気、満々だ。

やきもちその後（友人視点）（後書き）

というわけで、兄夫妻のすったもんだをこれから見物する気満々の弟くんでしたー。

妻、夫に鍛えられる？（前書き）

運動は大事です。

妻、夫に鍛えられる？

夫が、急に私に運動を進めるようになりました。
まぁ、確かにこちらに来てから毎日家事や庭と畑の手入れが忙しくて、あまり運動らしい運動はしていなかったのですが。

どうして、急に運動するように言い出したのでしょうか？

もしかして。
私、太っちゃいました？

確かに最近、三食しっかりお腹いっぱいになるまで食べているほかに、レインからもらったお菓子とかも食べていましたっけ。ウーマさんにハチミツパンをあげるついでに、私もつまみ食いしちゃってましたし。そういえば、スカートがちょっときついような・・・。

これは、由々しき事態です！

でも、運動ってなにをすればいいでしょうか？
家の中で出来ることといえば、ひたすらお掃除したり、爪先立ち出歩いたり、体の節々を伸ばしたりするくらいしか思いつきませんし、外となると走るとか、縄跳びとかでしょうか。

とりあえず、お掃除からしましょうか。運動も出来て、部屋もきれいになって一挙両得ですし。
まずは前々から気になっていた物置部屋の片付けから始めることにしました。
私の私物は入り口付近にまとめてあるのですが、正直物置部屋

の奥側にはなにが入っているのかさえ、知らないんですよね。
以前、物置部屋で寝られるようにした時は、雨漏りと隙間風がひどかったですから、もしかしたら、結構痛んでいるかもしれないので、ついでにそこも確認してみましょうか。

手近なものを運び出して、少しでも空間が空くように、並べ替えたりしていたのですが。

お、重い、です。
なんでこんなに重いものばっかりなんですか！？
箱の中身を開けてみてみたい気もしましたが、これらは全て夫の私物なので、それはしちゃだめですよね。見てはいけないものが出てきても嫌ですし。
でも、本当になにが入っているのでしょう。
さっきから持ち上がらない箱もたくさんありますし。

ちょっと夫に手伝ってもらおうかな、と考え事をしていたのがいけなかったのか、頭の近くまで箱を持ち上げたらグラリ、と体が揺れて倒れそうになりました。

うわっ、転ぶ！

と思って目を瞑った瞬間、腕から重みが消え、体を支えられました。
そっと目を開けてみると、夫が片手で箱を持って私の肩を支えてくれています。

「あ、ありがとうございます」

夫は無言でしばらく私を見ていたかと思うと、持っていた箱をひ

ょい、と私に渡しました。反射的に受け取ったのですが、重みにふらつくと、また箱を回収されます。

夫はその箱を軽く積み重ねると、さっきまで私が重くて持ち上げられなかった箱を持って、私に渡そうとしました。

「ちょ、だ、旦那さま、それ無理です！　持てないです、絶対落とします！！」

思わず逃げ腰になると、夫はちょっと驚いたような顔でまた何かを考えているようでしたが、結局元に戻しました。

それにしても、夫は、あんなに簡単にもてるんですね。

一つ一つの箱が異様に重いのは、夫仕様になっているからに違いありません。

私は、完璧に片付けることは早々にあきらめることにしました。

・・・それにしても、箱の中身が気になります。

妻、夫に鍛えられる？（後書き）

妻、むしろ女性としては力もちな方なのですが、比較対象が夫しか居ないので、非常に非力に見えてしまう・・・（悲）

妻、夫に鍛えられる？（前書き）

運動は大事・・・だけど。

それからしばらくして。
夫が走ろう、と言い出しました。

たぶん私がいつまで経っても本格的な運動を始めないので、業を煮やしたのかもしれません。
でも、自慢じゃありませんが、私、走るの苦手なんです。
短距離、長距離わけ隔てなく、苦手です。
昔、兄弟たちからも、お前は歩いたほうが早い、といわれてしまっていたくらいなので、出来れば遠慮したいなぁ、と思ったのですが、でも、まぁ、せっかく夫が誘ってくれたんですし。
ちょっとくらい、走ってみようかな、と思ったのが間違いでした。

一人で走るのでもなく、夫が隣で走ってくれるわけでもなく。
後ろから、夫が追っかけてきます。

私がこんなに必死に走っているというのに、涼しい顔で追っかけてくる夫に、とても悔しい思いをしていたのは最初だけ。

後ろから、夫がどんどん迫ってきます。
ぜぃぜぃ呼吸しながら、つい後ろを振り向いてしまうのは、怖いもの見たさというよりも、もう追われるものの強迫観念にほかなりません。

い、いやぁぁぁぁっ！！
ずっと同じ速度で走っている夫に捕まると、もれなく罰が下る

んです！

必死に少しでも夫との距離を維持しようと限界を超えて足を動かすのですが、所詮、超鈍足が鈍足に変った程度。夫は涼しい顔のまま、一定の速度で走り、徐々に距離を詰めてきます。

スピードを上げて、すぐに呼吸が荒くなり、肺が痛み出しました。

こ、このままでは追いつかれてしまいますっ！

こうなったら、最後の手段！

私は大きく息を吸うと、呼吸を止めました。

そのまま、限界まで走りますっ。こうすると、息が苦しくて、もがくようにして走る速度が上がるのです！

でも、それも一瞬のこと。

大して距離も走らないうちにあっさり限界が来て、速度が落ち、あっさりと夫が伸ばした腕で背中をトン、と叩かれてしまいました。

ま、またつかまった・・・っ

もう自分が息を吸っているんだか吐いているんだかもわからなくなりながら、荒い呼吸を繰り返していると、どこか楽しそうな夫の視線とぶつかり。

あ、と思ったときには、もう罰が執行されました。

むに。

夫の大きな手が、私の、私の・・・っ！
わき腹を掴んで脂肪の感触を確かめていますっ！

むにむに。

私は悲鳴を上げて身をよじるのですが、夫の手は離れてくれません。

これ、何の羞恥プレイですかっ！？
女性の脂ぼ・・・ウエストを掴むなんて、ひどすぎます！

「だ、だんな様の、ばかぁぁぁっ！」

最後には、捨て台詞を吐いて、ウーマさんのところに逃げ込みましたが。

・・・すぐに、回収されてしまいました。

妻、夫に鍛えられる？（後書き）

女性の脂ぼ・・・ウェストは、禁断の場所ですよね？

夫、妻を鍛えてみる（夫視点）（前書き）

夫は妻が心配なのです。

夫、妻を鍛えてみる（夫視点）

妻に関して、最近、改めて気付いたことがある。

妻は非力だ。

物置部屋でなにやら物の出し入れをしていたところに通りがかったら、箱を上に載せようとして、潰されそうになっていた。

見かねて手を出すと、その箱は驚くほど軽く、片手でも持てるほどの重さだった。

ふざけているのかと思ってさらに見ていると、本当に妻にはふらつくほどの重さに感じているらしく、もう少し重いものに関しては、持ち上げることさえできない。

特にわかりやすいのは、洗濯物を干しているとき。

妻が何度も絞って、踏んで、水を切ったはずの洗濯物は、干してから大して時間が経たないうちに水滴が落ち始める。

試しに、妻が絞った後の布を絞ってみたら、たっぷり水が出てきた。

結局、洗濯物を干す前に絞るのを手伝うことが日課になっているのだが、絞るたびに妻がどことなく悔しげなのは、どういうことだろうか。

それから、妻は、体力がない。

前にウーマにからかわれて、怒った妻がウーマを追いかけていたのだが、まだ家から見える距離で体力が尽きていた。

膝に手を当てて、ぜーぜー息をつく妻に、ウーマも「まさか？」というように驚いた顔をしていたが、俺も驚いた。

もちろん、俺を基準に考えてはいけないことはわかっている。
だがそれにしたって、体力がないにも、ほどがあるだろう。

これでは、有事の際になにも出来ずに死んでしまいそうな気がする。

ただでさえでも、妻は小さく、細い。
せめて、もう少し体力をつけさせたほうがよさそうだ、と判断して、休日に妻を少し鍛えてみることにした。

・・・結果、わかったこと。

妻は、基礎体力が鍛錬所の女性たちの１０分の１以下しかない。
無理に運動させると、すぐに変な音で荒い呼吸が始まってしまい、最終的にはひっくり返ってしまう。
毎朝、毎夕必ず運動させて少しでも基礎体力を伸ばそうと試みたのだが、たった数日で、妻は断固拒否の姿勢を見せた。

運動すること自体は嫌いではないようなのだが、俺が併走するのが嫌なようだ。
むきになってちょろちょろと走る妻が面白くて、つい調子にのって罰則付きで追い回してしまったのが失敗だったらしい。

だが、妻に運動はさせたい。
ではどうするか、と考えていると、妻が動きやすい服装でバスケットを持ち、声をかけてきた。

「旦那さま、ピクニックに行きましょう！」

歩くのも、確かに運動になるか。

小さく頷いて準備をし、ついでに妻からバスケットを受け取ると、妻はほっとしたような目をしながら、出発！と腕を振り上げた。

自分で言ってくるだけあって、妻は歩くことは苦にならないようだ。景色を見ながら、あれこれと話しながら楽しげに歩く妻の隣で、時折相槌を打ちながら歩いていく。

妻と話していると、時々、自分と妻とでは見えている世界が違うのでは、と思うときがあるほど、妻はいろいろなことに気付いて、それを俺に伝えてくる。

山の緑が変わり始めている、雲の形が面白い、あの木の実は食べられるのか、虫が花の蜜を吸っている。

そのどれもを、生き生きと話す妻。

話に夢中になりすぎて、足元がおろそかになった妻が転びかけたのきっかけに、その小さな手を俺の手の中に握りこんだ。

動揺している気配を感じるが、こうしたほうが安全だろう、という態度を崩さずにいれば、妻は頬を染めながらも、おとなしく手をつないだままにする。

俺は、山の色より、妻の頬の色のほうが気になるが。

・・・こういう、穏やかな時間も、悪くない。

夫、妻を鍛えてみる（夫視点）（後書き）

ちなみに、妻は歩くのは、大好きです♪

酔っぱらいヴォルフのデレ（ヴォルフ視点）（前書き）

デレたヴォルフが見てみたい！　ということで、甘甘めざして、酔っ払わせてみました。

酔っぱらいヴォルフのデレ（ヴォルフ視点）

馬鹿な真似をしちまったなぁ。

久しぶりに自警団の連中と飲みに行ったら、何故か他の獣と飲み比べをすることになっちまった。

そんなものしなくても、結果は分かり切っているっつうのにうまく乗せられて、ある酒全部飲み干す勢いで飲みに飲んだその結果。

自分も相当酔っているのに、ぶっ倒れて寝こけたフィリウスを運んで帰る羽目になり、余計な運動のせいで、さらに酔いがまわる。

さっさと寝ないと明日に響く、と足元も覚束なくなるほどふらふらになりながら家に帰ると、奇妙な違和感を感じた。

・・・なんだ？

気のせいか、とは思うものの、胸騒ぎにも似た妙な違和感は消えない。

危険、じゃねぇな。

ただ、あるべきものが無くなっちまっているような、物たりなさ。

酔った頭で、もう一度自分の寝室を見回して、気がついた。

ああ。俺の、あれがないのか。

明日も仕事があるから、さっさと眠りてぇのに。

ぶつぶつ言いながら、廊下に出て取りに行く。

おお、あったあった。
ったく面倒かけさせやがって。

それを両手に抱えて、自分の寝室に戻る。

これでやっと、安眠できる。

・・・翌朝。

「あれ？　あたし、なんでここで寝てるの？　あ、ヴォルフに襲われた？」
「んな訳あるかっ！　毎度毎度、一体どうやって入ってくるんだ、おめえは！？」

自分の部屋で寝て居たはずのミリディアの頭に「？」が一杯浮かぼうが、酔っ払って記憶を飛ばしたヴォルフの完全否定の前に、無意識でヴォルフを目指して移動しちゃったのかも、と思い込んでしまうのは。

・・・日頃の行いのせいかもしれない。

酔っぱらいヴォルフのデレ（ヴォルフ視点）（後書き）

ミリィのせいになっちゃった！？（予想外）

ウーマさん、夫を挑発するノ巻（ウーマさん視点）（前書き）

※ウーマさんのイメージが壊れてしまう可能性もありますので、ご注意いただけると嬉しいです！

※時系列は、妻が離縁の決意をする前です。

ウーマさん、夫を挑発するノ巻（ウーマさん視点）

最近、何だか僕の大好きな人が落ち込んでいるみたいだ。

僕にブラッシングしながら、何度もため息をついているし、時々ぼんやりしながら僕の鬣を撫でている。

それに、僕にぎゅっと抱きついて顔を擦り付けて来ることも増えた。

大好きな人とのスキンシップが増えるのはとっても嬉しいんだけど。

こうやって顔を擦り付けて来てくれる時は、物凄く落ち込んでいるか、物凄く反省しているかのどちらかなんだよね。

ねぇ、どうしたの？

と、髪をはむはむしながら整えてあげつつ、視線を合わせて聞いてみると、大好きな人が大きくため息をついた。

「心配してくれているんですか？　ウーマさんは優しくて、いいこですね」

うん、僕はいい子だよ？

相棒と大好きな人に対してだけだけど。

「ねぇ、ウーマさん。私、もしかして、旦那さまに嫌われているんでしょうか・・・？」

驚いて思わず、はむはむしていたのを止めて、彼女の顔をまじまじと覗きこんでしまったんだけど、どうやら、本気で言っているみたいだ。

そんなこと、あるわけ無いのに。

どうして、そんなことを思うの？

「最近、旦那さまとの会話がすごく減ってますし、なんだか避けられているような気がして・・・。」

・・・なにをしているんだ、相棒。

僕の大好きな人を、悲しませるなんて。

厩舎の外の気配を伺うと、相棒がこちらに向かってきている。

ちょうどいい。

僕は大好きな人の肩に顎を乗せて、頬ずりをして甘えた。

「ウーマさん？　・・・慰めてくれているんですね、ありがとう」

小さくて暖かい小さな手が僕の頭をそっと撫でてくれる。

そのまま少し頭を動かして、厩舎の入り口を見て、ふふん、と鼻を鳴らしてやった。

どうだ、羨ましいだろう！

という目で見てやると、突き刺さるような殺気が飛んでくる。それなら、最初っから大好きな人を不安にさせるようなことをしなければいいのに。

僕がさらに髪の毛をはむはむし始めると、くすぐったそうに笑い

ながら、ぎゅっと首に抱きついてきてくれる。ああ、かわいい人だなぁ。

それを見ていた相棒の殺気が、さらに濃度が増していく。

煽られて起き上がりたくなるのをぐっとこらえて、睨みつける。

ねぇ、相棒？

うかうかしていると、僕たちの大好きな人が、他のオスにとられちゃうよ？

「ウーマさん・・・？　って、ふぁっ！？」

僕の首筋を撫でていた手ごと、相棒に抱え上げられて厩舎から連れ去られていく大好きな人を、尻尾を振って見送った。

何が起きているのかも良くわかっていないみたいだけど、もう大丈夫だよ！

だって、メスをとられそうになって、動かないオスはいないから。

さて。

今夜の出勤は、厳しいものになりそうだし。

・・・今のうちに体を休めておこう。

ウーマさん、夫を挑発するノ巻（ウーマさん視点）（後書き）

ウーマさん、身を呈して夫を諌めてくれるナイスガイ。
夫、ウーマさんにも本気で嫉妬を向けてます・・・。

妻とウーマさんの最初の頃の一日（前書き）

妻とウーマさんの日常の一コマです

妻とウーマさんの最初の頃の一日

馬らしき生き物が家にやって来てから数日。

今日は、夫が迎えにきた馬車で出かけたので、ウーマさんとお留守番することになりました。

普段は一人で家にいますから、のんびりと過ごすのですが、今日は違いますよ！

私は昨夜のうちに用意しておいた道具一式を広げて確認しました。

大きいブラシよーし！
普通のブラシよーし！
クシよーし！
おやつよーし！

うん、全部揃ってますね。よし、それじゃ出発しましょうか。

『新しく仲間入りした馬もどきのウーマさんと仲良くなろう！計画』、発動ですっ。

驚かさないようにそっと厩舎の扉を開くと、馬が横になった状態で、もう頭をあげてこちらを見ていました。

むむっ。なかなかやりますね。

今の時間は、ほとんど寝ていると夫から聞いていたのですが。

でも、寝起きはいいようで安心しました。

寝ぼけた夫相手でさえ死にかけているんですから、流石に馬に寝ぼけられたら、間違いなく死んじゃいそうですものね。

よかったよかった。

安心しながらゆっくりと馬に近づくと、どことなく不思議そうに私を見ています。

大きな真っ黒の瞳が、どうしたの？　と、語りかけてきてくれているような気がして、私はちょっと嬉しくなりました。

いそいそと持ってきた物を一式広げて見せると、興味を持ったのかちょっと匂いをかいでいます。

「あ、これ食べれます？」

先ずは餌付けしてしまおうと持ってきたおやつのハチミツパンを差し出すと、馬の目がキラキラと輝いて、それ欲しい！　と訴えかけてきます。

手でちょっと千切って口元に持って行くと、あっという間に食べてしまって、もっともっととおねだりしてきます。

うん、よしよし。餌付けは成功ですね。

パンをゆっくり全部食べさせると、馬は物足りなそうに私の指を舐めていましたが、やがて諦めたようです。

く、くすぐったかったですけど、笑わずに耐え切りましたよ！

それにしても、口も舌もとっても大きいんですね。本当にあっという間にパンがなくなってしまいました。次はもうちょっと沢山パンを持ってきた方がいいかもしれませんね。

「ウーマさん、ブラッシングさせてくれませんか？」

目の前に広げた道具のうち、大きいブラシを手に持ってきくと、ちょっと考えるようにしてから、痛くしないでね？　と言うように頭を動かしました。

もちろん、痛くないように慎重にやりますとも！

焦げ茶色と黒が混じった毛は、私の知る馬よりも長いです。

大きいブラシと普通のブラシとクシの三種類を駆使して毛繕いして行くと、どんどんツヤが出て来て、滑らかになっていきます。

これはクシのかけ甲斐がありますね！

馬も気持ち良さそうにしていて、ついつい楽しくなって夢中で毛繕いしたので、あっという間にツヤツヤウーマさんの出来上がりです！

うん、いい仕事したな、私！

ブラッシングの成果であるツヤツヤふんわりの体毛の感触を堪能していたら、むくむくと抗い難い欲求が。

これ、枕にしたら、すごく気持ち良さそうじゃないですか？

いけない欲求を抱えて馬の様子を窺うと、どうしたの？　と言うようにつぶらな瞳が見ています。

「ちょっとだけ、ウーマさんに抱きついてもいいですか！？」

誘惑に抗い切れずに、思い切ってきいて見ると、どうぞ？　とちょっと体を動かして丁度良さそうな位置に移動してくれました。

なんてお利口なんでしょう！

私はいそいそと馬のお腹をクッション代わりにして横になりました。

ウーマさんが尻尾を私のお腹に乗せてくれて、時々毛繕いするように髪の毛をいじっています。

ウーマさん枕はあったかくて、ちょっと獣臭くて、でもそれが生き物なんだなぁ、と言う気がして嬉しくなりました。

あっという間に眠ってしまった私は、目が覚めると、ちゃんと寝室で寝ていました。

夫が運んでくれたみたいです。

そんな事が数日続いたのですが、しばらくすると夫がウーマさんを連れて出掛ける事が増え、ウーマさんクッションでお昼寝は時々しか出来なくなりました。

それは仕方ないと思うのですが、心配なことがひとつ。

たまにお昼寝したあとのウーマさんがいつもぐったりしているのは。

・・・やっぱり、私の重さ、のせいでしょうか？

妻とウーマさんの最初の頃の一日（後書き）

いや、むしろ、夫の重さ（二重の意味で）のせいです（苦笑）

もしも妻がだまされそうになったら（ウーマ視点）（前書き）

注）ウーマさんのイメージが壊れてしまう可能性もありますので、どうか、ご注意を・・・（滝汗）

もしも妻がだまされそうになったら（ウーマ視点）

今日は、相棒が一人で出かけている。
だから、僕は大好きな人と一緒に過ごせる日。

朝からハチミツパンをもらって、綺麗に体中をブラッシングしてもらった。
お昼が過ぎたら、一緒にお昼寝しようね、って約束もしているから、とっても楽しみ。

ご機嫌で昼を待っていたら、なんだか、嫌な気配を感じた。

顔を家のほうへ向けて、耳を震わせて意識を集中すると、僕の大好きな人と、知らない人間の、オスの声。

「そうですか、わざわざありがとうございます。あ、ちょっと待っていてくださいね、覚え書きを持ってきますから」
「はいはい。早めにお願いしますよ」

音を立てないように厩舎から外に出て、玄関の方を見ると、彼女が家の中に入って行くところだった。
ドアは開けっ放しで、男が中を覗きこんでいる。

怪しい。

それに、僕の大好きな人と二人きりで会話をしているなんて、許せない。

「う、うわぁっ！？」

気配を消したまま男に近づいて、服をがぶりと噛んで思いっきり首を振ってぽい、と捨てた。本当は、肩に噛みついてやろうかと思ったけど、たぶん、大好きな人が嫌がるから、優しい対応にしておいてあげる。

「どうし・・・うわっ、大丈夫ですか！？　って、ウーマさん！？」

ああ、家の中から出てきちゃ、だめだよ。こいつ怪しいよ。

大好きな人を身体で隠すようにして家の中に押しやると、戸惑っている気配が伝わってきた。

大丈夫だよ、僕が守ってあげるからね！

「あの、ウーマさん、その方は旦那さまのお友達で、私に伝言を持って来てくれたんですよ？　旦那さまがどこかで私と待ち合わせしたいそうなんです」

相棒の友達？

こんな奴いたっけ？

「いててて、うわぁっ、なんて狂暴なやつだ！」

僕はちょっと勢いをつけて首を振って足踏みで威嚇してみた。

自称相棒の友人が、大袈裟に怯えて下がるのを見て確信した。

こいつ、嘘つきだ。

こんな奴、相棒の友人な訳がない。
だって、僕たちボウドゥが狂暴なのは当たり前。
大好きな人の前だから、こんなに優しく対応しているのに、それを狂暴だなんていうような人間は相棒の友人知人の中にはいないよ。

それに、相棒が大好きな人のことを伝言だけだとしても、他の人間のオスに任せるわけがないし。

もうこいつ、踏んじゃおうかな？

と思ったけど、大好きな人が一生懸命とりなすから、僕は大人な対応をすることにした。

嫌々だけど、大好きな人と話せるようにちょっとだけ体を移動する。本当に、嫌々だけど。
ああ、でも近づいちゃダメだよ？
触れられたりしたら、こいつを噛んじゃうからね。

「とにかく伝えたからな！　ちゃんと行ってくれよ！？」

僕越しに場所の説明をした男は逃げるように去って行った。

バイバイ。
・・・またあとで。

「ウーマさん、一体どうしたんですか？」

心配そうに僕を優しく撫でる手とは逆の手に持っている紙をかぷ、と咥えて取り上げる。

ちょっと貸してね。

「って、う、ウーマさん!?　ダメですよ、返してください!」

大丈夫、全部僕に任せて!
あ、家の中に入っていてね。外に出ちゃダメだよ?
知らない人が来ても、扉を開けちゃダメだからねっ!

何度も念を押すと、ちゃんと大好きな人には伝わったみたい。
とっても不思議そうにして居たけど、ちゃんと家の中に入ってくれた。

良い子にしていてね、僕らの大切な人。

僕は紙を咥えたまま、相棒の元に向かう。
ああ、楽しみだな。

僕の、大好きな人とのお昼寝の時間を邪魔した奴らを。

・・・狩りつくしてやる。

もしも妻がだまされそうになったら（ウーマ視点）（後書き）

妻視点だと、ウーマさんはかわいい弟なイメージなのに、ウーマさん視点だと、妻のほうが幼く見えてしまう、この不思議・・・。

もしも妻がだまされそうになったら　？　（夫視点）（前書き）

妻にお留守番をさせたウーマさんが向かった先は・・・？

※ちょっぴりブラック夫なので、ご注意を。

もしも妻がだまされそうになったら　？　（夫視点）

何かの気配を感じて顔を上げるのと猛然と駆けてくるボウドゥが視界に入ったのが同時だった。

「あれ？お前んとこのボウドゥだな」

あいつはうちのボウドゥと相性悪いんだよな、とぼやきながら素早く自分のボウドゥを引いて離れて行く。

相変わらず、恐ろしく目のいい奴だ。

ようやく黒と茶色の毛並みを視認出来たところで、ウーマだと分かる。

目の前まで来たウーマは興奮で、酷く荒々しく、楽しげな気配を出している。

珍しい。

家に来てからは、妻の影響か、穏やかに微睡んでいるような状態が多いのに。

・・・なぜ、ここにウーマが来た？

普段は呼ばない限り、妻と居たがるのがウーマだ。最近は出来るだけ仕事に連れて行くようにしているが、今日は久しぶりに家に置いてきたのに。

ウーマの目が、獰猛さを取り戻している。それでいて楽しげなこの気配には覚えがあった。

狩に出たがっている。

ウーマが口に咥えて居たものを大きく首を振って投げ渡して来た。

そこには見慣れた妻の筆跡で、『旦那さまとの待ち合わせ場所』と書かれ、簡単な地図が描かれている。

・・・なるほど。

興奮しているウーマの首筋をひとなでして、騎乗する。

「あー、その様子は出るのか。殺すなよ?」

どこか面白がるようなフィリウスの言葉に小さく頷く。

「殺しは、しない」

同意するようにウーマが嘶く。

「壊滅する」

その目的がなんであれ。

・・・妻を狙った奴らに、報復を。

もしも妻がだまされそうになったら　？　（夫視点）（後書き）

こうして。

妻を呼び出そうとした彼らは、狩り尽くされ、壊滅させられてしまうのでありました・・・。

・・・妻が絡むと、このコンビ、怖っ！

夫と妻とウーマの一日（夫視点）（前書き）

時間軸は、ウーマさんが来てからしばらくした頃です。

夫、心が狭いにもほどがありますな（笑）

夫と妻とウーマの一日（夫視点）

最近。

家に帰ると、妻がいない。

いつもなら、ぱたぱたと軽い音を立てて扉まで出て来て、笑顔で「お帰りなさいませ、旦那さま」と嬉しそうに出迎えてくれるというのに。

原因は、ウーマだ。

なぜか妻に対してだけは、ボウドゥ本来の気性の荒さをきれいにどこかに置き忘れてくるウーマに、妻がなついたらしい。

時間の合間を見つけては、ウーマに会いに行っている。

もともと、どうしても参加させなければならない勉強会のほかは、ごく稀にレインという妻の友人の家に遊びに行かせるだけで、ほとんど外出させていないから、生物との触れ合いが欲しいのかもしれない。

そう思って黙認していたのだが、最近、度を越えてきているように思う。

昼に帰ってきて、厩舎にいる妻を迎えに行くと、妻がウーマの腹に寄りかかってぐっすりと寝ている。

ウーマが妻の髪の毛をかむようにして整えているのを見て、瞬時に妻を抱き上げてウーマから引き離した。

反射的な行動だろう。
　ウーマが取り上げられた妻を取り返そうと立ち上がり、荒々しい目で威嚇行動をとりかけて、ぴたり、と固まった。

「ウーマ」

自分でも思った以上に低い声が出る。
　ウーマはびくりっ、と体を震わせると、目を泳がせながら後ろに下がっていく。

「行け」

妻を抱き上げたまま、確認すると、ウーマは何度も頷くようなしぐさをして、自分で厩舎を出ていった。

ボウドゥにとって、鬣を整えるしぐさは、非常に親密な関係を意味するときく。

妻がウーマになつくのはまだ我慢できても、ウーマが妻に想いを寄せるのは、我慢ならない。
　しっかりと誰が誰のものなのか、はっきり躾なければならないだろう。

数日は使い物にならなくなる程度に、鍛え直してやったのだが。

・・・心配した妻がつきっきりになってしまったのは、誤算だった。

夫と妻とウーマの一日（夫視点）（後書き）

そしてウーマさん、妻が見ていない隙に、夫に得意げな顔を向けて、また鍛えられたり。

エンドレス（笑）

レイン&グレイン　祭り当日（レイン視点）（前書き）

予想外に好評のレイン&グレインカップルの初小話を！

と思ったら、なぜかこんな感じに出来上がっちゃいました。

あれ、なんだろう、なぜかブラック風味・・・？

レイン&グレイン　祭り当日（レイン視点）

リーフェリア祭当日。

辺りが暗くなり始めた頃に玄関先に現れた男に、思わず目の前で扉を閉めてしまいそうになったけど、それよりも早く扉を押さえられてしまった。

もしかしたら、気が変った友人が帰ってきてくれるかも知れない、と、そう思って対外的な業務は全てスタッフに任せて、家で出来る仕事を片付けていたというのに。これなら、店にでも出ていたほうが、他人の目があるだけましだったな、と思いつつ、涼しい顔で扉を押さえている男を睨みつける。

「何か用かな」

沈黙を貫く銀髪に青い瞳の元夫、グレインに、用が無いなら帰れ！　という思いを込めて口を開くと、小さく息を吐かれた。

「君は、相変わらずだな」

それが良い意味ではなく、成長していないという意味の揶揄だとわかって、むっとするが、あえて沈黙し、青い瞳をただ、睨みつける。

さっきから扉を閉めようと両手を使って全力で力を込めているのに、片手で押さえているだけのグレインは涼しい顔のままで、扉はびくとも動かない。その馬鹿力加減に、腹が立つのを通り越して、呆れてしまう。

手にナイフでも刺せば離すだろうか、と物騒なことを考えていると、グレインが青い目を細めた。

「君のいとこが怪我をした」

「は。怪我！？」

思わず押さえていた扉を全開にしてグレインに詰め寄ると、ちょっと驚いたように目を見開いている。

黒のリーフェリアとしての儀式が成功していれば、友人は、昨夜のうちに帰還を果たしているはず。それなのに今、怪我をしているということは、儀式は失敗したんだろうか。

怪我の具合によっては、明日の朝の本当の帰還にも間に合わなくなってしまうかもしれない。

とにかく、友人の怪我の具合を確認しないと。

焦る気持ちのまま、グレインを押しのけて神殿に向かおうと動きかけると、腕を強く掴まれた。

一瞬、嫌な記憶が蘇りそうになって、きつく眉をしかめると、ぱっと手が離れていく。

「黒のリーフェリアは、辞退した。今は家で養生している」

神殿に行っても無駄だ、と続けられた言葉に、体から力が抜けた。

神殿から家へ動かせるということは、深刻な怪我ではないのだろう。

「そ、うか。命に関わるような怪我じゃないんだな。良かった」

ほっとして、最後のほうはほとんど、一人ごとの状態でつぶやくと、青い目がまた意外そうに瞬いている。

「知らせてくれて、感謝する」

きちんと向かい合ってお礼を言えば、さらに瞬きの回数が増えた。

なんだ、その表情は。私は、たとえ別れた夫が相手だろうと、礼儀をわきまえるべき場面はわかっているつもりなんだけど。

と、文句を言おうかと思ったけれど、そういえば、これまで徹底的に接触を避けていたから、これだけ長く話すのは、半年振りくらいだったっけ。

「頼みがある」

「私に頼み？　なに？」

青い瞳に真剣な色が浮かぶ。

それに何か物騒な気配を感じて思わず後ずさると、手首を掴まれてそのまま外に引きずりだされた。

「一杯、付き合ってくれ」

なんで私が。

そういって断ろうと思ったのに、なんだか男の目がひどく真剣で、切れる一歩手前の物騒な光を宿していることに気付いて、言葉を飲み込む。

この思いつめたような目は、昔一度見たことがある。

ここで断ったところで、さらに不本意な状況にさせられるとわか

っているから、腹の底から不快が湧き上がってこようとも、我慢して付き合ったほうが得策だ。

「一杯だけ。それ以上はお断りだ」

つかまれた腕を振り払いながら言えば、手はあっさりと離れていく。

「ああ。一杯でいい」

妙に決意にあふれた声に、別れてから初めて二人きりになることに柄にも無く緊張でもしているのだろうか、と思っていたのだけど。

私は、グレインという男のことを、忘れてしまっていたらしい。

連れだって、祭りの余韻で混雑している酒場に行って、友人のことを聞いたりしながら一杯飲んで、そろそろ引き上げようかと思ったところで。

ひどく、眠くなった。

「・・・またか」

覚えのある急激な眠気に、薬を使われたことに気付く。

机にひじを突いて額を押さえながら、青い目を睨みつけると、抱き上げられた。

「明日の夜には、必ず帰す。手も出さない。だから、眠れ」

だから、こいつは嫌いなんだ。

また、何の説明もせずに勝手に行動して、全てが終わった後に説明する気なんだろう。
そこに私の意志は無い。

「・・・ふざけ・・・るな」

抗いがたい睡魔に飲まれる直前、こぼした言葉にグレインが小さく頷いて、こめかみに口付けてきたような気がした。

さっき、手を出さないって言ったばかりじゃなかったか？
というか、その首肯は、ふざけていない、ということなのだろうけれど。

本気なら余計に性質が悪い！

と叫ぶよりも先に、意識が眠りに落ちていく。

ああ、誰か。
・・・この男の性格を叩き直して欲しい。

レイン&グレイン　祭り当日（レイン視点）（後書き）

こ、こんな二人ですが、一応ちゃんとハッピーエンドになりますので！

道のりは、険しく遠いですが・・・（遠い目）

レイン&グレイン　馴れ初め？話（グレイン視点）（前書き）

レインとグレインがまだ新婚生活を送っていたときの一コマを、グレイン視点でどうぞ！

レイン&グレイン　馴れ初め？話（グレイン視点）

「私はどんなことをしてでも、帰ります」

初めてレインという名の訪れし者に会った時、真っ直ぐに視線を合わせて言われた言葉がこれだった。

顔も服装も全く覚えていないが、その強固な意思を宿した目をただ見つめていたのを覚えている。

帰れるかどうかも、帰るための方法も知らないはずなのに、この目の持ち主なら成し遂げるかもしれない。そう思わせる、強い目だった。

俺を真っ直ぐに見ていられるなら、仮初めの夫婦になっても問題はないだろう。

相手もここではない何処かに帰る意思は固いようだし、俺も友人である領主からの依頼分以上に関わるつもりはなかった。

「帰りたいなら、帰ればいい」

だから、そのときに言った言葉は、本心からのものだったというのに。

それを僅か二カ月で撤回することになるとは、思ってもみなかった。

紹介を受けた数日後には書類が整い、正式にレインが俺の妻にな

ったその日。

「短い間だけど、よろしくお願いします・・・私の夫殿」

これまで事務的な会話しかしてこなかった妻レインが、初めて笑みを浮かべて見せる。どこか楽しげに、からかうようなその表情に、目を奪われ、記憶に焼き付けていた。

それなのに、こんな無防備な表情を俺に見せる人間がいることに驚いたのだと、それが不快だったからいつまでもあの表情が消えないのだと、そう思い込んだのは、逃げ以外の何ものでもない。

毎日愛らしい服で、くるくると活動的に動きをまわるレインは、家のことを完璧にこなしながら、積極的に外出し、多くの人と知り合い、さまざまなことを自力で学んでいた。

それを不快に感じるのも、護衛の手間が増えるのと、敵の選定が面倒だからだと思い込み。

少しは家で大人しくしていたらどうなんだ、と酒の勢いで苦言を吐くと、レインはまたあのいたずらを思いついた子供のような楽しげな顔でにやり、と笑ってみせた。

「もしかして、寂しい？」

飲みかけていた酒に思いっきりむせる。

咳き込む俺を見て、やっぱり図星だ！　と言って笑うレイン。

「遠慮せずに、寂しいなら寂しいといえばいいのに。うんうん、ごめんね、夫殿。これからは、もうちょっとだけ早く帰って来るよう

にするよ」

誰が寂しいなんて言った!?

と噛み付くよりも先に、レインの小さな手が優しく頭を撫でてきて、動くどころか、一言も言葉が出てこなくなる。

どこまでも優しく丁寧に撫でられるのは、存外に心地よい。

寂しいなんて一言も言っていない、とか、謝っておきながら少しか早く帰って来ないのか、とか他の些末な諸々は全てどうでも良くなってしまった。

大人しく撫でられるがままになりながら。

この手が、欲しい。

ふと、そんなことを思ったことさえ、酒のせいだと言い聞かせていたというのに。

その日から、レインは当たり前のように頭を撫で、時には鼻先に口付けることさえあって、その度に歯止めがひとつずつ壊れていって。

レインが、欲しい。

・・・全てを望んでしまうまで、それほど時間は掛からなかった。

レイン&グレイン　馴れ初め?話（グレイン視点）（後書き）

可愛らしい新妻に、あっさりと落ちてしまったけれど、それを認められないグレイン。

おこたの中では、グレインはワンコなイメージ。
かまって欲しいけど、いい出せなくて、ちょっといじけている感じで。

・・・うん、ワンコだ。

妻と夫と闖入者（前書き）

夫妻のとある穏やかな日常に、ちょっと変った訪問者が来たようです。

妻と夫と闖入者

いつもの通り洗濯物を取り込んで洗濯籠に入れようとして、白いものが入っていることに気がつきました。
よく見ると、洗濯籠の中には、フカフカで、モコモコが。

「旦那さま、旦那さま。見てください！」

仕事が早く終わって、夕食前に帰ってきてくつろいでいた夫に、腕に抱き上げていたものを見せに行きました。
体を起こした夫が、私が抱えるフカフカでモコモコでとても暖かくて気持ちいい真っ白な生き物を見て、ちょっと驚いたような表情を浮かべました。

「さっき、洗濯物を取り込んでいたら、この子が洗濯籠の中に入ってきたんですよ。かわいいですよね！」

興奮しながらもっとよく見せようと夫に近づけると、夫が額に手を当てて、深く、深くため息をつきました。
夫の目が、どこまでも呆れています。

あ、あれ？
別にフカモコなこの子を飼いたいとは言っていないですよ？
野生の生き物をペットにしちゃいけないですものね。
ただ、たまたまやってきた珍しい訪問者に、ちょっとハチミツとか、ミルクとかを分けてあげたいなぁって、思っただけで。
あと、ブラッシングもさせてもらって、ちょっと体を撫でさせてもらって。

・・・あわよくば、一泊していってくれたらいいのになぁ、とか思っているのは、内緒です。

「それは、ヴァルファスだ」
「ヴァウ？」
「ヴァルファス」

ヴァルファス、ですか。
なんだかかっこいい名前ですね！

夫が片手を伸ばすと、真っ白なフカモコがかわいい顔をゆがめて、思いっきり威嚇しています。
夫に威嚇するなんて、勇気があるなぁ、と思っていたら、腕に震えが伝わってきました。

・・・もしかして。
威嚇というよりも、怯えている？

怯えを隠して、一生懸命虚勢を張っているような感じです。
・・・やっぱり野生動物は、本能的に自分より強い相手がわかるものなのでしょうか？

「だ、大丈夫ですよ！　私の旦那さまは、強いだけじゃなくて、とっても優しい人なんですから」

野生動物に怯えられてしまう夫っていったい・・・、と思いつつ、とにかくフカモコのおびえを取り除こうと、優しくフカフカでモコモコな体を撫でてあげながら話かけていると、少し落ち着いてきたようです。

「ね、抱っこしてもらってみませんか？　旦那さまの抱っこは、安定感抜群ですし、暖かくて気持ちがいいんですよ？」

私の腕の中で小さくなっているフカモコを一生懸命説得していると、いきなり夫に抱き上げられました。

・・・あのー、旦那さま？
私を抱っこしても意味が無いと思うのですが。

思わず夫を見上げると、これでいい、といわんばかりの態度で、見てごらん、と腕の中のフカモコに視線を促されました。

フカモコは、ちょっと驚いたような動きをしていたのですが、その後は妙に落ち着いたように、私の腕の中で寝息を立て始めました。

う、うわっ、か、かわいいっ！
小さくて真っ白で、フカフカモコモコが安心しきったように腕の中で眠っている姿に心を打ち抜かれました。

「かわいいですね、旦那さま！」

幸せに浸りながら、満面の笑みで夫を見上げると、夫も愛情あふれる視線で見返して来てくれました。
やっぱり、夫も小さなフカモコがかわいいんですね！

私はフカモコが起きるまで、そのまま、かわいい寝顔を眺めていようと思ったのですが、いつの間にか眠ってしまっていました。

・・・夫の抱っこは、やっぱり安定感抜群です！

妻と夫と闖入者（後書き）

ふかふか、もこもこは、正義です！（きっぱり）

妻と夫と闖入者（夫視点）（前書き）

甘めを目指してみました！

妻と夫と闖入者（夫視点）

妻が、変なものを拾ってきた。

洗濯物を取り込みに外に出たはずの妻が、真っ白いものを抱えて駆け込んできたときには、なにがあったのかと思ったが。

妻の腕の中でおとなしく抱かれていたのは、この辺りの食物連鎖の頂点に立つヴァルファスの雛だった。

・・・どうしてこんなところに、ヴァルファスの雛が？

「さっき、洗濯物を取り込んでいたら、この子が洗濯籠の中に入ってきたんですよ。かわいいですよね！」

興奮した様子で腕に抱えたものを近づけてくる無邪気な妻に、思わず額に手を当てて、深いため息が出た。

確かにモコモコとした雛の姿は可愛らしいかもしれないが。

ヴァルファスは、ボウドゥに次ぐ凶暴さで有名な肉食獣だ。

今はモコモコとした白い毛で覆われている雛だが、成獣すれば、背に生える鳥類とはまた違った羽で空を自由に飛びまわる長毛種になる。その毛の白さは、空からの襲撃に適した色合いだ。

人と生きるボウドゥと違い、単体で生きるヴァルファスは、誇り高い孤高の存在で雛といえども手懐けることは不可能、といわれているはずなのだが。

妻の腕でおとなしくしているコレもまた、その無邪気さに毒気を抜かれたのだろうか？

「それは、ヴァルファスだ」

「ヴァウ？」

「ヴァルファス」

言ってもわからないだろうな、とは思ったが、やはり、決して人に懐かない凶暴な肉食獣の名前を言っても、妻は不思議そうに首を傾げるだけだった。

試しにヴァルファスに触れようと手を伸ばしてみると、いきなり顔を上げてこちらを威嚇してくる。

少しだけ殺気をにじませても、怯えながらも威嚇してくる姿勢はそのままだった。

普通の獣なら怯えて逃げるか恭順の姿勢を見せるはずだが、雛といえども、さすがはヴァルファスといったところか。

だが、このまま妻に危険な肉食動物を抱かせているわけにも行かない。

さて、どうするか、と考え始めたところで、ヴァルファスがひときわ大きく震え、妻が慌てたように撫ではじめた。

「だ、大丈夫ですよ！　私の旦那さまは、強いだけじゃなくて、とっても優しい人なんですから」

優しく語り掛ける声に、俺も毒気を抜かれて、殺気が消える。

それと同時に、ヴァルファスの視線がちらりとこちらに飛んできた。

「ね、抱っこしてもらってみませんか？　旦那さまの抱っこは、安定感抜群ですし、暖かくて気持ちがいいんですよ？」

腕の中で小さくなっているヴァルファスに一生懸命話しかけているから、おそらく本人の前でほめるようなことを言っているということに、気付いていないのだろう。

こんな風に、目の前でほめられるのは、初めてだ。

本能の促すままに、妻を抱き上げると、なぜ自分が抱き上げられているのだろう？　といわんばかりに驚いた視線で見上げてくるのに、あくまでこれが当然だという態度を貫く。

ちょうど、殺気から開放されて安心したのか、ヴァルファスが眠り始めたので、そちらに妻の視線を促すと、素直にそれを見た妻から、悶えるような気配を感じた。

小さくてフカフカな生き物が好きな妻のことだから、寝姿に感激しているのだろう。

「かわいいですね、旦那さま！」

幸せそうに満面の笑みを向けてくる妻のほうが、よほど。

腕の中のヴァルファスに全意識を向けているのをいいことに、妻をじっくりと見つめる。

もしも。

俺たちに子供が出来たら、妻はこんな風に幸せそうに笑いながら眠る子を抱くのだろう。

ふと思い浮かんだその光景は、これまで感じたこと無い種類の幸福を伴っていて。

うとうとし始めた妻を抱く腕に、そっと力を込める。

・・・俺だけの、幸せだ。

妻と夫と闖入者（夫視点）（後書き）

無自覚で着々と猛獣使いへの道を突き進む妻と、幸せの予感を噛み締めている夫。

その幸せは、そう遠くない未来にやってくる、かも？

もしも妻が記憶喪失になってしまったら（前書き）

前のお話が、ちょっと先の未来の幸せな予感だったので、今回は、妻に混乱してもらいました（いい笑顔）

うん、それにしても、夫はマイペース（笑）

気がついたら、見知らぬ部屋に居ました。
・・・なんで、私こんなところにいるのでしょうか？
不思議に思いながら周りを見回して、硬直してしまいました。
だ、男性が隣で寝ていますっ！！
な、なんで！？
相手を起こさないようにそっと起き上がって、出来るだけ壁に背をつけるようにして下がりました。
なんだかよくわからないのですが、ちゃんと寝間着は着ているみたいです。
よ、よかったぁ。
ホッとして息をつくと、男性が身じろぎして、思わず息をとめて様子をうかがいますが、目を覚ました訳ではないようです。
とにかく、ここからでないとゆっくり考えることも出来ませんね。
私は寝ている男性を起こさないように、跨ぐようにして足側から飛び降りました！
音をたてないように気をつけて居たはずなのに。
床を踏み抜いて、バキッ、とものすごい音がして。

寝ていた男性が目を開けて、私を見下ろしました。

こげ茶色の瞳が驚いたように私を見ています。あ、ちょっと家のクマさんのヌイグルミに似ています。

「・・・あのー、すみませんが」

初対面の方にこんなことをお願いするのはどうなんだろう、と思わなくは無いのですが、どうしようもありません。

背に腹は代えられないですものねっ！

私は意を決して男性にそっと両腕を伸ばしました。

「引っ張って、頂けませんか・・・？」

そうです。抜けないんです！！

両足とも膝まで床にめり込んでしまっていて、どうあがいても、抜け出せそうな気さえしませんっ！！

こげ茶色の目と髪を持つ男性は、じっと私を見ていましたが、大きく息を吐いたかと思うと、子供を抱き上げるように両脇に手を入れて軽々と引き上げてくれました。

それはとっても助かったのですが。

どうしてそのまま膝の上に座らされているのでしょうかっ！？

物凄く自然な動作で膝に乗せられましたが、もしかしてお子さんがいらっしゃるのでしょうか。そういえば、子供がいる従兄弟にも、

よく抱き上げられたりしていましたっけ。

「あのっ！　ここはどこで、貴方はどなたなのでしょうか！？」

思い切って直球勝負で訊いてみると、焦げ茶色の目が不思議そうに数回瞬きをしました。

「家で、夫だ」

聞き惚れてしまいそうな、でも、なんの感情もこもっていない低い声が、これまた直球で答えをくれたのですが、私は受け取り損ねて、あんぐりと口を開けてしまいました。

家は、分かります。

流石にどう見てもここは家だとは思いますが、私が知りたいのは、家があるここは一体どこなのかということなのですが。

というか、夫、って、なに？

夫って、言いましたよね、今？

あ、もしかして、どなたかの夫と言う意味でしょうか！？

そうですね、お子さんもいるみたいですし、奥さんだっていますよね。

って、それならなんで私とこの人は一緒に寝ていたんですか！？

ああ、もうダメです。

頭が大混乱をおこしています。

「う、浮気はいけません！　奥さんは大事にしなくちゃダメなんで

すよ！？」

初対面の方に何を主調しているんですか、私っ！？

焦り過ぎてわけが分からなくなり始めた私を、焦げ茶色の目が不思議そうに見つめながら、こくり、と頷きました。

分かってくれたのでしょうか？

私自身、自分が何を言っているのか、よく分からなかったのですが。

ほっと息をつくと、そのまま私を抱っこしたまま、ぱたり、と横になってしまいました。

って、全然分かってないですよね！？

「寝ろ」

いや、妻子がある方と一緒には寝られません、と言うか、独身の方とでも駄目です！

赤面してしまいながら、何とか太い腕の中からぬけでようとじたばたしていると、男性が大きく息をつきました。

え、本当に寝ちゃうんですか！？

「あ、あのっ！　私のことをご存知なんですか！？」

このまま寝かせちゃいけない！　という使命感で、男性に話しかけると、ちょっと薄目を開けて腕にきゅっ、と力がこもりました。

どうしてでしょうか。

その感触に酷く安心している自分がいます。

「俺の、妻だ」

そのまま、すっと眠りに入ってしまった男性を愕然と見つめました。

「・・・って、そんな爆弾発言を残して寝ちゃわないでくださいっ!!」

起きてーっ！　と暴れる私を抱っこする腕は、緩むどころか、どんどん力が込められていき。

なぜか、この男性を寝ぼけさせたら命に関わるような気がして仕方が無かった私は。

・・・男性が自然に起きてくれるまで、大人しく寝ていることにしました。

もしも妻が記憶喪失になってしまったら（後書き）

まさかの床トラップ発動（笑）

これ、妻が記憶喪失になってしまっていることに気がついたら、きっと夫はここぞとばかりにいろいろ都合の良いことを吹き込みそうです（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9765y/

離縁します！～小話集～

2011年12月24日06時48分発行